資料

神宮皇學館本科「平安ふみわけ衣」（明治三十四年）・「四年生修学旅行日記」（明治三十八年）

――神宮皇學館修学旅行日記・満鮮旅行記（五）――

皇學館大学研究開発推進センター

・明治三十四年度本科修学旅行

期　　間　明治三十四年十一月五日～十三日

目 的 地　京都・滋賀

引率教員　二名（黒木千尋教授・尾崎八束教授）

参加学生　十余名（四年：河村政吉、二年：大林完・平部直・宮内茂一・宮尾詮、一年：泉川祐市・木積一雄・小深田長信・佐谷孫二郎・友枝照雄・春木武豊・樋口長次　他）

掲載資料　「平安ふみわけ衣」（『館友会雑誌』第四号、皇學館々友会発行、明治三十五年四月）附録

・明治三十八年度本科四年生修学旅行

期　　間　明治三十八年五月一日～十一日

目 的 地　東京・鎌倉

参加学生　本科四年生

掲載資料　「四年生修学旅行日記」（『館友会雑誌』第十号、皇學館々友会発行、明治三十八年十月）

なお、明治三十五年度以降、満鮮旅行が始まる大正十年度までの修学旅行日記・修学旅行だよりについては比較的短文のものが多いこともあって本資料紹介では原則として採り上げなかった。ただし、明治三十五年～三十七年は引き続き近畿地方への修学旅行が実施されているが、明治三十八年度から本科四年生の修学旅行が関東方面へ赴くこととなったため、その最初である明治三十八年度については修学旅行日記を収載した。

翻刻にあたっては、仮名遣いは原文のままとしたが、漢字は常用漢字に改めた。通読の便を図り、適宜読点を句点に改め、あるいは若干の中点・句読点を補い、行頭を一字下げるなど、文体を損なわない範囲で体裁を改めた箇所がある。明らかな誤植についてはこれを訂したが、当て字などは原文を尊重した。文中に、今日的に不適切な用語が使用されている場合にあっても、歴史資料としての性格を鑑み原文のままとしたことをお断りしておく。

本稿の翻刻・編集は旧館史編纂室にて行ったものである。

皇學館大学研究開発推進センター紀要　第八号
令和四年三月一日発行（抜刷）

資料

神宮皇學館本科「平安ふみわけ衣」（明治三十四年）・「四年生修学旅行日記」（明治三十八年）

――神宮皇學館修学旅行日記・満鮮旅行記（五）――

皇學館大学研究開発推進センター

平安ふみわけ衣（明治三十四年十一月五日～十三日）

平部　直

発端

京都の地、山は明媚に水は秀麗に、歴史資料の多き国内に比類あるを見ず。帝都の久を経しこと洛陽羅馬も遜色なき能はざるべし。嗚呼此千載の大都に探究旅行を試むる、吾人十数名の一行やまた多幸なりと謂つべし。請ふ今暫く此地の変遷に就て述べしめよ。

山城の国たる、其地位大和に対して背にあるが故に、古く山背といひ又開木代、山開、山代など記せること古書に見ゆ。帝都のこゝに定められしは実に桓武天皇の御宇にあり。蓋橿原奠都以来帝都の地は概ね大和、河内、摂津の三国に止まりしも、歴世遷都の結果都城の跡四十余の多きを数ふるに至れり。元明天皇の和銅二年、始めて奈良の地に大内裏の造営あり。爾来七代七十余年間は此地常に全国の首都として燦然たる文武の憲章を具備し、生歯蕃息歳月と共に繁栄の状況を現出したり。されど如何せん、崇仏営寺の政湲肆方縦の事は是れ当時の朝廷に浸漸せる痼疾なるが如く、元明、元正両女皇以後には殊に其度を高うし、時人の自ら称する名都の空には腐敗華奢の気風のみ絶えず吹き荒むのみにあらず、此地大和にありてこそ形勝を占むるの地なれ、広く全国の上に通観するときは、交通運搬の便最も乏しく、又規模の宏大ならざる、決して東北不逞の徒に威示するに足れりとすべからず。桓武天皇英邁大志、能く是等の情勢を洞察せられ、新に万乗を容るゝの地を得て、大に経綸の業を行はんと欲し給へる。即城州の地京師あるに至れるの基因なり。而も初めには天皇藤原種継の議を用ゐて、葛野郡長岡の地に遷し給ひしが、此地山崎の要塞に拠り淀川の津頭に接し、形勢頗る要を得たれど、区域猶狭隘にして帝王の都城に適せず。乃和気清麻呂の密奏を納れ、普く地形を巡視せしめ、こゝに今の京都を相し得て、更に遷都の挙に出でさせ給へり。此地青山四周巨川中に通し、所謂山河襟帯の形、四神相応の勢、雄壮重固、天下の要地、実に帝城となる可き天府国の称に背かず、爾後千年の久しき間通じて禁闕仙洞の域と定まり、火災変乱の為に多少宮地市坊の変移はあれど、昔時の雄大なりし規模今日と雖能く知ることを得べし。況や武門政治となり頼朝覇府を鎌倉に建てゝも、南北両六波羅を此地に置き、足利氏に及ぶや室町を本府となし、徳川氏に至るも二条城に所司代を置きて、畿内及西州の事を掌らしめたり。明治東遷の今日なほ京都の称と共に内裏旧の如く存し大礼儀典皆此地にて行はせらるゝを定とす。

更に地勢人情風俗を述べんか。其地勢たる陰に背き陽に向ひ、広衍高爽土厚く水清く、東に比叡如意の山あり、西に愛宕大枝の峯あり、北に鞍馬大原の高嶺深谷あり、衆巘群峯秀を争ひ奇を競ひ、走て南山崎八幡に至り相抱きて関門をなし、又鴨川東に流れ桂川西に通し、宇治川は琵琶湖より出て東南を匯し、木津川は北流し、四川合して淀川となり、八幡山崎の間を過ぎ、南流して浪華に注ぐ。攻守の略より之をいふ時は、東に相阪鈴鹿不破の関あり、大湖其間に開け比叡山其上の峙つ。西は大枝阪を越えて山陰に通じ、前に山崎八幡の嶮あり、以て正面の関門となり、後は鞍馬大悲の高山乱峯重畳蹙束、以て其背を固めたり。其出征するや、東近江に走り伊勢と美濃とに分れ、直に関左を控き以て奥羽を制す可し。西山崎に出で摂津に走り、直に中国を控き鎮西を制す可し。其事ある一相阪山崎を閉づる時は天下の喉を扼するを得、桓武遷都のこと蓋しこゝに取る所あるがためなり。剰へ風光明媚清淑、恰も神境の如く、気候の順なる夏は涼しく冬は雪深からず、天然に吾人の遊園地たり。従てこの地に住するもの、技芸家文雅の士多く、間々勁勇沈静の豪傑もあり、女子には美人多く装飾亦甚巧なり。悪弊として或は只一時の競争心にからまり、遂に万金を擲つ等のことありと雖、之がため興されたる建造物美術品は宇内に其比を見ざる所、而して比較的に人情軽薄利を貪る風あるは、多数人士の輻湊地として亦免がる能はざるの習癖ならんか。

以上を旅行目的地に於ける概略の歴史及観察となす。之が実地探究の途に上り

しは例の如く山室山へ献桜と共に十一月五日にはありけり。この日の早朝残夢を破る鐘声に厥然枕を蹴て軽装し、笑顔一番窓を開けば明星爛として鶏鳴遠し。やがて広庭に整列し隊伍を三分し、予て車にせる桜樹数十株に附随し、嚮導の一点灯を目標として校門を出でぬ。時に午前四時なり。道を参宮街道に取りて行くに、暁に及ぶ頃天候変じて時々白雨を降らしぬ。徳和に小憩して更に隊伍を整へ、揚々として松阪を過ぐ。折しも宣長翁一百年祭の当日なれば市中の殷賑一方ならず、軒毎に桜花を作りて装飾となし、処々に瀝物等を設け、一望春野に遊びたらん心地す。されど畢竟これ御世辞的の作花真の春を俟て咲く桜樹に比すれば、其高卑の度もとより言ふべくもあらず。乃車上を一瞥し、得々前進して山室山に向ふ。曇れる空は遂に破れて驟雨となり、歩行極て困難なりしかば、十一時頃に始て妙楽寺に達す。小憩喫飯後山頂に至り、移植供祭を為すこと例の如し。終て一同は雨を冒して松阪に至り、山室山神社に詣づ。この時午後三時なり。袴の泥を払ひ手を清め、祠前に整列して端厳なる祝詞を奏し、一同拍手再拝して社頭を去り、さて魚町なる鯛屋に泊し、専心探究初日の来るを迎へぬ。

初の日

平部　直

六日午前四時三十分、一行は昧爽蓐を離れて備装を整へ、奈良地方へ旅行す可き専科生を伴ひ、四時五十分発といふ列車に乗り、汽笛一声松阪を立つ。実地研究の端緒茲に開け、衆皆希望を前途の名勝古蹟に属し意気昂然、已にして東天開け日輪暉々たり。鈴鹿の関趾、元信の筆捨山、伊賀復仇のありし上野、後醍醐天皇の行宮の趾なる笠置の各駅、健津身神の遺蹟にして和名抄にも見えたる賀茂、即和銅中離宮及び駅を置かれし岡田郷、其地を経過し九時十五分奈良駅に着す。こゝにて一同下車し専科生と別る。吾一行を引率せられしは黒木、尾崎両教授なれども、黒木教授は故ありて奈良に泊し、明日京都にて会はむことを期して専科生に伴はる。吾一行は九時五十三分発京都行の列車にて宇治に向へり。木津、棚倉、井手の左大臣の山荘の跡なる玉水、長池、新田の各駅を過ぎて十一時宇治駅に着しぬ。写真器用意の為に昨日自宅に帰りし樋口氏もこゝに一行に加はり共に停車場を出づ。正午近くなりぬれば宇治川の西岸橋のたもとなる一旅店に入て喫飯す。店の眺望斜に朝日山の碧を仰ぎ、宇治川の急流或処は奇石を囲みて鳴りわたり、或処には片々たる柴舟をのせて遂に欄下におどり来り、対岸民戸寺院の翠松の間に隠見する状其他百千の態景、画くとも筆に及び難く語るとも詞に尽す能はず。休憩半時の間心に賞を尽し、それより南して平等院を訪ふ。院は朝日山と号し天台、浄土の二宗を兼ぬ。台家は三井寺に属し寺務を掌り、浄家は宇治の関白の菩提所にして世々浄土を以て当院を守り来しなり。当院は河原左大臣融公の別業なりしが、陽成天皇此地に行宮宇治院を建てられ、朱雀天皇も此地に遊猟し給ひしことあり。後六条左大臣雅信公の所領となりしが、長徳四年十月御堂関白此院を得て山荘とし遊覧の地となしぬ。其子宇治関白頼通公、永承七年に寺となして平等院と号す。名高き鳳凰堂は此院の仏殿なり。院に到るの路傍、数坪の芝生が中に一小碑あり。坪の形三角状をなし、碑に扇芝と題す傍に松樹あり。是即ち源三位頼政自刃の所といふ。史に称す頼政の事敗るゝや、乃ち釣殿に至り甲を脱ぎ端座して左右に謂て曰く、天下の為に義名を留るは武夫の願ふ所なり、汝等よく捍禦せよ、我将に従容として死につかむ、と言畢て刃に伏して死すと云ふ。松は即ち頼政が治承四年五月廿六日の当時甲を掛けし所にして、枯るゝに及び後人の植ゑしものなり。釣殿は扇芝に接して其南にあり。平等院の一殿舎間口四間（一間は凡そ九尺）奥行四間の瓦屋なり。建築古雅にして特別建造物として内務省の封鎖する所となる。故に内部を見ること能はざれども、用材の様を見るに近代のものにはあらざるが如し。融公が釣台を建て釣を垂れて楽みしもこの処なり。後仏殿となりては本尊は十一面観世音の立像、春日の作、地蔵菩薩・不動明王を左右に安すといふ。今は川と殿との間に高き堤あり、之を隔て釣し得べくも見えねば、古は河水殿の簀の下を流れしなるべし。遂に平等院の一院なる最勝院に至

神宮皇學館本科「平安ふみわけ衣」（明治三十四年）・「四年生修学旅行日記」（明治三十八年）（館史）

る。院は天台宗にして本尊不動明王、円満院宮兼務なりしが、中古天台・浄土二宗に争論生じ、公裁を仰ぎ京都勝仙院澄存の預る所となり、其の弟子最勝院澄栄住するに及び寺号となす。鳳凰堂北門の鑰は此院の掌る所、西門の鑰は浄土院之を掌るといふ。先づ刺を通じて内観を請ふ。多く並べる宝物何れも古色を帯びたり。其重なるものを挙ぐれば、平等院古絵図、後柏原・明正・後水尾諸帝の宸翰の類、弘法大師筆細階法華経二巻、本寺曼陀羅金岡筆、聖徳太子御埋の百万塔及百万仏、鳳凰堂古扉其他古文書古瓦板、等なり。古扉板の観経九品文は堀川左大臣俊房の筆なり。このもの最珍らしければ写真に取りぬ。頼政の墳墓もありと聞けば寺院に案内を請ひて、導かるゝまゝに本堂の前を通りて其処に至りしに、僅に高さ六尺の石塔なり。あはれ抜山蓋世の勇士挙ぐる所の事義に出づるも、時に利あらざれば倏ち一塊の黄土と化し去るを如何せん。一行憫然追昔の念に堪へず再拝して退く。院を辞するに当り仏殿鳳凰堂の内観を請ひしに院主不在なればとて拒絶す。依て軒下まで至るを求め、案内を得柵内に入りて外面をのみ見たり。本殿は鳳凰に象り、左右の閣廊は双翼を張るに擬し、後の長廊は其尾に象る。甍上には黄銅の鳳凰雌雄を立て風に随て旋転す故に此名ありと。然れども此名につきては他に種々説あり。宇治名所案内記といふ一小冊あり、之を見るに本殿の本尊は座像丈六の阿弥陀如来、四方の梁左右には廿五菩薩、楽器を持ち紫雲に乗ず。共に法橋定朝の作にして鑑査状のつけるもの、天井は格子にして彫棟彩梁七宝を鏤め螺鈿を填む。皆印度の奇産なり。扉背の観経九品変相、壁面の釈迦八相図は共に絵所長者為成の筆に成り、色紙の観経九品文は前に記せし如く俊房の筆にて、永禄年中頼通建立以来曾て火災にかゝりしことなく、実に八百年前の建築物といへり。去る明治廿五年この結構を模造して米国シカゴ博覧会へ帝室より出品せられたりといふは良に以あり。内務省嘗て国費七万一千円を以て修繕せられ、釣殿と共に永く封鎖せらる。堂の前に石灯籠あり、頼通の好みし所にて平等院形の名高し。堂をめぐる池を阿宇池といふ。水不潔なれど白蓮多し。此堂かく有名なる故に紀念にも残さばやと、一行簀の上に並び樋口氏を煩はして写真を取りたり。柵を出で案内者に分れ、南して浄土院前なる磴を登らんとせしに、右側に一鐘楼あり。行きて見るに甚だ古び頗る雅致あり。銘もやあらんと検するに一文字だになし。例の案内記を見るに印度製の古鐘にして、音は三井寺、銘は神護寺、形は平等院とて三銘鐘の一なりとあり。それより浄土院に就て内観を請ふ。寺僧に案内せさせて先本堂に至る。本尊は阿弥陀如来其他霊仏数多し。次に座敷に至り右折す。隘き一間あり後醍醐天皇の玉座といふに、卒然身の毛立つ心地し、当時の御有様をも推し奉りつゝ拝伏して罷る。此間の書院に道真公の自作といふ木像一体と頓阿弥の作なる人丸の像とを置けり。裏にめぐらんとせしに、床の裏に一仏龕中頼政六十四才束帯の木像を安置す。なほ左折したる処には頼政の遺物おほく、後冷泉天皇平等院の勅額、弘法大師名号、近衛家熙筆般若経、平等院形名号釜と称する鉄製の古茶釜、古朝日焼の柴船の香炉、其他上林政重法体の木像等あり。政重は丹波の人なり。通称又市越前と号す。其先は佐々木氏より出づ。岡崎に至り徳川家康に仕へ、後宇治に来り剃髪して竹庵と号す。茶を幾旬に植ゑ、大に此業に功あり。秀吉薨去の後、幾旬の騒擾に井伊直政に従て軍功あり大に家康に賞せらる。慶長庚子の秋軍起ると聞き、騎十三卒三十二を率ゐて伏見に踵る。曰く、我内府の恩を受くる久し、請ふ伍符を得て節を致さんと。鳥居元忠辞して曰く、子は茶戸なり。疾く走りて生命を保てよ。竹庵答へて曰く、我嘗て意を決す。今老に臨みて走る人倫にあらず。請ふ茶を泉壌に点ぜんと去らず。将に自殺せむとす。乃ち之を許す。茶筅を以て徽号となし、茜布を取りて巾となす。奮闘力戦終に大鼓郭に死す。時に年五十一。嗚呼亦勇士なる哉。墓も此院の境内にありといふ。前途を急げば何れか訪はずしてこゝを出で、鳳凰堂の右に出でしに右側に故久邇総裁宮殿下御筆の製茶紀念碑あり。敬礼して過ぎ、道をかへり左折して縣神社に詣る。社殿大ならず彊域広からず、庭に一大樟樹あり。此社古来祭神につき種々説ありて、或は悪左府頼長を祭るといひ、或は弓削道鏡を祭るといふ。蓋此

社は頼道公平等院の鎮守と奉したる社なれば後世の頼長を祭る故もなく、なほ藤氏の旧記にかゝる記事なし。道鏡を祭るとは如何なることぞ。僧侶を神式をもて祭りしこと古来更になく、又その拠あるを知らず。維新の際其筋より神躰を検し、予て説ありし木花開耶姫を祭るとなす。或人の説に木華開耶姫は又の御名吾田津姫と申す。吾田と県と同音に訓して縣神社といひしならんと。此説いかゞあらむ。世俗古く縁結びの神と称して参拝するもの多し。例祭は六月五日にして夜三時神輿宇治神社の御旅所に幸す。此日の参詣人は十万以上に登り、鉄道川舟何れも旅客の便を計り、宇治町は全戸皆旅宿と化すも猶参詣者中露宿をなすもの多しといへり。以て其熱閙を知るべし。縣社を出で、なほ関白頼通の政庁公文所等の遺跡をも見むと思へども、前途を急げば其侭にして北に出で鷺橋なる橋姫神社に詣る。聞きしにも似ず社殿小なり。元は宇治橋の西詰に鎮座したるを、明治三年洪水の為に今の所に流され、元よりありし住吉神社と合祀したるなりと。祭神は瀬織津姫命と定まる。神躰の様を聞くに、鬼女の裸身に緋袴を着し、左手に蛇を握り、右手に剱を持ちたる座像なりと。又縁切の神と称へ参詣するもの多し。抑も旧伝によれば此社は欽明天皇の三年始めて建ちし所、古歌にも多く詠まれて其名高く、佐保姫、龍田姫と共に三姫といひて、家道にては深き口授ありしものなり。祭神につきて旧説紛々たり、何れも取るに足らず。此神像によりて按ふに、元祀りしは瀬織津姫にはあらざる可し。欽明天皇の頃よりの神社にかゝる神躰あるはいかにぞや。恐らくは後世の社にして、仏教の神にてもある可きを、水辺にある故に、後に瀬織津姫となしたるならん。沙羯羅王といふ仏は此像に似たりとかいふ。又玄恵法印の説に、嵯峨天皇の御宇、男にねたみある女、貴船社に七夜丑刻詣をなし、此河瀬に髪を浸して祈りて悪鬼と化す。之を橋姫といふなりと。此古事談によりて其霊を祭りしにもあらんか。霊験よりいふも似つかはし。住吉社の神躰も赤色の夜叉の形にて合掌したる座像なりと。これも如何なる神を祭りしにか疑はし。出でゝ宇治橋を渡る。宇治川は此地に於て宇治、久世二郡の境をなせり。万葉集に所謂もの、ふの八十宇治川とあるは是にして、蛍の名所たるは昔より雅客の称する所、又京都より南都に通ずる喉口に当るを以て其名度々史上に見ゆ。治承中には三井寺の僧等橋を断て両岸の大軍を驚かし、元暦には先陣の争あり。承久の乱及代々の合戦に橋を引きしこと又屢々なり。産する氷魚鱸鱣鮓は試みざりしかど美味なりときけり。宇治橋は大化二年元興寺の道昭和尚之を作るよし日本後紀に見えたり。今は仮橋なれど、元との橋の長さ八十三間四尺余、巾は三間なりきといふ。往時の唐金擬宝珠を蔵する家ありと聞きしかど訪はざりき。橋の西岸に近き北側に三の間と称する欄外に少しくつきでたる所あり。豊公茶の湯の水を汲みし処といふ。佐々木高綱の先陣せしは橋より二町ばかりの川下なり。橋の東詰南側に通円茶屋といふがあり、予て豊公三の間にて用ひし釣瓶を蔵すと聞けば訪ひて、見を請ひしに、いと丁寧に出して見せつ。直径八寸余高さ一尺余の欅製なり。豊公より預りこしの体にて今日まで蔵すと云ふ。又一休和尚の作と称する此茶屋の元祖通円点茶の像を店頭に安す。通円は大慶庵と号し政久と称す。一休を友とし茶を業とす。子孫代々古川通円と称し、貴紳公家巡遊の時茶を呈せしこと多し。其外尊朝親王の御筆御茶屋の額、治承時代の物なりといふ鉄の茶釜を蔵す。やがて茶屋を出でゝ右折し磴をふみて橋寺に至る。一名を放生院といひ律宗なり。本尊は地蔵、道照和尚の開基なり。宇治橋と同時の草創にして、境内は広けれども堂宇は小なり。壺碑、道後碑と共に三古碑に数へらるゝ断碑、其庭にあり。建立以後いつしか土中に埋れて其所在知れずありしが、寛政年中此寺の溝中より発掘し、上部少し破壊して知れざりしかば、当時の人此所を補刻して境内に建て、裏面に其次第を彫つけしもの。故に此名あり。一行は紙を置き文字を摺出し又撮影して此所を去れり。碑文次の如し。

菟道橋碑

浼 浼 横 流　其 疾 如レ箭　修 々 征 人　停レ騎 成レ市
欲レ赴 重 深　人 馬 亡 命　従レ古 至レ今　莫レ知二航 芦一

世有釈子　名曰道登　出自山尻　恵満之家
大化二年　丙午之歳　構立此橋　済度人畜
即因微善　爰発大願　結因此橋　成果彼岸
法界衆生　普同此願　夢裏空中　導其若縁

川にそひて上り郷社宇治神社に詣る。又離宮八幡の名あり。松樹鬱蒼たる間に朱の華表を入り、磴をふみて社殿に至る。西面にして仁徳天皇の元年五月の草創といふ。菟道稚郎子尊を祭り、社殿は大ならねど六月八日の例祭には非常の賑なりといふ。神官長者氏は古より代々奉職し由緒深く系図正しき家なりとぞ。社務所に至り聞見する所あらんとせしに、一老媼東語を操りて社司の不在、宝物欠如、並に祭神のことを語り、併せて此地附近の参拝巡路を教へけり。乃元の道に出で川にそひて上り興聖寺に至る。汀より左に折れて門に向ふ。其間岩石を絶ちて道を通し、両側壁立、其上には桜樹多く、山吹をもて垣となし道路幽鬱たり。之を琴阪といふ。門は漢土風の例の白亜アーチの上に瓦楼あるものなり。之を入れば庭上銀沙を敷き、躑躅樹散在す。白碧相映したる景いはん方なし。本堂の前より左にめぐり廊を横切りて後庭に至れば、朝日山直に眼上の景なり。あはれ花時に来たらましかば一層の興ならましをと思ふもをかし。抑も当時は仏徳山と号し、天福元年弘誓院正覚禅尼、当地極楽寺の旧趾に新に伽藍を建設し、道元禅師に請ひて開祖となし、観音利通院興聖実林禅寺と号す。今の堂宇は慶安二年淀城主永井尚政の営みし所なり。本堂には釈迦、文殊、普賢を安置し、開山堂には承陽大師の画像を安置す。其他天竺殿、書院、方丈、侍者寮、宝蔵等散在し、皆廊廓を以て通ず。楼門を出でゝ直に右に通ずる小径に従ひて田畦の間を下る。右に恵心院と称する真言宗恵心僧都開基の名刹あれども、時刻も遅ければ見ざりしこそ残念なりしが、宇治神社の裏に出で右に朱の華表の見ゆれば、至るに社殿は一種異様の建てさまなり。これ即ち宇治神社を下宮とし之と対へて上宮と称する神社なり。神座三、中は応神天皇、右は仁徳天皇、左は稚郎子なり。中と右との二座は神座高ければ之ぞ正位なるべき、右の座は後世配祀せしものか。神明帳に宇治神社二座とあるは上下の二宮をいふか、又此社のみか、何れか識者の説を待つ。社殿の建様は俗にチヨンノ造りといふとぞ。こゝを辞し、華表の前を右に折れ小径を通して末多布理神社に詣る。社殿極めて小にして宇治神社の末社なり。宇治民部卿藤原忠文を祀る。人の知る如く忠文は天慶乱に征討大将軍たり。征討より帰るに及び勅賞あらんとす。小野宮左大臣疑はしきを賞するは賞罰の法にあらずといひ遂に已みぬ。忠文本意なく手を握りて立ちけるが、爪掌を貫き断食して死にけり。其まゝ悪霊となりて祟をなしければ、後冷泉天皇の御宇治暦三年十月七日正三位を授け、彼の別業地なる此地に社を建て、離宮明神と崇められきとぞ。大方此乱の功臣は厚賞を賜はり、藤原秀郷の如きは現今に至るまで班幣にあづかれり。然るを節刀を賜はり将軍たりし忠文は戦功の上は勿論政治上の功も赫々たるに、当時に於て既にこの憾あり。而して方今文明の大御代、其祀此の如く闕くる所あり。嗚呼何人か其責に任ずるものぞ。拝伏して去る。街道に出て北に向ふ。彼方神社は式内の神社にして、源氏物語にも椎が本とありて古哥多し。尋ねけるに思ひしにも似ず社殿小さく、庭に一株の大椎樹あり。これより余等数人別隊として三室戸寺を訪ふ。東に折れ登ること七、八町にして寺に達す。天台宗にして智証大師の開基、西国十番の札所なり。本堂は南面し本尊は二臂千手の観世音にて、宇治山の東岩淵の水底に出現せしものといふ。茶所に一人の婦人あり。就て聞く所大に益ありき。此時日は将に西山に入らむとす。伏見までとの日程なれば、急ぎ茶園の畦を走せて黄壁山に至る、其間凡そ十町。あはたゞしく山門を入るに伽藍のあたり人のけはひす。即先着の本隊なり。諸堂、伽藍及び山門の構造、一に明の建築を摸したるもの、何れも丹柱亜壁規模宏大結構壮麗、前面の桁及両柱には額及び連を掛く。筆蹟は開祖隠元のもの最も多く、高泉、千呆、木庵、即非等之に亜ぐ。堂内は悉く瓦板を敷き円座の設けあり。四境の樹木森々たる処に漢門、山門、天王殿、伽藍堂、禅悦堂、大雄宝殿、祖師堂等、二十余の諸棟参差と

して散在し、さながら漢土に遊びたらん心地す。門前は一帯に茶園にて、初夏には茶摘女の鄙歌まことに艶なりといふ。「山門を出づれば日本の茶摘歌」の句げによくいひたるなり。隠元禅師は明国福州の人なり。名は隆琦、隠元は其字、姓は林氏。承応元年将軍家綱、足利氏の故事に准じて、禅刹一宇を剏建せむと欲して、道徳優長の僧を支那に索む。長崎福興寺の住持逸然命を受け、之を支那経山寺費隠の法嗣隠元に通して其度来を請ふ。隠元乃応諾し、三年七月帰化して此地に寺を立て、黄檗山万福寺といふ。実に本邦黄檗の始めとす。後水尾上皇厚く信仰し給ひ、将軍綱吉も亦之を崇ふ。延宝元年四月二日年八十にて寂す。法皇病革なるを聞こしめし、勅して之を問はしめ、賜ふに大光普照国師の号を以てす。世称す隠元豆は此僧の齎す所なりと。此寺現今も黄檗宗の本山なり。本隊の此に至る前探究せし所は菟道稚郎子の墓なり。其様を聞くに、街道の西側にありて、土人丸山と称へ来しを、稚郎子の御墓と定まりしより、玉垣をめぐらして、濫入を禁ぜしもの、山の形略車塚の形をなすとぞ。書紀を按ずるに葬於菟道山上とあり、山の形よりいふ時は陵墓の制に似たる故に、平地に陵を築き葬られしもの、如く見えて、書紀の文と合はず。此山を菟道山せむか、後世宇治山といふは之と異なり、しかのみならずか、る一小丘をしも郷名を負はせて、こと〳〵しくいはんこといはれなし。古より伝ふる所によれば朝日山の上なりと。私に思ふに三室戸寺の南なる喜撰法師が世をうち山と詠ぜしその宇治山より、南方一帯の脈は凡て古くより菟道山といひしならん。されば古伝のま、御墓は朝日山の上にありといふがよからんか。現今の御墓は往古貴顕の墓にもあるべし、なめけなる考を憚もなくいふ罪をば許し、識者の我考を正されんことを待つになむ。寺を辞する時は将に六時ならんとす。伏見迄一里余もあれば行路に名所古蹟も多しと聞けども、是迄にて探究をも止めて、暗夜に知らぬ道をたどりつ、伏見町京橋なる旅館池六に泊す。本日吾人が旅行せし地方は世に名高き宇治の郷にして、宇治川をへだて、久世、宇治二郡にまたがれり。武内宿禰が忍熊王と戦ふとて軍を屯せし地も此地なり。応神天皇、近江国に行幸の時「ちはの迦豆怒を見ればも、ちたるやにはも見ゆ国のほも見ゆ」と詠じ給ひしも此地なり。仁徳天皇と菟道稚郎子と互に御位を譲り、稚郎子固辞して閑居し給ひしも此地なり。皇極天皇、大和飛鳥宮より近江の比良宮に行幸の時、又此地に一夜泊らせ給ひしことありて、額田王が「秋の野にみくさかりふきやとれりし菟道の都のかりほしおもほゆ」と詠ぜられしこともありて、史上に蹟を有すること枚挙に遑あらず。墳墓の如きも悉く尋ね見ましかば裨益多からましを、僅に半日を以て之を探り尽さんこと、実に艱難なることなり。よむ人よ探究の粗漏を笑ふなかれ。又此地方は古く茶の培養を以て海内に名高し。今其由来を聞くに、明恵上人が鎌倉の始めの頃、宋より茶の実を求め来り、先づ栂尾山と背振山とに蒔きしを、後此地に移し、に始まり、よく地味に適せしより繁殖一方ならず。且足利義満、豊臣秀吉等深く茶を愛せしより、宇治茶の声価従て高くなり、徳川氏は上林竹庵の子孫に世々宇治郷を支配せしめ、併せて茶の取締をなさしめたり。御茶壺調進は毎年五月幕府より数寄屋衆三名、附属員数名を率ゐ、宇治に出張し製茶買上の事あり。朝廷へ奉るは信楽壺に充つ。幕府へ納むる茶舗は皆格式ありて総て五、六十戸あり。皆買上により安楽に茶業を営む事を得しとぞ。維新後一時茶業衰退しけるが、明治十二年横浜に製茶共進会を開きしに、宇治茶は頗る好評を博し参百円の追賞を受け、時の有志者義金を募り、明治十六年夫の平等院内に見えたる製茶紀念碑建設ありしなり。聊附記して宇治の歴史資料に富むを告ぐること此の如し。

二の日

泉川　祐市

七日七時といふに各自旅装を了へ客舎を出立す。時雨初めたる空の色何となう凄しく、淀の川風痛く身にしみわたれり。やがて雨の落ちくる様なれば、一同外套を身に纏ひ着け、伏見町を東へ指して急ぐに、郊外の間近き頃、道の左手に大華表のたてるを見出でぬ。御香宮即是にして、式に紀伊郡御諸神社と記せるも同

じ社なり。境内いと広やかに、内囲は石の玉垣と土塀とを繞らし、正殿、拝殿、神楽殿、其他摂末数社の建造物あり。本社は其建築壮麗巧美を尽し、之に続いて社前の唐金作の燈籠、拝殿の紋瓦の屋根、簷材の彫刻色彩、本殿、鳥居及び花崗石の敷石等、結構装置の総ては一見吾人をして神威の高大なるを信仰せしめ、同時にまた連想を伏見の昔に及ばさしむるに足れるを覚ゆ。豊臣氏の桃山開築、徳川氏の之を承けて殊宰地とせしこと、この関係の明々白々たる以上は、誰かまた当社本殿の東照公の経営に成り拝殿の紀伊水戸両家の造営に係はるを怪むものあらんや。境内左側の苑内に一巨碑あり。近寄りて仰視すれば、天明飢饉の際に出でたる義民文殊九助が賑恤の偉績を頌表せるもの、故三条実美公の篆額を冠せり。東苑内には石を井筒に組合せ青色の一枚石を蓋とせる一泉あり。伝へ云ふ、清和御宇貞観四年九月、香水当社内に湧出し其香気四方に薫ず。病者之を吸すれば疾忽癒え、祈願者之を飲めば本懐の足らひし故、勅して御香水と名付け社を御香の宮と称し奉り、千貫の神領を賜ひ且つ社殿の改築を命ぜられたりとぞ。此泉側に絵馬殿あり、伊庭想太郎の実父軍兵衛門下の奉納に係はる木刀懸の額面は就中一行の眼眸を集注せしめしが如し。かくて一同は拝を了し、社務所に就き宝物拝観を請ひたるに、社司三木氏不在の故を以て其願望を謝され、祭神並に由緒を附記せる社図一葉を得て謝し去るに至れり。曰く、祭神は神功皇后並に満干の二玉、相殿に仲哀・応神二皇、宇倍・龍祭・河上・高良の四大神、菟道稚郎子、白菊大神を奉祀すと。創建の年代は詳ならず。されど貞観改築後も屢々朝廷よりの造営あり、元寇征韓の役共に奉幣祈願に預り、桃山築城の際其鬼門鎮護の神として大亀谷に移されしが家康慶長十年を以て旧地に復し奉り、明治十四年府社に列せられて四民安産守護の神と崇敬し奉るよし、其由緒書に見えたり。是より道を東すること十町余、行路次第に狭く、折から雨漸く降りしきり、羊腸たる山径を息ひつゝ上ること数町にして雑草の繁茂せる桃山城趾に来りぬ。抑も、此地や水淵大和守の小城を築きしに基き起し、豊臣秀吉文禄三年二月、諸国の大名に課して城舎を造営せるより其名天下後世に高くなれり。慶長元年の地震は此城に在りし豊徳両雄を驚かし、其後数年関原役起るに際しては鳥居元忠の奮戦こゝに演ぜられし等の史蹟あり。次後廃城に帰しければ今は見る影もなき所となれど、猶名のみは金城閣と称して初春観梅の候佳客の需に応ずる三階の貸席あり。脇伊平の所有に係はるとかいふ。其東方に当りて天守閣のありし痕跡あり。今只昔時の豪壮を想像せしむるのみ。されど眺望の絶佳なるは古も今の如けん。西南を望めば巨掠の大池鏡の如く、伏見全影双眸の中に集まり、淀川の長流宛ら帯に似たり。一同閣に就き休憩せし間に、家姥を叩いて種々のことを語らしめたれど、させる点なくして徒らに宇治月見台てふ地域の此山の南端にあること、其他満目悉く梅樹にして冬より春にかけて香雪樹林を埋め、之に続くの梅渓に至ては爽絶快絶風光また言ふ可らず、実に京都近郊に於て観梅第一の勝地を占むといふを耳にす。桃山に入て観梅を説かれ、旧跡を尋ねて今を聞くこと多し。一行皆唖然としてこゝを去りたり。前進暫くにして三軒屋といふ所に達し、尋で山を下り兵営の横に出でしに、昼盗賊の難に懼れる一屋あり。あたりの騒ぎ一方ならねど吾人の探究すべき事蹟にあらずと、桓武御陵の在処を尋ねつゝ尚行くに、乍秋風の松より松に入り梢に渡る音いと高く、蕭々として降る雨の雫なす緑葉の下は白砂整然として箒痕のあり〳〵とたてる所に来着きぬ。是は言ふ迄もなく柏原御陵にして、前方に至るや一同拝をなし、兆域を知り置かんとすに制札の瑞籬内遠き処に建てるより、双眼鏡の力によりて其二百四十四間なるを明むるを得たり。蓋柏原御陵に就ては徳川氏の末諸説紛々として輩出し、何れが真陵なるを知らん様もなかりしに、慶応年中、谷森種松ぬし十数年踏査歴尋を積みし結果、遂に此地に発見せる旧陵を確実なりと唱へ、為めに柏原山陵考を著はして其考証を世に公にしたりしなり。明治十三年二月、官之に拠て此地に確定せられしことなれば、吾人亦疑を容るゝに余地なきを信ずるなり。平安通誌之に閲して説く所頗る詳し。されど今略して掲げず。これより一行は陵道並樹の間を徐ろに下り、街道に出でゝ右に前進す。

行きて遂に大亀谷村大字深草の伊達町に達し、こゝに仁明天皇の深草陵を拝し奉れり。貞観三年の四至の勅定、式の兆域を検すれば頗る広きが如しと雖今は内囲百廿九間七分なり。榊を外囲とし、内囲には石垣を廻らし、げに清浄に見えなさる。此御陵より少しく前に当り谷口の常蓮華寺といふが内に「人王五十代桓武帝御陵」と標記せる石ありければ、入りて其場所を尋ねしに、僧侶答へて本堂背後の丘阜なりといふ。近づきて見るに、雑木茂生し荒廃いはん方なし。蓋是一度多数説者の桓武御陵と見做し寺僧、今俄に廃絶せしむるに忍びずして標石を存し置くものか。一瞥を払ひたるまゝ勿々にして走り去り、尋で一寺に入らんとせしが、名もなき大谷派の末寺なるを知て蒼忙之に遠り、北西一町半計を往いて嘉祥寺に至りぬ。嘉祥三年の草創、僧道雅の開祖なる、仁明帝の勅願所、仁寿元年清涼殿の下賜ありたる、何れ疑なき史上著名の巨刹にはあれど、今境内とする所は僅々数畝の外に出でず、殿堂の建造亦甚だ微小なり。一行の入るに際し、坊の椽端に佇める一僧のありければ、就て質すこと多し。彼れ本堂の左側なる高九尺許の花崗石の法華塔を指して曰く、塔身面の法華塔の字は光孝天皇の御震筆を刻せしにて、内には古く仁明帝の御分骨と法華経とを収むといへど、分骨とは虚伝にて爪髪なり。此塔元来五ヶありしが今は只此一つを残せるのみと。本堂正面の立額に就ては曰く、嘉祥寺とある三金字は小野道風の書といひ伝へたりと。本寺に接し北隣りに安楽行院あり、仁明・後深草・伏見・後光厳・後円融・後小松・称光・後土御門・後柏原・後奈良・正親町・後陽成十二帝の仙骨を納奉る聖廟にして、二寺、始めは異なり中世以降一寺となり居しを、維新後十二帝陵は宮内省の直轄となりしなり。陵の周囲百四十六間と標記せらる。是より鉄道に沿ひ西北に行くこと四町余、所謂深草少将の三本竹を訪ひしに、豈図らんや三竹を囲へる柵前に松尾秀然と記せる木板あり。疑はしきまゝ隣家に就て尋ぬるに、其実瑞光寺の開祖秀然の墓に過ぎずと答ふ。一同茫然として去て瑞光寺を訪ふ。当寺は法華宗にして仏殿西に面す。本尊の釈迦仏は坐像にして見る所丈け二尺斗、彫刻細美なれど作者の名伝はらず。聞ならく本尊は五臓六腑及脈洛等を具ふと。明暦中興の祖に元政上人あり、一行は親しく「元政草庵」と刻せる門額並に「上人旧跡草山瑞光寺」と記せる標石を注目したりき。之に隣りて一大法華寺あり。こは延慶年間、日像の開基に係はり、妙顕寺所属の大寺七面山宝塔寺なりき。第一門を過ぐれば第二の朱塗の楼門あり、本堂・鐘楼・廟塔、整然として所を占め、燦然として光を放てり。廟塔の背後に七面天女の塔あり。此より七面山を上ること八町余に七面社及七面滝あり、尚奥に入れば霧が谷ありといへど行かず。寺を出で直に間道を走りて荷田翁永眠の地を稲荷の墓所に探りぬ。翁の墓は塁々たるこゝらの墳墓中僅一坪許、限るに石の玉垣を以てし、苔むす地盤の前後に大小二個の碑石あるもの即是、前の墓は高さ五尺巾四尺厚八寸許の天然石にして、表面に「荷田羽倉大人之墓」と刻み、背面に「元文元年丙申(辰)七月二日没時年六十八、明治三年庚午三月従六位守大学博士平朝臣鉄胤謹書、明治辛未(四年脱)二月平田先生及門人中建之幹事角田忠行池村邦則」と記し、後の小墓の表面には「羽倉斎荷田東麿之墓、元文元年歳次丙辰七月二日」と刻み、裏面に「寛保二年歳次壬戌七月三日建之、従四位下行摂津守荷田信名宿禰羽倉老中荷田信満」と記しありけり。知るべし、前の大墓は人の見安からん様後より補ひしものなるを、玉垣は其折に作り繞らせしならん。翁は従三位信詮宿禰の子、本姓は羽倉氏にして、世々洛南稲荷山の祠官たり。名を斎、又は東麿といふ。夙に社務を弟信名に譲り、国学を唱へ復古を以て自ら任とせらる。学、国史・歌書・律令格式に精通し、著はす所、万葉集童蒙抄・伊勢物語童子問答、出雲風土記考、斉明紀童謡考、類聚三代格考、春葉集等あり。終世恋歌を詠ぜざりし気慨、交友大高氏の企挙を助けたる義胆、何ぞ一は高くして一は其大なるや。一行は既に宣長翁の墓に詣で来り、今又其祖師を墳墓の地に訪ひしのびぬ。蓋希望の半は達したりといふ可し。かくて稲荷神社への道を樹林の間に覓め、厳然たる朱の大華表、唐金の唐獅子など望見せらるゝに、大宮能売、佐田彦、宇迦之御魂等諸大神の威霊赫灼炳著なるを仰ぎつゝやがて社前に着きぬ。

時に正午にして、降雨のやみもなければ上下五社の参拝を了るや否や社務所に就て来意を述べ且つ休憩の請ひに出でたり。広濶なる哉稲荷山の社域、本社、若宮、拝殿、絵馬殿、宝蔵、輿蔵、御供殿、楼門等の建物鱗々甍を並べ、大小朱の華表は際限もなく背後の山に拠て建て連ねられたり。美なる哉神域一面の景、亭々たる喬杉棟屋を囲みて天空に衝き出で、翠紅相映ずる処、又金色燦爛として光彩を放つなり。寺院仏閣の宏壮華麗なるをのみ目に見たる一行の意底は、是に至て始めて稍強きを覚ゆるを得たりき。社務所には曩日本館より紹介状を発しあり、且つ尾崎教授の旧知氷室・渋谷二氏の所員たるありしかば直に迎へられて、一行は脚絆を解き鞋草を脱ぎ案内せらるゝまゝ奥座敷に着きて憩へり。禰宜桑田氏はじめ右二氏の慇懃なる挨拶あり、尋で昼食を供せられければ、謝するに辞なく之を食し終はるに、渋谷氏続いて境内案内の労を貸されき。こゝに一行の先づ拝観しつるは御輿庫に蔵せる五基の神輿なり。其内極左の御輿は近く明治三十二年の完成に係はり氏子不勲堂村より奉納せしものといへど、全体金細工を加へ煌々としてあたり眩く、屋根下に施せる翁の福稲を荷ひたる彫刻、又四隅の柱に刻める紅葉の深彫等の如き、精巧を尽せること実に驚くにたへたり。他の四基は基出来年月詳ならねど、美麗なるは言はずして明なり。而も眼前の形態は是れ庫裡収蔵の折柄にして祭時飾付の諸品は今悉皆撤去せられて各村民の手に保管しありといふ。祭時の美観果して、何斗ぞや。五基の中央にあるは独り六角状の鳳輦作りにて、他は皆四角形なり。祭日には本社の御神体前者に遷し奉られ、他の四基夫々御神体を載せて、先づ伏見街道を北に、七条橋を渡りて九条村の旅所へ渡御ありといふ。又何れも京都にて製作し、之が入費は各村幾年となく寄附金を蓄積し置き、其額莫大なるに達したる時製作に着手なすとぞ。かくて写真には位置の便宜上其極左なるを撮影してこゝを立去り、尚導かるゝまゝ社背の命婦谷に至り、右手に高六尺巾五尺許の青石の碑あるを見たり。是は延元の昔、後醍醐帝の花山院を逃れ玉へる夜、道路暗黒にして咫尺を弁ぜざりければ、天皇当社前を御通行の節、一首の歌を詠じて祈らせ給ひし、其の歌を刻める碑なりき。碑より奥へ山を上ること二、三町、稲荷三峯の二を望み得、又九十九谷の幾分を想見し得しなり。已にして山を下り、再社務所に入りて宝物を拝観す。今其重なるものを挙ぐれば、古文書類に於て雑訴決断所牒、足利三代並義政の願文下状総て四通、豊臣時代の朱印下知状総て八通、この外天正十年と十七年との検地帳あり、徳川三代の朱印も備はり、後水尾天皇の震筆短冊もあり、神宝類に於ては古剱八振、命婦御衝立二基、稲荷宮古額一面を始め名作の御剱数個あり。一行は心漸く急がるゝのみならずこの上所員を煩はすことの甚非なるべきを思ひて、御神宝類は我より之を謝し、古文書の総てをのみ備らに閲覧したり。雑訴決断所牒をはじめ珍らしき二、三点は文を写真に撮影し、其他は書き写しぬる中に、最簡単なる秀吉の朱印書を掲ぐれば次の如し。

当社家境内一地子以下事一令免除訖永不可一有相違者也

天正十七　　十二月朔日　朱印

稲荷社家中

かくて境内を立出でしは午後も二時半に垂んとせる時なり。

第二日午后

河村　政吉

懇切至らぬ隈なき稲荷神社の神官諸氏に厚く謝辞を述べ、本社並に境内荷田社の前に別れの拝をなし了はりしよりは、一行は只管に東福寺を指して街道を北へと進み行きぬ。朝来蕭々として征衣を霑し、雨も既に残りなく晴れ行きて、輝々たる天日今は仰がるゝに至れり。東福寺は稲荷を去る僅々数町の間にあるを以て、兎角語ひつゝ行く程にいつしか境内に入りぬ。

寛元の昔、藤道家が洪基を東大に亜ぎ成業を興福に取て創業し、殿宇洪大七堂伽藍全備して輪奐の美を競ひしそのかみの面影も今や知るに由なく、広漠たる寺領の草離々としていたづらに追想の念を増さしめ、堂舎の再建に従事するあれど

も夫れ真にいつの日か其の完成を見んかな。然れども恵日山より流出せる、潺々たる渓水にわだかまれる通天橋のみは依然旧形を存し、橋柱数丈、上に屋あり、高欄を設く。構作優雅高尚にして、梁間に「夫以者這通天活路、高哉吐此長大橋、檀越太閤秀吉、芸州安国恵瓊鼎建、慶長二丁酉三月日云々」とあるなれば、普明国師が造作後、豊公の再建に係るものといふべし。試みに身を橋上に置きて俯瞰顧望せんか、橋下断崖数仞の渓水流かすかに音を発しつゝ碧苔をかんで走り、楓樹は高く枝を交はして渓水に己が嬋を映じ競ふ。立田姫もこゝのみは心殊に織りなしけん、薄く濃く染めなしたる紅葉の色々青繍紅錦を連ねたらんが如く、亭榭は点々樹間に在りて客待ち顔なるも面白しや。こゝを過ぎて二町許おくまりたる所、月輪山麓に藤原兼実の墳墓あり。前には拝殿をしつらひて八角形の廟は其の奥に存す。鎌倉幕府の当初、才学識見一世を蓋びし九条家の祖は此の地下にねむれるなり。あはれ藤波のゆかりの花の千代かけて匂へるも君が遺徳とやいはまし。

さて南手の山上に尋ね行けば、こゝには崇徳院天皇の中宮皇嘉門院の御陵と仲恭天皇の御陵とのあるにぞ恭しくぬかづく。少し離れたる明治戊辰の戦死者四十七士の墳墓をも吊ひ、道をかへて廟所の傍をたどり、荊棘をはらひ羊腸たる坂路を登りて泉涌寺に向ふ。

行く手の右に当りて生垣をしつらひたる御墓のありければ、近づきて御墓標の文字を伺ひ奉るに、恐くも前神宮祭主久邇宮殿下、叔子内親王・守脩親王両殿下との御墓にてありければ、一行は謹みて一拝す。そもや久邇宮は維新の初め御心をいたく王事に用ゐさせ給ひて、竹の園生の御身ながらも、いそしみ給ひけん高き御功の程はいはずもあれ、其の神宮祭主とならせ給ひては令旨を下して我が館を起さしめ、以て教育の普及せん事を計らせ給ふ。殿下神去りましてよりこゝに十年、學館は日日昌隆の域に進めり。只己れ等學館に教をうくる数年なれども、学進まずして御心の万分に報いまつるの日甚だ遠きを憾となすなり。かくかこちつゝ猶山路深く分け入ればやがて泉涌寺大門の前に出でぬ。峨然たるこの大門は即ち泉涌寺の正門にして、永禄十一年御所の南門を朝廷より寄進せられて築造したるものなりとぞ。正面に「東山」と題する扁額あり、張那之の筆にかゝるものにして、人或は此の門の数学上の高大を問ふあらんか、横三十三尺梁行二十九尺なりと答ふべし。大門を約一町隔てゝ位せる高楼は仏殿の本堂にして、寛文八年十一月徳川家綱の再修せるものなり。蓋し応仁の大乱に当て諸堂は悉く兵燹の禍にかゝり空しく烏有に帰せしをこゝに至りて復興の端緒開け、境内漸次其の旧観を装ふに至れりといふ。殿内安置する所の仏像は釈迦弥陀を本尊とし、伽藍三祖像各左右に列し、特に天井の蛟竜は探幽の丹青になれり。仏殿の右方に浴室水屋、後方には釈迦仏牙舎利を安置せる舎利殿あり。猶後方に巍然たる大夏双立せり。一は霊明殿、他は方丈なるべし。抑も当寺の沿革を尋ぬるに、斎衡の昔、左大臣藤原緒嗣、僧神修の為に已に第宅を喜捨して一宇を建立し、初め法輪寺と号したりしが、後改めて仙遊寺といふ。爾来経過幾百年きすが、伽藍にも盛衰の理はまぬがれ得ざりけん、いたく荒廃に帰し、其の寺跡は和州の刺史中原信房の有する所たりしを、建保の頃、彼が帰依最も篤き俊芿に此の旧跡を与へて堂宇を建立せしめたり。此時堂傍より清泉湧出したる故を以て又泉涌寺と称し、四宗兼学の道場として旺盛を極むるに至れり。其の寺域、古は二十三万有余坪ありしといへば勢力甚大なりし一班を推知するに足るべし。老松古杉は蓊鬱として殿堂楼閣を囲繞し、真に俗界を超越す。其の後方にある月輪山中には四条天皇以降歴代の帝陵累々として存せり。掛巻も恐き先帝先后は此の山の底津岩根に鎮りましつゝ国しろしめし給ふあり。一行は遙に山上を拝み奉り、それより今熊野を訪ひぬ。頃は午後五時を過ぐること既に半にも及びやしたりけむ、夕陽山腹に没して光なく、晩鴉しきりに叢林をさわがし、鐘声又暮色を伴ひて来る。時間の切迫は余輩をして長く調査に従ふの余地なからしめたりと雖、其の今熊野たるや実に久しく止まる価値を有せざるなり。徒に三十三番札所なりといふのみにして、微々たる小堂訪ふ人も絶え〳〵に、螽蟖のなく音をや読経の声とも聞かばきかなん。かくて夜

のとばりの益々黒くなり行くまゝに、歩みを急ぎつゝ、劔宮熊野神社の前に拝礼し、又蓮華王院、博物館等の外観を一瞥し、建仁寺通を北へと三条通橋東詰なる予定旅館に着きし方に七時半なりき。

第三日午前

河村　政吉

暉々たる朝暾に促され旧都踏査の初日たる八日午前八時、一行は東山方面にわだかまれる名勝古蹟を査察せんとの希望を荷ひ、武徳殿を願望しつゝ先づ平安神宮に詣づ。武徳殿はもと天子親臨して駒牽、御馬奏、騎射、競馬等を観覧し給ひし所にして、其の当時に於ける荘観は弘仁内裏式、貞観儀式、延喜式、西宮抄、北山抄等にて吾人既に之を熟知せり。今や又再興せられて天下武道の中枢となり、名ある劔客槍術者此に会して斯道の修練に勤め、天下の木鐸となりて其の隆盛を企図しつゝあるは豈喜ばしき現象に非ずや。武徳殿前を過ぎて右傍門を入れば直ちにこれ官幣大社平安神宮の境内なり。碧瓦丹柱巍然として天表に立つ楼閣は平安式技術を模倣して作為せる大極殿なり。神殿は其の後方に位す。抑も大極殿は朝堂院の正殿にして或は最大殿と称し又大殿といふ。凡そ国家の大儀、登極の大礼は必らずこゝにて行はれしものにて、桓武帝平安京建奠の当時は最も叡念を留めて築造せしめ給ひ、規模宏大結構華麗、瑠璃の瓦金鐺朱楹、翬飛の観輪奐の美至極を尽さしめ給ひし者なり。其の左右にありて屋上各四小閣を有せる二楼は蒼竜白虎にして、廊を以て大極殿に連る。大極殿基を去る十数間、竜尾壇あり。中央朱欄を設け、東西に石階あり。又数十間、応天門あり、朱碧燦爛たる二重楼門なり。凡そ此等の建造物、そのかみの盛観偉図にはもとより及び難きも、猶よく昔日の面目をあらはせり。こゝに一行は特殊の待遇を得て、大極殿上にて神宮を拝し、神酒を賜はり、又鳳輦を拝観し、後苑を徘徊す。因て其の優遇を感謝し、去つて歩を金地院に進めぬ。金地院は初め足利義持、僧徳基に帰依し、山城葛野郡北山口寺基を寄せて創建する所、後南禅寺境内に移す。家康の覇業をなすに当り其の顧問に備はり政務法令にたづさはり文学収聚に努力して大功ありし崇伝は即ち当院の住持たりし者にして、金地院に異彩ありと感ぜらるゝは一つに此の人のこの関係あるに由来す。院内明智光秀の寄進したりと称する門あり、名づけて明智門といふ。其の所蔵にかゝる宝物には観察の労を吝みて南禅寺に入りぬ。

五山の筆頭に位せる南禅寺は、其のかみ亀山院の離宮を喜捨して禅刹となされしに基くものにて、初め上皇此の土の山紫水石巌の清雅なるを愛し、弘安中、離宮を上下の二宮に別ちて営造し、宮殿林泉共に荘麗を極めしめ、遷りてこゝにまします。後宮中恠ありければ、普門を召見して之を祷はしめ給ひしに、竟に又事なかりしを以て普門に賜ひて寺となさしめ、上皇は上宮にありて自ら禅法を修め給ふ。後更に大仏殿、祖堂等の増設あり、一時は楼閣伽藍巍々として金碧熒瑾を極めたりしも、応仁の兵燹後はいたく荒廃に帰し、後陽成帝の清涼殿を賜ひ、徳川氏の桃山の殿宇を寄贈するあり、綱吉の母の南禅院を修するありて、稍往日の面目を見るに至りしより、されど近年の火災後寺内又寂寥たり。現今の山門は寛永二年藤堂高虎の再建せし所、閣上には大坂役戦没従者の霊碑を安置せりと伝ふ。又門前に存せる高さ二丈余軸長五尺六寸廻り一丈七寸余の大灯炉は寛永五年佐久間大膳亮勝之の寄進せしものなり。

山門を入るに卒然中央に立てる本堂再建の木標はあはれ喜捨意の如くならざるを悲むに似たり。本堂再建地の左方に当りて亀山院の御分骨所及び後嵯峨院中宮大宮院姞子の御陵のあるありければ近きて一拝し、直ちに御所遺物の方丈に入りて什宝を見たり。方丈の前庭は小堀遠州の作にして、名づけて虎の子渡といふ。奇石磊々たる間点綴するに花木を以てし、別に巧妙を用ゐず、而も風致の極を致せり。各室に掛くる所の画幅及び襖障子は何れも和漢名匠の揮毫せざるはなく、今左に其の重要なるものを列記せんに、先づ柳の間には狩野探幽の筆にかゝる画幅六軸、麝香間には趙子固の竹画、勝定院殿御筆の軸一個、当清涼殿拝領由縁書六幅あり、御昼間には吾人をして絶叫せしめし明兆の釈迦・文殊・普賢三像幅並

びに狩野永徳の二十四孝の画幅一軸あり、西の間には思恭の涅槃の画、牧渓の中尊観音、子果の山水幅各一軸、鶴の間の諸幅に次ぎて虎の間には水呑の名高き探幽の筆にかゝる襖画の虎あり、別に啓書記の達摩、林良の蘆鴈、張思恭の十六善神各一幅は吾人の感歎を止め能はざりし所にして、此の外後陽成天皇御所持の御扇を張りたりといふ扇の屏風四双、如何にも美々しく、大元国師宗論の節後醍醐天皇より拝戴の御輿一個は甚だ珍らかに覚えたり。仔細の観察の漸くに終るや、天授庵に転じて細川幽斎の墓を訪ふ。墓碑は約一間半四方の堂中にありて、其の左に位せるは藤孝の塔、右なるは夫人の塔たり。又幽斎の愛人たりし従五位下伴朝臣景興の墓あり。彼れ玄旨法印や素と岸和田城主細川元常の義子たり、而して才文武を兼ね歌道の蘊奥を極む。これを文学上より見れば暗黒界の一明星たるべく、之を武人界にしては武勲赫々たる一偉人、一行の其の墳墓を訪ふ豈好奇の為ならんや。

南禅寺にのみ精細なる査察をなし得ざる一行は、其の側門を出でゝより所謂秋は紅葉の永観堂へと指して行けり。本来は聖衆来迎山禅林寺と号し、又無量寺院の名あり、俗に永観堂といふ。是等の寺号に就ては俗説の存するあれど、要するに皆取るに足らず。堂の起原は初め東山進士藤原関雄の山荘なりしを、斉衡年中、真紹僧都の請ひて仏刹とせしものなり。門を入れば右方に蓮池あり、池中の小島には弁天祠あり。沿辺の一円は楓樹枝を交へて参差し錦雲碧水に映じて大なる美観を極む。通天橋上払はれし嘆賞の辞又我等に由てこゝに繰返さるゝこと数次なりき。やがて又歩を進めて若王寺神社を拝す。聞くならく後白河法皇篤く紀州熊野の三所権現を尊崇し、行幸三十余度にも及べとなほ満足し給はず、其の地京畿を去る遠きを以て三所権現を輦穀の下に分祀せんと欲し給ひ、遂に此の地を卜し那智山の土砂を運搬せしめて勧請し、皇居の正東なるを以て正東山と号し、又熊野権現の若宮女一王子の神名に因て若王子と称し、屡臨幸ありて崇敬を尽されたりといふ。されば往昔は神殿壮麗楼門廻廊囲周して祭祀も亦甚だ壮厳を尽したりといへども時運転変、今は数宇の小祀覚束なくも存して、東社には国常立神、中社伊佐那岐神、西社伊佐奈美神、若宮には天照大神を祀り、末社には蛭子神を奉祀せり。然れど社背の山は梅桜楓樹陰森たる老杉の間に点見し、巌石峭立する所数多の瀑布白をさらして渓谷を流れ伝ひて涓々たる余韻あたりに聞ゆるあり。

これより鹿が谷に向ひて道を辿り、先づ安楽寺、次に法然院の両道場を訪ひぬ。何れも源空の浄土唱説に深縁ある旧跡ながら、前の草庵には荒廃蕪雑、衰亡の日将に迫らんとするけはひ見え、後の修法所には四境広固にして建造作築の模様何となう余力あるを示せり。されど一行は安楽・住蓮、松虫・鈴虫尼等の坐像を閲覧撮影し、又熊谷の遺物外二、三点を一覧し、当寺の由緒をも質す所あり、且つ割籠を御して暫し休憩す。法然院に在つては殆んど何等の問ふ所なく境内を辞し去れり。そは前途多忙なる感じの漸く起りし故にして、然る感念の起りは主として銀閣寺を間近に控へ居るに基因す。

その中　宮尾　詮

午后一時銀閣寺に着く。寺は如意嶽の北月待山の麓にあり、文明十五の年足利義政世務を弟義視に譲りて卜居せし所、当時天子勅して東山殿の号を賜ひ、延徳二年彼れ没去の後は遺命によりて慈照寺と称せり。蓋し彼の法名を慈照院と称せしによる。入て銀閣東求堂及林泉を歴見す。東求堂は義政在世の持仏堂にして、法衣を着せし義政自作の像及観音の像とを安置せり。東求堂同仁斎の二額は義政の筆、今は取はづされて唯観客の見世物となり居るも憂てや、大方銀閣寺の西金閣に及ばざる世評の定まれる所なれども、東北隅四畳半の一室は公が数奇を尽しゝ者にて、後世茶室の濫觴又こゝにのみ見らるべきものなり。今見る所、北中窓の腰障子四枚は永納の筆になれる琴棋書画、左右壁張には相阿弥の画蘭、中窓の西に違棚あり、其下袋戸は元信の梅、西の小襖四枚及び南の一枚は相阿弥の小禽蘆葦図、南の襖二枚は応挙の山水なり。一休の筆になれる掛軸こゝに装置せらる。

林泉は即相阿弥の経営せし所、銀閣は其一畔に屹立して二層をなし、下層を潮立閣、上層を心室殿といふ。全部構造高雅奇古なり。固より工を竣へざるに義政の卒去せしことなれば、銀閣の只名のみなるは怪しむに足らず。閣上の眺望東月待山の形勝より林泉の景趣悉く眸中に集まりて妙絶真なり。奇巌怪石こゝかしこに散在し、一木一草皆名品を択び、一石一竹悉く其来歴あり。遊べば歩々変化生じ、到処光景転ず。橋に分界近仙臥雲竜背等あり、石にも竜幡蹯虎落星濯縷等あり、月待山の麓に一小瀑布あり、瀑布の石を洗ふ処楓樹葉を繁らして其上に照り白砂積まるゝ所向月台銀沙灘など空地も名を成せり。山陽の詩あり、「大樹蕭々秋帯レ風、無レ如猿火(夫)各称雄、独有二玲瓏数拳(拳)石一、従レ君建二置小園中一」。什宝の見るべきものあり、今二、三の画幅を記せば、渡唐天神の像一幅土佐光信筆、山水の画一幅相阿弥筆、冬夏の山水二幅呉筠筆、不動明王画像巨勢画或は云公望等にして、義政の愛玩せしといふ器具調度は其数流石に多く、最珍らしきは例の如く撮影を試みたり。巡覧終はるや小僧茶室に案内す。一椀の抹茶に労を慰め、乃門外に出で丘を降る。神楽岡程近く突出して我等を迎へ、如意嶽は頂上明かに大の字形を読まして一行の去るを送れり。行く事二町、岡の東南真如堂に達す。堂は鈴声山真正極楽寺の本堂なり。数々遷移火災の厄を経しことゝて旧時に著かりし仏像の名作殿舎の壮厳復見るべくはあらねど、寺域殆んど一万六千坪、三(元脱)大師堂、方丈、経蔵、善光寺如来堂、地蔵堂、鐘楼、薬師堂、稲荷社等処々に散在し、老楓数十株鬱然枝を交へ、石燈数十級其間に班点す。此日適々稲荷社の祭事にあひ社前には少女舞おもしろく堂に読経囂し、我等は露店の触声に咽びてこゝを出で斜に丘陵を上り、陽成天皇神楽東(岡脱)陵を拝し奉る。封土高さ一丈余兆域周囲八十五間六分、陵上松檀並び生ず。愈丘陵を上れば頂上神楽岡に達す。別に小阜をなす処矮松叢生し最も眺望に富めり。西、吉田の里なれば、一に吉田山とも称す。延暦年間天皇の行幸ましませし事もありきといふ。こゝ又松茸の産地と見え、手に籠持てる姫御前の秋雨に邂ひて三々五々狼狽せるに逢ひぬ。薄暗き木葉に埋れる坂路を辷ればやがて神明堂、尋で吉田神社の境内に入りぬ。地は鬱蒼たる老杉を負ひ絶崖を控へて頗る神境に適し、神社は武甕槌神、斎主神、天津児屋根神、比売神の四柱を祀る。初め貞観年中中納言藤原山蔭、春日社を勧請し祀を創建せし所、当時吉田山の西にありしが後世今の地に遷し奉りしなり。伝へ云ふ、山蔭神に祈て曰く、若し我宗人にて皇后に立つものあらば必らず此社を官幣に預からしめ奉らむと。而藤原氏は世々外戚となり門族大に盛んに、吉田の官祭は一条天皇以後屢々行はれて明治四年六月竟に官幣中社に列せられたり。祀職は永延中卜部兼延社務となりてより裔孫之を世襲す。吉田山とは即ちこれなり。参域路のあたり広く高からぬ堤は左右に築かれ賤しからぬ大松の並立てるは真に高潔に、摂社末社さては神輿庫、社務所など境内所々に鱗次したる亦甚壮厳なり。中腹の太元宮二枚の額は嵯峨、土御門二天皇の御宸筆なりとか。孝明天皇御寄附の藤なりといふが本社の左岩崖の間に垂れて花期を待てり。此日宮司不在なりければ、一行は社務所を訪ひたれど深く尋求することなくて遂に所員に別れ、これより大学通りを右に折れて百万遍に向ふ。此間殆んど三町、楼門に達すれば長徳山知恩寺の看板は高く掲げられたり。慈覚大師の草創にかゝり、始め天台宗なりしが、法然上人加茂の神勅によりてこゝに住し専修の法要を談せしより遂に浄土宗に属せりと云。元弘の昔、後醍醐天皇深く悪疫流行を憂ひ給ひ、当時第八世善阿に勅して祈念せしむ。善阿専心七日を限り念仏する事一百万遍、疫病乃止み天皇叡感ありてこの号を賜ひしなりと伝へ居れり。鏤縷の鐘は古雅喜ぶべし。一瞥後直ちに御所の方向に向ひぬ。

その末と翌朝

出町橋を渡りし頃は、午後も三時や過ぎつらむ。茜さす日は半傾きて、下加茂の森など川上淋しう見渡さる。橋のつめを少し行きて左に折れ、河原町を南へ〳〵と辿る。内裏あたりを見むとてなり。医学校の前より西に入り、先づ梨木

大林　完

神社に詣でぬ。此社は別格官幣社、三条実美公の御父君、贈右大臣従一位実万卿の御魂をなむ鎮め奉れる。まこと此朝臣勤王の志篤くおはしまして、光格、仁孝、孝明の御代に歴事し給ひ、嘉永六年以降には、殊に朝廷の機務に与かりて、公武の乖離せるを痛く憂き事に思ひ、百方調和を図り給ひしかど、悲しき事には時機まだ熟せず、やがて勅書水戸に下りし程に、不幸にも幕府の人に忌まれ給ひ、一乗寺といふ村に閑居の身とならせ、髪を削りて念仏三昧に日を送らせられしが、安政六年十月六日遂に薨去せさせられたるぞかし。されば故の久邇宮朝彦親王殿下などの思召に、朝臣の功を永く世に表頌せばやとて、明治十八年に至り、此あたり梨木町といひて、朝臣の邸地なりしにより、社殿をば営み建てたるなりけり。境域広しとにはあらねど、鳥居の奥深う神殿の厳めしきに、頌徳碑の建てるが見ゆるなど、わきて其世床し、社に近く築地広やかに建て繞らしたる仙洞御所こそ畏こけれ。もとは上皇の宸居と定められたりけめど、安政元年四月炎上せしより後は、造営もせられず、林泉のみ今も猶残りて、さすがに昔の面影を留め、幽鳥老樹に鳴き、錦鱗清波に戯ぶれ、怪石苔むして千古の色ありとぞ承はる。大凡北は上長者町通りより、南は下立売通りまで、東は寺町通りより柳の馬場に至るめり。築地のもとを過ぎて、御苑の中、皇居の南に出でつ。御苑の芝生広やかなるあたり、小松などおかしう植ゑられたるに、鴨川の上流より引くらむ御溝水の、あなたこなたにたまりて池水となれるさま、いはむ方なくめでたしや。大宮御所の趾も此あたりとぞいふなる。我館総裁宮殿下のおはする賀陽宮は此西南の方にこそ、参らばやとて行く。参りつきたるは四時半頃にもやありけむ。一行の引率者たる師の君だち、入りて参れる旨を通ぜられたるに、此方へとありければ、草鞋解き捨てなどして玄関ににじり上る。師の君だちは面謁にとて奥まりたる方にぞ入られたる。謹みて待つ程、茶菓子など賜はる。やがて宮の思召辱けなく、一行にも御対面賜はりぬべき由仰せ出されて、近う侍る人の導かるゝまゝ、御庭の方より廻る。御あたり近う参りて、麗はしき御容体を拝しまつりたる畏こさ、何にかは例へむ。面謁も終りぬれば、又もとの玄関にて師の君だりのまかでらるゝを待ちてまかず。日もいつしか夕暮近うなりぬ。三条まで帰らむ途には、見るべきものなきにしもあらねば、急ぎつゝ歩む。主殿寮や諸陵寮などの出張所の前を通り、宗像神社を拝がみて丸太町に出づ。此宗像神社は田心姫命、湍津姫命、市杵島姫命をなむ祀れる。宗像の三神なり。此ところ昔は小一条といひき。藤原冬嗣の大臣、宗像の神の教によりてこゝに居り、社を建てゝ祀りそめたるが残れるなり。今は府社にぞ列せられたる。丸太町を東にとり、右に折れて寺町通りを南に急ぐ。途すがら下御霊社、行願寺、妙満寺、本能寺などをよぎる。日遅ければ能くも見ず。門口ながら過ぎたる処もあり。纔かに駈け入りて一つ二つ見たるもありき。いでや其あらましをかいつけてむ。下御霊の社といふは、鞍馬口の南にあなる上御霊の社にむかへたる称へにて、早良親王、伊予親王、藤原夫人、文太夫、橘逸勢、藤原広嗣、吉備大臣、火雷神の八霊を祀れるになむ。そが中に藤原夫人は伊予親王の御母、吉子と申し、謀反の事ありて親王と共に捕へられ、薬を服して死し給ひぬ。文太夫は文屋宮田丸のこと。是も承和十年謀反の事露はれて伊豆に流されき。火雷神は菅公の御事なり。吉備大臣こそ床しけれ、其外の人々は何れも非命の最後を遂げたるものから、祟りのあらむを恐ろしき事にして、かうやうに神とも祀りけむ。されば吉備大臣を八霊の一つに数へ入れたる、如何なることにか訝かしうなむ。行願寺といふは下御霊の南なる天台宗の寺、開基は行円上人、本尊は十一面千手観音、長八尺の立像、行円上人の作なりとぞいひ伝へたる。西国十九番の札所、又洛陽巡りの四番の札所なり。加茂明神の名塔は五輪の塔婆、高さ一丈余、塔の前の鳥居は行円上人の建てたるなりとか。この上人鎮西の人、寛弘二年より京に上り、頭には宝冠をつけ、身には革衣を纏ひたりければ、口さがなき京わらべは革上人とこそ呼びたるめれ。此寺を世に革堂といふも此故なり。又此寺もとは一条通新町の西にありければ、一条の革堂ともいふめり。妙満寺は京極通二条の南にある法華宗の寺、開基は日什上人、永徳三年五月建立。

もとは綾小路堀川の西にありしかば、其あたり今も妙満寺町とぞいふなる。紀州日高道成寺の鐘は此寺にあるなり。堂の前に中川の井といふがあり、洛陽七井の一つなりとぞいふめる。本能寺は京極通押小路の南、法華宗の寺、勝劣派なり。開基は日隆上人、もとは六角の南、油小路の東にありき。今本能寺町といふあたりなり。方丈の前の門は、聚楽城よりぞ移したる。彫物は左甚五郎の作なりとか、いとめでたし。織田信長の塔といふが本堂の裏の方にあるめり。一行の中にて二人三人ばかりぞ行きて見たる。とり出で、いはむ程のものにもあらずかしや。

九日午前七時半ばかりに宿を出づ。先づ昨日のよろこび申しに賀陽宮に参らむとて、寺町通りを上りて参る。昨日も此あたりは見つ。今は皇居の内わたりこそ見まほしけれ。されど位なき身の立入るべくもあらねば、宮を罷りいで、後、唯宮垣越に打仰ぎたるばかりにてぞ行く。正門は南の門、東門は日御門、西門は二つ、公卿門、台所御門、北の門は朔平門とぞいふ。正門の中に又宮垣ありて承明、日華、月華の三門をぞつけられたる。承明門の奥なるは紫宸殿にやあらむ、その西に清涼殿、東北に小御所、常の御殿、また北に准后御殿などぞ心あてに仰がる、。烏丸通りに出でて南へ下り、押小路を西に折れて二条離宮あたりに出づ。此離宮もと二条城といひて、永禄十二年織田信長なむ創めて築きし。明智光秀信長を弑せし時に、信忠のありしを囲みて此城を焼きければ、一時荒廃に帰したりけるを、慶長二年家康再び修築しけり。其頃は天主閣もありけめど、寛延三年雷火にぞ罹りたる。本丸は天明八年京の大火に焼れて、焼残りの建物のみ纔かに残れりき。近き世繕ろひ立て、今の形にし、離宮とは定められたるなり。深き堀、高き塁を見つ、、神泉苑に辿りつきぬ。昔大内裏の時は此神泉苑の封境広大にて、乾臨閣といふを営みたて、近衛の次将を別当職にあて、庭には巨勢金剛石を畳みて風光を貯へなどし、春は万づの花錦を織り、秋は楓の紅葉色おかしくて、四時佳絶の仙境ともいひつべく、世々の御門も屡行幸やせさせられけむ。守敏は諸竜を呪して瓶中に入れ、弘法大師は天竺無熟地の善女竜神を請じ、天下旱魃の愁ひを救ひて叡感を蒙りぬ。小野の小町が歌を詠じて雨を降らし、も此処なり。鷺が五位の爵を賜はり、鵜が金覆輪の太刀を喰ひて上けたるなど、おかしき事もありけらし。歳月を累ぬるま、いつしか荒れゆきけるを、承久の乱後、武州の禅門築地を高うし、門を堅めて修造せられぬ。其後又荒れて、旧跡見るべくもあらずなりしを、元和の頃筑紫の僧覚雅といふもの、申し請ひて再興し、真言の霊場とはなしぬ。北の方木立いみじう茂れるあたりよりかけて法成就池といふが広やかに、汀の石の苔むせるが、たゝずまひおかしうて、蓮の葉の枯れて浮べるなど、物ふりたる景色さすがに昔おぼへて床し。源順が「紅林地広うして楚夢を胸中に呑み、緑池高うして呉江を眼下に縮む」といひけむ、げにさる事や。池の中島にあなるは善女竜王社、二重の塔は大日如来を本尊にせりとぞいふ。いでやこれより嵯峨野大井あたりに物せばや、二条の停車場も程近きに、汽車にて物せむこそよけれとて、神泉苑を後にし、停車場へと辿る。

四日昼の一

友枝　照雄

汽車待つひまは午食のため停車場近き茶店にて過されつ。已にして一同車中の客となり、乍にして亦嵯峨駅に貽さるゝことゝなれり。奥野の露それ遠来の客に情ありや。抑訪音ふもの西山の乾坤に素懐を払はんとするにや。哀れ当日探究の趣味ある舞台を占むること何ぞしかく深広なるや。遮莫一行は駅の庭にて隊を二に分ちぬ。こは両隊相俟てこゝ全区の捜査掬趣を尽さんが為め、然せざれば全く其一半を失はざるを得ざればなり。順序の上より先なるべき嵯峨野へは尾崎教授、平部ぬしと余と向へり。数の上より本隊たる方は進んで嵐山さして出で立つ。

余等は道を右に取り大覚寺へと急ぐに、秋も末野の色見えて樹々の梢は錦繡を織りかけ、萩の上葉をさそふ風冷かにして叢の虫昔ながらの声に鳴くめり。打仰げば愛宕の山はなぐさめ顔にも天の一方に佇ひ、其山脚は東南に延きて余等が額前に亀山を形造れり。行くこと十町余にして大覚寺の棟宇に近きぬ。其東側に大

沢の池あり。余等先づ往きて見るに、宮苑たりし旧時の面影は失せて今あらず、汀の松の袖垣隙あらはに蔦はひかゝりて只打つ漣波の千古をさゝやくをきけるのみ。堤上に一石碑あり。こは近世の烈女村岡姥を頌表せしなりけり。抑大覚寺は嵯峨天皇の離宮嵯峨院に基を起し、貞観十八年八月廿五日改めて精舎とせられしより、淳和帝の皇子恒寂法親王こを賜はり、爾来竹園相承の門跡又仙院遷御の例屢々ありし所。夫の両統分岐以後、当寺が其一方と如何に因縁の深かりしやは蓋何人も知悉せるなるべし。されば仏閣は宮殿の変ぜしもの、其地域も旧とは十一町余に亘り僧房二十の多きに達せりといふ。今は則然らず、境内僅に二町余、松林陰深き閑静なる数宇の真言院なり。しかすがに周囲は厳然墻壁を構へ、その外には匝池を設け、中央には唐門の常には鎖されたるがあり。余等は傍なる通用門より入て殿堂宝物の一覧を請ふ。此日其筋よりも調査に来るべき模様あり、之がため容易に請を許されざりしが、強て寸時の閲覧を需めしに、竟に一人の説明官余等を導くことゝなれり。かくて殿舎を廻ること四宇、室々を経しこと二十余、宝物に至ては見る所頗る多し。就中余等の注目を引きしものを挙ぐれば、松之間入口の側戸二枚の檜板にして嵯峨模様を塗出せるもの、山楽筆白梅之間にある和漢歴代屏風及大覚寺旧伽藍図、御所紫宸殿を移したる宸殿並にこゝにある後宇多法皇の御輿、勅使寝殿の本尊五体、御霊殿内右側に並置せられある清盛、妓王、（ママ）岐女、其母、並に仏御前の六木像、御影堂に於ける後宇多院御法体の軸物及小野篁作といふ倶生神の像又嵯峨帝御束帯の木像、本寺の正寝たる御冠之間及其内の御聴台は後宇多法皇の旧をしのび奉らしむるもの等是にして、大方襖の画は狩野家の筆に係はり、山楽の牡丹、探幽の雪、永徳の鷹を其最とす。杉戸には山楽の豹と渡辺始興の牛引とあり、何れも無二の珍宝と見なしつつ目的を果すことを得たり。かくて一時半となりければ釈迦堂にと志してこゝを走り出で、行くこと二町が程、左方に御陵林あるを見出しぬ。こは後宇多天皇の皇后遊義門院のなりけり。一拝畢て直進右折し、やがて釈迦堂の前に着す。先づ愛宕山の掲額ある楼門を通過し、一直線に進みて本堂に至り、次に横に転じて東側の阿弥陀堂を見たり。栖霞寺の旧名あるは即此堂なり。之を史に徴するに、初め左大臣源融公山荘を此地に営み、之を棲霞観と称し、後寺となし、従て名を栖霞寺と云ひしなり。三代実録元慶四年八月の条に、「二十三日甲辰太上天皇遷レ自二水尾山寺一御二嵯峨棲霞観一云々」とあるは之に外ならず、仝八年重明親王妃藤原氏の為めに新堂を境内に立て、之に等身の釈迦像を安置す。釈迦堂の名は是によるなり。後ち僧盛弄、其先師裔然の遺志を紹ぎて堂をば寺となし、同時に勅許を得て寺名を清涼寺と号す。而して世降ると共に地主なる栖霞寺は漸次荒廃に帰し、客分なる清涼寺は愈興隆の盛運に逢ひ来しことなり、阿弥陀堂の傍に一老丁の居りければ、余等試みに此堂ぞ栖霞寺なるかと問ふ。彼の答に曰く、栖霞寺とは絶えて聞き及ばざる名なり、阿弥陀堂はこれにて侍ると。あはれ棲霞寺てふ観念は何れの日か既に土民脳裏の外に駆逐せられしなり。堂の南側に経蔵あり。境内西南の方には嵯峨帝塔、融大臣塔及他の二、三塔あり、疎松数株長へに其上を掩ふ。この外義貞、正行等の首塚附近にあるしよにきゝ居たれど、時間切迫の為め敢て捜索だもなし得ず、直に西に隣る二尊院へ向へり。おしなべて此辺は小嵯峨と称せらる、古より閑静幽邃の名高く、風流韻士の多く遊観陰遁せし処なり。或時は御幸を送迎し、或時は官人の虫狩場となり、夫の遍昭僧正は此野に遊びて落馬の失敗に却て不朽の名吟を留め、源順はこゝに紫藤の賦を拾ひて後人夙に世変の激甚なるをその音に聞けり。実にや星移り物換はるは彼の言ふが如し。而も山色水声は古色を呈し遺韻を帯びて旅人の草分衣今もこゝに乾しあへざるべし。已にして院の門前に着す。院は小倉山と号し、その山の下腹に拠て東に面す。秋の日脚の短ければ時は二時を過ぎ日も山に近けり。乃外観をのみ注目すべしと定め、則先づ山門を一瞥す。古色現然として其趣えも言はず。躍然として内に入るに、路程一町余の地傾斜して漸く高く、望む所両側の老楓相対ひ相重りて秋錦を織ること真に最中なりとす。欣然として阪を上り、再中門を超へて院の本堂に達す。堂は宮殿作りにし

神宮皇學館本科「平安ふみわけ衣」（明治三十四年）・「四年生修学旅行日記」（明治三十八年）（館史）

て永正十八年の造営に係り、一見亦疑ふの余地なし。前面高くは後櫃原帝宸翰の山号題額と後奈良帝宸翰の院号題額と並び揚げらる。堂の外に御影堂、方丈、小書院及鷹司、三条諸家の霊廟あり。之を聞く、本院は嵯峨上皇の勅願により承和年中に創建せられし所、宗旨は法相、律、天台、浄土四宗兼学とす。嘗て一度は懐廃せんとしたる迄なりしも、檀家たる公卿、奮て之が維持をはかり、近くは故三条公大に庇保を与へられしに、現今にては基礎全く強固となり、実に洛西の名刹たるに背かず、又従て宝物の見るべきものに富めりと。かくても詳細を悉さずして去る余等の遺憾亦推して知るべし。只小倉の名地を踏みて其名人を欺かざりしを多となすのみ。かくて山門を出づるや、直に間道につきて右折し、やがて竹藪の横を通過す。偶「涌蓮上人去来翁墓」と刻める石標あるに会し、よりて藩中に入るに大小二十余の墓標一空地に並列したり。余等去来の墓を捜せど容易に知る可からず、竟に極端なる最小のものをも見るに即是なりき。一同唖然として暫し言なく、亦出でゝ前途を走りぬ。路傍有智子内親王の陵墓を拝し、又定家卿山荘の跡を尋問し、更に野宮を竹叢中に拝して、天竜寺瞥見後渡月橋にかゝれり。

その二

小深田長信

余等本隊は先づ天竜寺に向ふ。往く々々薄の馬場に橋氏の昔を懐かしみ、歌詰橋を過ぎては西行の当時を思ひやりつゝ、やがて寺の楼門に着す。一歩脚を入るれば翠松老樹容姿を正しうして庭苑の広きに整列し、之を超えて殿堂楼蘭の棟屋巍然として屹立せる亦望むべし。園は階段を経て漸く高く、内に盆池あり又隆星井あり、樹下十余名の徒弟が笠を手にし草鞋を穿ちて雑草を摘めるなど、さすが先住名僧の遺業なりと見えて哀はれなり。仏殿に至るの前右側に並列せる二堂あり。廻らすに杉垣を以てし、樹梢其上を掩へり。掲札に曰く、「後嵯峨天皇嵯峨殿法華堂、亀山天皇亀山殿法華堂、兆域周囲八十三間」と、宮内省の掲示なり。乃恭しく拝し畢はり、尚背後に廻れば法華塔及先住峨山之墓あり。一見後仏殿に至り、続て縁起及宝物の有無を番僧に尋ねぬ。答へて曰く、本寺は応暦二年足利尊氏公、後醍醐天皇追福の為め草創せしものにて、開基は夢窓国師、即智曜疎石或は木納(納カ)叟と云へる勢州の人なり。臨済を宗旨とし、禅寺五山の第一位を占む。創建後回禄に罹ること八、九回、近くは明治維新の際兵火によりて灰燼となりしことあり。現今の建造物を見て之を察せよと。重ねて宝物を問へど尚災厄の故に皆滅びたりといひ、後醍醐天皇御着用の御冠を尋ねしにこも灰燼に帰せるよしかたれり。蓋此地は嵯峨皇后の檀林寺を建立し給へる旧蹟にして、其寺荒廃の後、後嵯峨上皇、亀山院相並んで宸居を占め給へり。天竜寺草創はこの後のことに属し、疎石の勧めにより、此地の後醍醐天皇に因縁深きを以て、尊氏遂に此処に起せるものなり。初めは暦応禅寺と称し、其慶落の儀盛大言ふべからず。勅使及尊氏、直義等親しく之に臨み、爾後足利氏の寄附せる一万余貫の庄園田畝及疎石の建議に起れる天竜寺船の利益を造立の資となし、康永五年に及んで七堂伽藍其完成を告げ、輪奐の極美はじめて挙がりしなりけり。されば寺域の如きも旧きは三十六町余の広きに亘り、百十五の院寺その内にありたりといふ。今猶十町半余の境域を有てり。已に看るべきもの无ければ、辞して小督の塔を吊はんこと欲し其地を小僧に問ひ、その言ふがまゝに裏門より間道にと着きたり。中途緑松繁茂せる処あり。土塀之を囲み、触れば破れんとする門より内に入るに、枝もて縄を引ける方二間の小丘ありぬ。疑を抱きつゝこゝを立ち去り、やがて大堰河畔に出でゝ茶店の人に尋ぬれば、後醍醐天皇の御廟跡にして長州征伐の際火災に罹りしものといふ。今天竜寺に移されあるなり。これより左折して三軒茶屋の東に至り、竹林中一大楓樹の下に五輪の古塔あるを見出でぬ。小督の塔即是なり。地の面積僅に二、三坪、塔の上部は破壊せられて見る影だになし。あはれ万乗の君をして終夜待ち眠らざらしめ奉り、弾正の司をば明月に鞭を揚げるの労に従はしめしはその当代のこと、後代に在ては幾多人士が悲感のためならぬはなき其人の墳墓果して是なるべきや。近く渡月橋の北に琴引橋とて一間計の石橋あり、こも仝じ事

績に因めること言ふ迄もなし。されど按ずるに嵯峨野の奥は小督一時の避難所たりしに過ぎざるべく、従て小督塔のこの地に在るものは只紀念標たるか、若くは別人墳墓の塔にて、小督其人の永眠地には非るべきなり。強て其墳墓を求めんか、余は洛東清閑寺内高倉帝陵塔の左側なるを以て真となすべし。小督局が後には清盛の命によりて清閑寺に入り尼となりしこと、高倉院の御陵塔がこゝにあるは尼の跡をしのぶ御心より御遺言のありしによること、是等の事績、之を源平盛衰記によりて信ずべしとせば、則疑やなからん。かくて仲国の塔も近くに在りと聴けど問はず、却て思はざる臨川寺探究に従へり。夢窓国師入定の霊地と掲板せる大門を入るに、庭園甚美はしく、三会院をはじめ数個の堂宇立てり。三会院は本尊弥勒仏と世良親王及開山疎石の塔所たるとにて号けし名なり。余等は院の後方に廻り親王の御墓を得て之を拝し奉れり。之を平安通志に徴するに、此地旧と亀山法皇の仙居川端殿の所在にして、世良親王に伝はり、親王薨後其伝北畠親房遺命を奉じて禅刹とす。当時本元之に与かりしが其功未だ竣へざるに入寂せしかば、疎石之を承けて造営を完うし、乃寺の開山となれりと。古は禅刹十中の第二にして或時は五山の一に列せられ、今は天竜寺の塔頭に属せり。去て渡月橋を渡る。此橋一に御幸橋の名あり。川は大堰川、即丹波川、桂川といふに仝じ。橋上の眺望実に名状すべからず。渡り畢はれば直に是嵐山の裾なり。凡そ此間の景は何人も之を聞知せる所、今亦古くは之を貫之大堰川行幸和歌序に譲り、近くは鏘々たる文士雅人の幾多文案に委するの外なし。只嵐山の称を按ずるに、往古此下に荒樔田あり、荒樔嵐と其訓近きが故に竟に嵐と称せられたりといふ此説是ならんか。其以前には此山隠椋山を以て称せられしもの、如し。此時紅葉翠松の間を点綴し満峰の観実に其時を得たり。而して古人咏ずる所亦紅葉に多くして、現時に称せらるゝ春桜に於ては近古以後始めて其詠あるを覚ゆ。之を聞く、桜樹は亀山上皇の吉野より移し植えさせ給へるものとぞ。嵐山の麓に櫟谷社あり。松尾七社の内なりといふ。これより河に沿ひ流に逆ふて行くこと三町、所謂千鳥淵の絶景に接す。横笛の身投石なる巌向岸に見え、断岸の下青々漫々たる流水を臨み、翠松の間紅錦燦爛の装を仰ぐを得べし。尚進むこと三町許にて茶店の前に出で、是より険隘迂廻せる阪路を登ること二町許にて大悲閣千光寺のある地に達せり。転踵顧望すれば遠く都外百里の郊野秋霧の裡に散見せらるべく、近くは眼下の碧流縈々として南に通ずるを臨むべし。一仝是に於て熱汗を治し、閣を守る所の老婆に就て宝物一覧並に角倉了以像撮影の許を請ひぬ。されど持僧不在の故を以て老婆之を許さず。偶ま他に三名の遊客あり、余等に近付き来て曰く、余は了以の後裔吉田某なり。諸子の希望する所は是余の尤謝する所、持僧不在なれど願はくば其為さんと欲する所を為せ。其罪は余之に当らんのみと。乃閣の内陣に入るを得、先づ了以の像を写す。宝物は殊に記すべきものなし。閣の本尊は千手観音にして夢窓作の立像なりといふ。閣前の左側に了以の碑石あり、其高七尺許、林道春の撰文に係はる。「了意名光好小字与七天性好工役云々」、慶長十年大堰川を浚渫疏通せしめし外、十二年には富士川を浚疏し、十六年には高瀬川の舟路を開通し、本邦の通運其徳沢に浴すること実に少しとせず。茲に碑あるもの豈所以なしとすべけんや。閣後を廻るに二小瀑布あり。この外山上には諸種の名跡あるを聞けど、時の許さゞれば遂に得行かず。道をかへして渡月橋の詰に至り、進むこと町余、右折して轟橋を渡り、楼門を入り法輪寺を一見せり。寺は真言宗にして本尊は開基道昌の作なる虚空像なりと云。山号を智福山と号し、後陽成帝の勅額本堂の入口高く掲げられたり。蓋極初の建立は天平六年にて当時葛井寺と称せしもの、貞観十六年道昌之を中興し仝時に寺名を改めしなり。参籠堂あり、往時都人士智福を祈るため此処に入て断食し、之を伝へて今時十三参りといふことこゝに行はる。其時は陰暦三月十二、十三の両日に跨り、十三の男女集り来つて智恵附与を祈るなりとぞ。尚落星井といふ井あり、眺望亦頗佳なり。これより出でゝ南するに、右傍に西行桜と称するがあり、一瞥して街道にかへり、ひたすら歩をはやめて松尾神社に向ひぬ。

その日の晩

宮尾　詮

吾等別隊が松尾の御社にぬかづきしは時すでに三時、初め一行が嵯峨駅を下るや分業法を採りて二隊となる。一隊は大覚寺方面探究、別隊は嵐山方面踏査とす。こゝに前者の隊長尾崎教授、後者の隊長黒木教頭の間に一条の約欵結れたり。曰はく午後二時半を期し両隊松尾社頭に相会せむと。而して最後附加の一項は正にこの条約の破るべからざる旨を記しゝものゝ如し。条約締結了る時恰も十二時、爾余探究に籍すもの僅かに二時間と三十分、しかも踏査せんとするの地は頗広し。隊が嵐山の絶景に都人士を羨やむ矢先、出発の命は隊長より下されたり。嵐山未だ全く飽かず、法輪寺の壇未だ踏まずといへども、約又重んぜざるべからざればなり。松尾に着けるに一隊すでにあらず、社人告ぐるに通過せしよしを以てす。予が隊遂に破約の罪に伏しぬ。

松尾は古来名ある社、少なくともこゝ半時間の余裕あらしめんには親しく視察をも遂ぐ可かりしに、静かに一拝するの時をだに与られざりしは深く遺憾とする所なり。さればその委曲の報導はもとより尽す能はずといへども聊か得る処を記さんか。社は別雷の山麓に鎮座し、古へより洛西第一の大社にして今官幣大社に列せらる。大山咋神、市杵島姫神の二座を祭り、古事記、旧事紀、日本書紀などに葛野之松尾坐神と記せるはこれなり。神殿は大宝元年秦都理の創建にかゝり、前に拝殿ありて神服殿、竈殿、厨所、社務所等鱗次し、摂社末社など所々に散在す。山上別雷峰の一巨岩はこれ神霊の始めて降臨せし所なるよし山洲名跡誌には記されたり。社相伝の歌あり、「山城乃別雷爾宮居士亭天降古登神代与利佐幾」。こを探るも亦古老への土産ばなしにはなるべかりしに、そも遂に果すことを得ざりき。今神代系図略によるに、当社の祭神は邃古大堰川を開き丹波国土を治め給ひしより、稲水の守護神なりと称し醸酒の神として信仰薄からず。山下大杉谷の清水一滴を加ふれば腐敗の恐れを避くといへり。此日その私祭にて全国の醸酒家社頭に充ち神職祭事に忙殺せらるゝを見たり。神殿に纏はれたる菊桐絹幕のいかに尊かりしよ。境内桜楓多く殊に老松巨杉鬱として茂り、参道広くして清く、並樹一層清閑を添へしむ。宏壮の宮門を出づれば勅使宿と云ふがあり、予にはそれまでが尊く感ぜられぬ。行くこと一町、道左右にわかる。左せんか梅の宮に達すべく、右せんか桂離宮に至るべし。

「咲匂ふ梅津の川の花盛り映る鏡の影もくもらず」これは為家が梅津の里の詩想。梅津は梅宮鎮座の地なり。社地桂川に対し花木の神林あり。神境を貫流せる仙流一条は清浅嗽すべく、潴して池を為し、亭之に臨みて遊客を待てり。境内の老梅は蓋し梅ノ宮の名にそむかず又此地燕子花の名地都人士が鬱散の所となれりと云ふ。祭神四座は延喜式に所謂山城国葛野郡梅宮四座、そは酒解男神（大山祇神）、大若子神（瓊々杵尊）、小若子神（彦火々出見尊）、酒解子神（木花咲耶姫尊）にして、摂社若宮は橘諸兄公を合祀す、護王社といふは橘氏公を奉れり。藤原不比等の妻県犬養橘三千代の始めて祀る所にして、其後聖武天皇の皇后藤原安宿媛及藤原智麻呂の妻牟漏女王の姉妹相尋で之れを祀り、爾後屡々其所を転ぜしが、仁明天皇の母后橘嘉智子に至りて其氏神たることを以て今の地に移す。嘉智子は三千代の子なる諸兄公の曾孫なり。されど橘氏は中世大に衰へ藤原氏の長者たるもの橘氏の是定となり、此の社も亦是定の掌る所となれりと云ふ。之を聞く遠近の婦女今も其産月に臨むに当り当社の土砂を得て帯襟に佩び以て平産を祈ると。社記並旧記によるに云はく、古し嵯峨天皇の檀林皇后と申奉るはその父清友の系をうけて資性寛和風容絶異にましませしかど、皇子の生れ給はぬことのうれたくや思はれけむ、深く氏神に祈り給ふ所ありき。酒解男、酒解子二座の感応浅からず身重にならせ玉ひ、当社の白砂を御産所の下にしかせられ目出度皇子降誕あらせられぬ、これ即仁明天皇にませり。これにちなみて維新の前までは歴代の后宮女御御懐妊の度毎に祈願し来りたりと、民間の情今も此の如きは怪しむに足らざるなり。さればにや神殿の前に寿命神石あり、安産血脈相続守護の神として木花開耶媛命が神徳を常磐堅磐に厳によせ給ふなりとか。御石の神石の神字は桜町院

天皇よりの勅号と聞く。なほ影向石といふもあり、伝記に熊野山より三鳥来りて化せしものにて一に三石といふと記せれど、妄誕信ずるに足らざるべし。

もと予等全隊の目的は離宮にありて梅の宮にはあらざりしなり。吾隊の先鋒が地図を繙くの暇あらばこそ。一も二もなく道を左にとりたるは所謂怪我の功名。彼等は梅宮に至りて以上の探究を遂げぬ。予と河村氏とは松尾に於て隊に遅るゝこと二分、出れば前鋒の影は消えてあらず、旅心の物淋しく違約の底恐ろしく、迅走一瀉、桂の離宮に向て駆る。あはれ吾等は梅宮に詣ずる事を得ざりき、而して寧る路を誤れるものを羨むものなり。松尾より桂に到る路程約一里、鬱然たる松尾の山滔々たる桂川の間に広がれる田畑一体の間、道は平坦にして屈曲なく、幅は広からねど腕車自由に駆るべし。遠く雲靄と見ゆる城南の山々、所在班布せる田家の夕煙。古来此地の多く歌に詠まれたるまた故なきにあらず。かくて余が離宮の北門にたゝずみし時、一隊は已に憩ひて我隊の遅きをかこてり。梅宮の迷子も漸くたどりつきぬ。此時短かき秋の日は松尾の山蔭に沈めり。

離宮の所在地を下桂村といふ、葛野郡に属す。東は桂川に境し、西は西山一帯を望み、北は遙かに嵐山、亀山を見る。四境幽閑にして仙寰の概あり。寛永年中、八条宮智忠親王の為め豊太閤の造営し奉りたる山荘の旧跡なり。一に京極宮と号す。宮内は予輩の敢て足を容るゝ能はざる所、もとより拝観したりといふにあらねど今平安通志などによりて密かに伺ふ所を記せば、殿舎は良材を以て構造し、障屏は名画を以て貼付し、壮麗人目を驚かすに足るといふ。通志これを評して曰はく、規模の宏壮なしといへども、彫絵の絢爛なしといへども、仔細を点検すれば経営惨憺、意匠の能事を尽せり。世に称すらく、此離宮を林泉中より望むときは、楼船の姿を成し、古書院より御幸殿に至り、逶迤雁行して趣勢極て幽雅穏秀なりと云ふといへり。又林泉は彼の有名なる金森宗和、小堀宗甫が意匠を尽しゝ者にして怪岩奇樹の排置、巧妙を極め清雅幽邃の趣き世にまた比類なしとか。通志云はく、林泉中亭榭の数七、橋を架すること十六、灯籠の数二十五、手洗鉢の数八あり、多益々変化を生じ一箇の重複を見ず、掩映点綴以て林泉の奇観を大成す云々。……要するに所謂四方正面に築造したるものなれば、宮観亭台より曲径細蹊に至り、何れの辺より嘱目するも側面の所なく、換面易頭変化窮りなく、殆んど端睨すべからざるの妙あり。人工の極致独り造物の削成を髣髴するのみならず、遂に能く化工の未だ至らざる所を補ふに至るとなり。嘗て後水尾天皇は園林堂の勅額を賜ひこれを賞し給ひ、明治十七年改めて離宮にはあてられたるなり。此地一体(帝)を桂の里と称へ、多く歌によまれたり。延(定)家は「久方の桂の里の小夜衣おりはへ月の色にうつなり」と詠み、貫之は土佐の帰路「久方の月に生ひたる桂川底なる影もかはらざりけり」と古郷の変りなきに古きを忍びし勝地なり。

日は没したり。今は是非なく帰途に着く事となしぬ。桂川橋上の眺めもあはれ夜にさへぎられぬ。東寺終に訪ふ暇なかりき。郊外夜風稍寒く、市街の点灯遙かに蛍の如し。午後七時七条に着き電車を籍りて三条に帰る。豊後屋楼上夕飯を喫し一吹の煙に身をくつろげば時已に十時。

五日の晨　佐谷孫二郎

拾日、晴天！。例の如く七時半に豊後屋をば出た。三条小橋から電車で高瀬川に沿ふて北へ、北野神社から平野、等持院と、斯う行くつもり。此の川は、彼の角倉了以が内裏修築の時、その材石を運ぶ為開鑿したので、二条橋の下流から西へ加茂川を引いて、一町隔てに本流と平行して南へ、東竹田村で会し、又分れて伏見の西を、終に淀川に会するのである。電車は今総裁宮殿下御邸を右にして行く。左が平安女学校。この辺であつたらう?、菅原是善の家は。下立売へ折れて、又東堀川に出る、この辺が時平の邸。待賢門、陽明門も程なからう、とかう考へてゐる中に電車の終局点が来た。止る、下る、北野の鳥居が見える。鳥居を抜けて板石敷、境内梅の木が多い。本殿は修繕中で、よくは見られなかつたが、今のは慶長年中豊臣秀吉の築造、三光門の「天満宮」の額は後西院帝の震(宸)筆である。

神宮皇學館本科「平安ふみわけ衣」（明治三十四年）・「四年生修学旅行日記」（明治三十八年）（館史）

昔に遡つて考へると、この社は天慶三年右京七条坊門の婢女、多治比文子なる者、菅霊の託宣をのべて右近馬場に住まうと告げた。で天暦元年北野の右近馬場に霊廟を建てゝ、暫く霊を鎮めたのが始りで、仝九年近江朝日寺の僧景珍と、嚮の文子とが力を協して社殿を興した。天徳三年、則ち菅公歿後五十六年になつて、右大臣藤原の師輔更に大殿を建立して崇敬を表す。一条天皇の永延元年、官幣に預るやうになつて北野祭が始る。其の後崇拝が愈深くなつて来る、社渡（殿カ）は改造する毎に立派になつて来る。今では社格が官幣中社、社地一万二千余坪、八月四日の官祭、十月四日の私祭には賽人雑踏、踵を接するとか。さて其の祭神は？。勿論主神は道真公であるが、二十二社註式に「天神三座、中間御前菅丞相、東間中将殿、西間吉祥女。」と見えてゐる中将殿は道真公の外孫に当る、斉世親王の男右近衛中将源英明であらうが、何うも西間の吉祥女が解らぬ。社務所に行つて宝物を見る。宮司は留守であつたが、兎に角こっちの云ふもの丈は見せて呉れた。第一に北野縁起三巻。繊麗な詞書は親王公卿の寄合書、「日本王の朝は神明の御恵み殊にさかりなり」から書き出してある。その画――精細な画は土佐光起の筆、道真公の幼時から極彩色で。ホンに花紅葉を一緒に見るやう。この様なのは詳密を尽した、美しい光起の筆を籍られければとても。次に蘆雁の屏風、これは直賢の筆である。右二品は既に国宝内定のものだといふこと。源氏重代の宝剣、鬼切丸は近来当社の手に入つたので、中身二尺八寸二分、粟田口左近将監国綱の銘。東窓かな（らカ）直射する光線に冷たく光つてゐる、身の毛もよだつ様。外に経切れ（菅公筆）、菅公自筆の神像及信実筆の神像等を見たが、何うも怪しい、古色を態と附けたらしい処、時代差ひの装束を着けた処。まだ秀吉朝鮮征伐の願文、春日行秀筆の三十六歌仙なども見たかつたが、外へ出してあるとかで意を果さなかつた。余り遅くなつてはと、宝物拝観中に来た今春の卒業生、遠山正雄氏を――昨夜当社で待合せて、日曜を幸案内して貰ふ様に約して置いたので――先登に、裏道から出た。西へ二町、大北山村の平野神社がある。祭神は延喜式一に「平野神四坐祭、今木神、久度神、古開神、相殿比売神」とあるが、この神に就いては古来色々と説があるので、

「第一今木神、日本武尊、源氏氏神。第二久度神、仲哀天皇、平家氏神。第三古開神、仁徳天皇、高階氏神。第四相殿比売神、天照大神、大江氏神。県社天照大神子、穂日命、中原、清原、菅原、秋篠、已上四姓氏神」（二十二社註式）

「第一日本武尊源氏神、第二仲哀天皇平氏神、第三応神天皇高階氏神、第四仁徳天皇大江氏神、第五天穂日神神代ノ神、天照大神ノ御子也、右四姓氏神、中原、清原、菅原（下略）」（神祇正宗）

その外、平野神社祭神考は四座悉く竈の神としてあり、帝王編年記は只仁徳天皇、袋草紙は欽明天皇と云ふてゐる。併し右の中、最有力な説は二十二社註式のであるが、なぜ今木神が日本武尊であるか、なぜ久度神が仲哀天皇であるか、其の理由とする処がわからぬ。此の頃出版された吉田東伍氏の日本地名辞書の説が、先づ一番よからう。

〔日本地名辞書摘記〕

「平野神社。四坐の神を祭る。本朝月令延喜式云、桓武天皇延暦年中立件社三日、点定四至。延喜式云、祭神四坐今木神、久度神、古開神、相殿比売神、祭日皇太子親近奉幣、桓武天皇後王（改姓為臣者亦同）及大江、和等氏人並預見参とあれば、桓武外戚の祖神たる事明なり。今木神は続日本後紀に今木大神、貞観式に平野神と呼び、本社の主とする処也。桓武帝御母高野皇太后の遠祖百済国王を祭る、其の王孫我朝に投帰し大枝、和の諸氏と為る、其の今木といふは今来の義にて古言投帰の謂也、初大和国田村後（宮脱）に祭る遷都の時こゝに転じたり（中略）相殿比売神は蓋桓武帝外祖母贈正一位大枝朝臣真妹の祖也（中略）県宮は古は処見なし、天穂日命は土師氏の遠祖なれば後世こゝに祭りたるものならむ云々」

本社初めは大和国田村の後宮に在つた事、右地名辞書にも云ふてあるが、今の地に遷したのは延暦十三年で、その後名神、月次等の祭に預り、毎年四月、十一

月の上申の日で、臨時祭も仝時に行はれる。境内桜の多い事、外の木は殆無い。それに一々名がある。曰く手弱女桜、曰くねざめ桜、曰く赤人桜、曰く……。陽春四月、花が咲き揃ふた時の見えは?。が木は皆若い。先づ神前に額づいて、社務所を訪ふたが、当社も宮司が留守。余儀なく宝物の目録、拝殿の三十六歌仙額(詞近衛基前、画海北友徳)、中門の接木の柱等を見て出た。西へ二、三町進むと、右側南面に二条院天皇香隆寺陵がある、兆域百三十一間七尺、恭しう参拝して等持院へ急ぐ。

その中頃

樋口　長次

天高く気清き晩秋の候、日は朗に眺め文ある野外漫歩の快亦譬ふるに物あらんや。行くこと少頃、一行は足利氏累代の墳墓地なる等持院に着せり。等持院とは尊氏の諡号なり。取りて以て寺号とせしならんか。門前一清流あり、門内に赤松の園林あり、青苔一面に拡げられ、境内すべて瀟洒愛す可きの趣に富む。やがて庫裡に入り二、三の雛僧と問答数回の後、漸くにして内部通観の許を得たり。先づ入る所の仏殿中両側の足間には足利氏歴代の木像安置せられ、独り尊氏の像は其中央本堂の間に於て本の釈迦像の左方に位し、家康の像仝じくその右に置かる。家康像のしかく奉安せらるゝは蓋源家の裔たること足利氏に仝じきに由り、旧幕時代にありて苟くも保護を仰ぐ以上は勢こゝに出でざるを得ざればなるべし。是等木像はすべて衣冠帯剣笏を持して坐せり。審らに視査するに一々面容態格を異にし、各自特有の性質自ら外に現はれ居るが如し。就中義勝の像最幼顔を呈し、義詮稍猛に失せるかの恐あり。義量、義視は之を缺けり。而して尊氏の像は棚を其前に結びて近接する能はざらしむ。余之を雛僧に詰るに、彼れ語気を激まして曰く、曾て東都某校生五十余名の来観するや、番守なきを見て像前の御水を其像に注射しぬ。爾来接近を禁ずる也と。実に熟視すれば面上に汚点を存す。維新の際には勤王之士是等木像の首を切て三条橋に梟し、後収めて接合したりき。何ぞ昔に今に厄に遭ふことの多きや。尊氏は非凡の大才を有せり。彼は当代の大政治家なり。彼の子孫は将軍として其時々々の最大実権を有せるものなり。唯夫れ叛逆の一挙、其罪千載に亘るも磨せず拭はれず、木像として厄に遭ふ亦止むを得ずと謂ふべし。この外殿内及別院中に足利氏に関ある宝物多く存し、其時代の古鏡唐蟬月大師の十六羅漢画像又は山楽の花鳥牛唐子遊楽等の襖画あり。殿の傍には義政好みの庭あり。庭には芙蓉池あり。庭の北隅に高五尺余の宝篋院塔あるもの之を尊氏の墳墓となす。寺の沿革に就て云はゞ固より尊氏開府後の創立にして開基を夢窓国師とす。義政再建後衰頽を経て豊臣秀頼又之を建造し、其後盛運なりしも文化五年四月に祝融に罹りぬ。故に現在の建築は見るべきものあらず、古へは院ありしときくもの只功運院の残れるのみなり。余去るに臨みて木像中の或者を撮影せんとせしかど番僧の拒絶固きを以て遂に果さず。門を出るとき既に十一時半を告げたり。されば一行の多数は直に建勲社の方向に就くことゝし、余等三名は急速妙心寺、仁和寺を巡覧して後之を追ふことゝなれり。故に今金閣寺、建勲社を述ぶるの前、この少数隊が瞥見せし一斑を記さん。唯夫れ瞥見なり、故に多くを言はず。

妙心寺――等持院より南五町余、花園村にある一巨刹なり。昔花園帝此地の風光を愛し離宮を営み給ひしが、亦禅学を好み給へるより遜位の後ち捨てゝ禅寺となし、師僧妙超の法嗣慧玄をば開山とし給ふ。是即正法山妙心禅寺創建の次第なり。後義満の時住持拙堂の大内義弘と師弟たりしより、義弘の叛後俄に寺領を没収せられ遂に他門の管理を受く。従て殿堂荒廃し僅に開山堂を存せるのみなりしが、永享中住持あるに至り、応仁兵火の後ち後土御門帝の勅命により僧宗深之を中興す。天正以後武将の帰依を博し、徳川氏の初め最も昇旭の勢を得、爾後盛運を伝へて今日禅流の覇王臨済の大寺一派の本山たるものとす。こは他一般の禅寺と盛衰を異にすと謂ふべし。されば現在見ゆる所、勅使門、山門、仏殿、法堂等整然として棟甍を並べ、庫裡、方丈、別院、塔頭、子院の大且多なる実に人目を

神宮皇學館本科「平安ふみわけ衣」(明治三十四年)・「四年生修学旅行日記」(明治三十八年)(館史)

驚かすに足れり。境内老松多く何れも寺門と繁栄を比うし、就中雪江松といふは下は蜿々たる大蛇の如く、上は高く中天を衝き而して一枝東に延く所翠蓋然たり。其東方にある玉鳳院ぞ即花園法皇修禅の遺跡なる。塔中大法院には佐久間象山の墓あり。一隊の馳せ廻りて見且つ感ずる所此の如く、之を畢はるや北行西折仁和寺に飛びぬ。

仁和寺――仁和寺に至る途上右方に三丘を望むべし。これ雙岡にして一の岡、二の岡、三の岡の名あり。三代実録には淳和・嵯峨二皇の臨幸を記せり。所謂雙岡山荘とは清原夏野の営む所にして丘山を背にし郊野に面し、宇多川の水を湛へて園内に引くその形勝や思ひやるべし。山荘後ち寺院となり荒廃再興後今日迄法金剛院として其名を呼ばる。今は只其近くを過ぎしのみなり。仁和寺は此比にあらず。其創建実に光孝天皇の御心に出で仁和四年に其供養あり。宇多法皇また一室を増営して遷御ありしより御室の名起りながらに導く。爾後歴代の天皇厚くこの寺を遇し給ひ、其門主は累世一品二品の親王にませり。堂塔坊舎の宏壮美麗固より言ふを要せず。中世応仁文明の兵火は免がれ能はざりしかど、徳川家光の徳大に之を建営せしめ旧皇居の殿門をも下賜ありて旧観立所に復せられしなり。輓近明治二十年の火災なかりせば庫裏、寝殿、四脚門其他二十五宇も今見ることを得べけれど、残る所は金堂、観音堂、御影堂、五重塔、輪蔵、鐘楼、大黒殿、南大中外門等にして爾後の再興今僅に七宇に過ぎず。境内は桜樹多く何れも枝条根底より叢生す。春風駘蕩の候思ひやらる。宝物は本尊阿弥陀仏をはじめ書類器具頗多く、祖師堂中の西壇には寛平法皇の宸影もありとのことなれど到底拝観の暇なければそのまゝにて帰れり。

余等が金閣寺に着せし時本隊已に此地を去る。乃亦一瞥を与ふることゝし、看畢はるや去て建勲社に走る。今本隊の視査を主とし又載籍に徴して要目を記せば次の如し。金閣寺を北山鹿苑寺といふ。金閣寺は金閣あるが故の俗称なり。門前よりの観望はやくも看者の心を喜ばすに足り、梵鐘、一位樹など注目して中門を入れば庫裡の玄関に達す。客を導くの状凡て銀閣の如し。内門を入るや数歩にして金閣の結構林泉の風趣共に旧観を存して吾人の眼前に横はり、義満驕僭の状この時に於て最切に追憶せられぬべし。嗚呼彼れ何者ぞ、為さんと欲する所のものは必之を為し、得んと欲する所の者亦一として得るを敢てせぬはなし。即西園寺累代の荘地を求め乍海内に令して土木の役を起し、而して成る所の別業は、其地山に拠り林を控へて中央に金閣あり宮殿之に纏はり、周囲に池泉園林ありて麋鹿その内に遊ぶ。応永十五年の行幸後又後小松上皇の駕を迎へ奉るや則殿舎を増築すること十三棟、正殿を八棟に分ち上には竜の装飾を施して金碧輝耀彫鏤燦然の美を窮めしむ。されど是等驕奢の跡は今悉く残存せるにあらず。其見らるゝ者は金閣、不動堂、林泉、園池にして、他は彼が裔孫の空職を守れる間に二度の兵燹に罹りて焼亡し、徳川氏太平の世、寛文、延宝の頃に夕佳亭、本堂、書院等の新造に及びしものとす。就て見るに金閣は鳳凰を戴きにし内を三層に分てり。下層を法水院と云ひ中層を潮音閣、上層を究竟頂と称す。下二層に恵心、空海、運慶作と称する諸仏及義満法躰の木像安置せらる。上層の扁額は後小松帝の御震筆、天井三間四方の一枚楠に成れり。四壁の金箔は剥落して毫も存せざれど其痕迹燎然として知得すべし。而して閣前の全池を鏡湖と云ふ。葦原、淡路、西出等の島嶼漣波の中に散在し、奇石怪岩幾個となく其間を点綴す。岩石に出亀、入亀、採蘋、猿猴等あり、又赤松、細川、山名等の名あり。蓋湖島の全景は之を八洲群雄に擬し義満坐ながらに之を統帥するの意こゝに寓せらるゝならんか。周囲には青松並列し西方特に鬱蒼たる樹林を見るべし。之を隔てば衣笠山の翠巒凝粧して方に湖面に臨むが如く、紅葉岡の霜錦は時に秋風に駕して亦緑波の眉頬を粉飾するかの観あり。転じて閣の背後に至れば歩移る道曲るに従て新趣念掬すべし。曰銀河泉曰竜門瀑、曰鯉魚石虎渓橋、曰安服沢白竜塚、之を経れば即夕佳亭の苑舎あり。こは後水尾亭臨御の際献茶の行はれし所、人口に膾炙せる萩違棚南天床柱はこの中のものなり。この外尚本堂の見るべきものあり、老松陸舟松あり、宝物に

至ては陳列夥しといへども熟視せざりしかば挙げず。こは他日を期して視査することあらん。

かくて建勲社へは竹林を過ぎ畦道を屈曲し或は林を抜け或は町に入りてぞ進む。行くこと凡半里にして鬱然たる小山あり。即船岡山にして、社は其東腹適好の位置を占めて鎮座せるを見受けぬ。此日吾館友なる宮司阿知波(和)氏は出京中のことゝて不在なりしかど、禰宜長尾氏亦館に縁故あるの士、氏阿知波(和)氏と自己とを代表して百方吾等の為めに便宜を与へられたるは一行の深く謝する所なり。こゝに参拝を畢へ一行の全隊皆社務所内眺望佳絶の室に上りて弁当を開き且つ山上所生の松蕈を味ふ。時は已に二時に達しつらん、やがて柴田勝家の書面をはじめ文書三、四点及織田家三十六将の画帖などを一覧し、出でゝは市街の全景を眼下に瞰望し午前の労苦始めて稍慰するを得たり。あはれ当社の祭神信長公並に信忠公の勲績は今之を縷述するの寧愚に近くして徒に一笑を値するものならずんばあらず。又社建立の沿革は之なきにあらざれど其近年の事に属するやこれ亦言ふを要せざる所なり。知らずや公等偉勲の跡は明治聖代の後千載に亘りて愈表彰せらるべく、又之が社殿は其間に於て益宏壮森厳の観を呈し来るべきものなるを。現時保彰会の設あり、数年の内には社を山腹より遷して頂上に造営すとのことなり。仝会委員某氏また親しく一仝に語らるゝ所頗多し。曰く船岡山の名称は勿論山の形状によりてなるべく、当社の此地に建てられしは其所以天正の昔にあるなり。即言はゞ是秀吉の遺意に基くものにて、秀吉は当山と紫野大徳寺なる総見院との間に長廊を造営し、こゝには一寺を建て彼処を廟として崇敬を尽さんとしたりしなり。寺は半途までは成就し朝廷天正寺の号を賜へりと。一行遂に厚意を所員に謝してこの地を去りぬ。

建勲社より東北五、六町にして大徳寺に達す。巨松深く寺院を蔽ひ幽寂陰静毫も俗塵をとゞめず、実に禅学の大道場臨済宗一派の本山に恥ぢざるなり。御所陽明門の跡を見るに足る勅使門、千利休の造営に係はり金毛閣の揚額ある山門、釈迦本尊の大雄殿、次に法堂と官池、海橋のあなたなる経蔵、後藤益紹(勝)再建の方丈、一休の旧居真珠庵、さては明智光秀建立の唐門、聚楽第より移されたる日暮門等など、順次巡覧すれば何れも宏壮佳麗ならずといふことなし。かくて聚光院に赴けば利休の墓ありて六尺有余の苔石少しく缺損する所あり。旧総見院跡には信長の墓あり。信忠其右に坐し、信雄、信敏(好カ)、秀勝、信高、秀雄等の墓五基左右に並列せり。又西北一町余松林を過ぎたる処を探れば豊臣大政所の宝篋院塔ありて表面には「天瑞寺殿預修大功徳主従一位春岩宗桂大姉昭儀寿塔」と刻せり。右方に大小六基の五輪塔あれどそは何人のなるか分明ならず。かく境内看るべきもの豊富なりしかば宝物の如きは固より余等の問ふ所にあらず、是等すら一瞥早々にして間道を撰びて賀茂神社へ向へり。

その夕

泉川　祐市

初め一行と一行の為め此日先導の労を取られたる館友遠山氏と仝じく館友なる上賀茂社の禰宜藤本氏との間に契約あり。曰く此日の四時迄には一行は遠山氏と共に上賀茂に着すべしと。吾人が以上歴覧の末辛うじてなりともこゝに契約を果すを得たるは一は先導者の力により一は一行自から非常の勉励ありしを証するものと謂ふべし。されど秋晩の午後四時は寧ろ夕暮といふを至当とするのみか、賀茂社の宝物文書に豊富なるが丈け一行の着眼は時既に遅しと称せざるを得ざりき。宮司田村氏、藤本氏共に宝物全体の中最も出し易き種類を撰ぶの時に利なるべきを注意せらる。乃ち書籍文書類に限ること、し尚其目録中珍書の聞えある万葉緯の二十冊及此社にして能く見るを得べき競馬装束の模様図並に二巻三百通の古文書を撰みて一覧を遂げたり。就中万葉緯開巻の頁と装束画の二面とは夕刻ながら撮影を試みおきたり。文書は武家時代の部に属し、寿永、元暦、文治のもの六通、内に院宣あり頼朝下文あり、以下北条氏時代のものには下知状多く、足利時代の文書は下知状の外禁止制札及書状も交はり、織田豊臣時代のものに至ては

其数挙ぐ可からず、種類も朱印を始め諸種に亘れり。若し夫れ性質の如何と問ふものあらば即答へん、言ふ迄もなく当社領に関するもの其多分を占むと。されど是唯一行が眼目に触れしものに過ぎず、宝蔵社庫中抑若干の文書典籍と神宝珍器とが存する。上賀茂神社の祭神賀茂別雷命に関し奉りては余は山城風土記の書名を挙げて其詳を説くを止むべし。今奉祀の初めを尋ぬるに、そは遠く神武天皇の御宇に起り神山の西麓を其地となす。白鳳六年二月天武帝山城国をして今の地に神殿を営ましめ、仝時に把笏の禰宜祝を置かしめ給ふ。延暦十三年遷都の初め山城主宰の大神なるが故に桓武天皇此社へ行幸あり。この由緒この関係は従来平安朝廷千余年の間賀茂二社をして神宮に次ぎて他二十社の上に位せしめ、延ては今日猶大社の上位に列する所以なり。祭儀は古くより国祭官祭共に特有のものあり。一は欽明天皇の御宇天下豊熟を祈るために四月吉日を択びて走馬を奉りしに基し、毎年四月中申日山城国中の人民群集して騎射を奉り豊年を祷れり。一は平城天皇大同元年四月に勅使を遣はし奉幣せしめ給ふを始とし、今四月十五日に行ふ所謂葵祭是なり。この競馬と葵祭の官使行装とは一は勇壮に一は優美にして相並んで海内に比なきものなり。宮司田村氏特に語て曰く、去日其筋の人来て本殿屋根の構造を調査し之を流れ造りと定め其模式を挙げたり。当社の旧記には扨造の文字見ゆ云々と。是に於て一仝社務所を離れ藤本氏に導かれて詳しき拝観を遂げぬ。

所謂扨造の外特異なる点は本宮に正殿権殿並立てると渡廊の其中間にありて正権何れもの正前になきこと是なり。皇族の方々の御拝所なども定まれる様にて、若宮社は本宮の東に在り、中には左右の局、楼門には東西の廊あり。門前の水を御手洗川と云ひ河上の一殿を橋殿又は舞殿と称す。こは祭時勅使宣命を読みて拝礼し伶人東遊を奏する所なりとか。この外官使の幄舎なる土屋、上皇御座所なる細殿、又勅使通行の玉橋、往時行幸の際に御拝所たりし御座屋、曰庁屋贄殿、曰酒殿神馬屋及摂末諸社あり。鳥居は南北二にして其間は広濶なる芝生をなし老檜古杉鬱蒼として之を囲み本社前に近くに従て、境内幽邃清閑の気色極まる。こや殿舎と共にまた賀茂式と称す可からざるか否か。かく拝観しつゝある間に黄昏となりたれば謝して出でたつ。暫し田村氏と道を共にし、往時神職の家のみなりといふ賀茂村を過ぎりて長堤に上、長堤窮まる処やがて下社への入口なりしかど、夜中のことゝて単に遙拝したるのみにて打過ぎ、両教授はこゝより在京館友諸氏の招きにより懇親会へと赴かれぬ。その畢るや諸氏又豊後屋に訪はれ、厚く吾人を労はれたり。楼上歓声の絶えざること凡二時、一行が忘れんとして永く忘る能はざるもの蓋北日の此こと、諸氏を誰とかなす、遠山、藤本、長尾、大北、大崎の五氏是なり。

六日の一　　宮内　茂一

明くれば十一日朝まだきより雨甚し。錦の都も今日を限りの滞在とこそなりにき。素より探究資料に豊富なる旧京のことなれば、神社仏閣に、名勝旧跡に、一行が一瞥をだも未だ与へざる所頗其数あり。こを打捨てんはなか〳〵、こを歴覧せんか成蹟の不充分を免る能はず。則議は前来未観の場所に就て各自探究す可しとに定まり、一同七時過ぐる頃に宿を出で直に円山公園に詣る。こは旅行紀念として一同撮影しおかんが為め。乃ち玄鹿館をして知恩院山門前に於て写さしめ畢りぬ。かくて各自探究の緒は開かれ、或方面には数氏袖を列ねて往て観望し、或方面には単騎馳せ向ひて敵情を探るもあり。余は分散の時二、三氏と前後して豊国神社に詣り、一拝の後ち直に京都博物館に入る。

館は明治二十八年に落成せし者にて、其装飾の優雅にして構造の壮麗なる実に皇国美術府の博物館たるに恥ぢず。其内容を通覧するに、陳列品を歴史美術及美術工芸の三部に大別し、更に歴史部を七区に、美術部を四区に、美術工芸部を七区に細分し、各区の品類を挙ぐれば、歴史部には第一区発掘品にして金銀銅銭より陶磁七宝器具類、第二区礼式風俗に供する物、第三区武器馬具の属、第四区宗

教教育に関する書及用器、第五区貨幣度量衡信印の類、第六区図書、第七区書籍なり。美術部には第一区古今内外人の筆蹟なる絵画、第二区仝じく書蹟、第三区彫刻品、第四区建築品、而して美術工芸部は第一区彫刻嵌鏤を主とせる金属品、第二区窯製品、第三区抹漆品、第四区織繡物、第五区玉石甲角木竹品、第六区紙革類、第七区印章とす。余は通覧の際大体の評査を試みしに孰れ珍らしからぬはなく就中貴重なるものと雖其総ては到底枚挙に遑あらざるなり。只吾人の参考となり、珍玩すべきもの、幾分を摘挙すれば次の如し。先づ文書にしては、後白河天皇宸翰御消息一幅（妙法院寄託）、仝法皇御手印文覚四十五箇条一巻（神護寺寄託）、こは末文に法皇の御詞書なり。後鳥羽天皇宸翰御消息一幅（近衛公爵出品）この文言は次の如し。

御返り事こそかへす〳〵も悦覚え候へおほかた頼む人さふらはてはえ候まじく候へば御講にたづべき事は候はねども貧しきを捨てられず候はぬこそは世の為の御かためにても候はめと思ひ候ばかりに申候には円静などは見参にも入けに候へば便よく候はむには参らせ候て申候へば御忘れも候はで昨日仰事候ひしかへす〳〵うれしくたのもしう覚えて候けさも二位殿して内々は申て候ひつるにて候いかさまにも左様にまた六波羅より申なれば何とも事はきれ候はんつらんと覚え候さだつぐがかまへて〳〵とく〳〵申候へかしとおぼえて候あなかしこ

こは内裡にて行はせらるゝ御講に勤仕の僧をば後鳥羽帝より土御門、順徳両帝の内の当今へ御撰挙ありしに、其僧へ仰付られし由御返奏ありしに対する御文なるべしとか。次に後醍醐天皇の左文字消息と銘あるもの、陸中中尊寺毛越寺の別当衆徒間の争訴に対する文永元年十月廿五日附の鎌倉裁許状一巻（住心院寄託）、亀山仙洞の一なる芹川殿敷地を臨川寺へ寄附に就ての北畠親房文書一幅（天竜寺寄託）、伊達政宗の羅馬法王に贈れる書面並に訳文及支倉六右衛門肖像都合三枚（本館蔵）、広隆寺蔵にして仝寺の奥書ある貞観年間資財帳二巻等あり。塑像類には広隆、東福、六波羅密寺、蓮華王院等の寄託諸仏像と、仝室に運慶湛慶の彩色木像及平浄海座像あり。六波羅密寺寄託にして寺伝に前者は各自作、後者は運慶作と云へり。絵画類の中には南禅寺、青蓮院以下諸寺院所出の仏画をはじめ、元信の梅鶴小会の屏風画、友清の白衣観音図、真相の達磨図、林良の金鶏彫鷲、山楽の琴棋書画屏風画、蟾州の墨竹、杏雨の初秋山水以下四幅、柳里恭の雪中梅花の図幅、雪村の瀟湘八景、友松の人物画、直庵の渡口舟子及蕭白の蘆厂等あり。図書類には、縁起経文の外に、広元日記、千早城図、金沢文庫の巨（白）氏文集、集古文書の屏風一双、長福寺の集古文書八巻、御歴代の聖影、護良親王正行以下の筆蹟、尊氏筆の般若理趣経、勧修寺の百巻抄等あり。窯製品中歴史あるものには本能寺寄託に係はる信長所持の清洲焼、徳川氏累代の重器たりし青磁鳳凰耳の花瓶、天正二年春依台命長次良造作之の銘ある獅子像、康永三年の伊部焼壺、及穎川仁清楽二代常慶の香炉等あり。織繡物中には信長の陣羽織、義持より絶海へ所贈の廿五条袈裟最珍らしく、他に御物なる千鳥香炉、頓阿作の伝へある西行木像、光秀遺愛の松風硯、貞光貞泰の鞍鐙、祐乗作の二疋牛赤銅小柄及後藤家世々の作物あり。是等を一覧し深く興味を覚えし時恰も正午となりしかば、乃ち博物館を辞して東本願寺へ向へり。途上枳殻邸を望む。邸は東本願寺の別荘にして或は東殿の名あり。此地河原院の旧跡にして囲池の辺に融大臣の古墳ありとかいへど、見しにあらねば其実は知らず。

本願寺は東西共に真宗に属し、西を本派と称し東を大谷派といふ。蓋真宗は浄土より流をおこし一向恵念をその宗義となすを以て世に浄土真宗又は一向宗の名あり。亀山院の文永九年宗祖親鸞の女覚信勅許を得て宗祖の廟堂を今の知恩院境内に営み所謂骨肉の像を安置す。後十一年を経て同院の勅願所となり龍谷山本願寺の号を賜ひ宗祖の嫡孫如信を以てその住職とす。如信時に奥州大綱にありしかば覚恵をして大谷に居らしむ。是より子孫世襲してその寺主たり。正安元年後伏見帝亦勅願寺の綸旨を賜ふ。文明前後蓮如なるに至て彼大に宗風を発揮し寺運の

隆盛を謀りしが、之が為め寛正六年山門衆徒に寺を破却せらる。依て文明元年三井寺の徒に倚り粗影を大津近松に安置し、仝十二年之を山科郷野村に遷す。されど当時一向の勢力は旭日の如く法華宗と相共に漸く他諸宗を圧するに至り、其富強なる能く門主実如として後柏原帝即位の料費を献ぜしめ、其勧賞として朝廷之に紅衣も賜ひ青蓮院門跡となすに至ては本願寺遂に准門跡の尊位を失はず。又衆徒を語らひ戦場に出るの日に在ては儼然たる大諸侯の実力を有せり。されば武家中にも之を嫉むもの起り、天文元年には六角氏山門及三井の衆徒を語らひて山科の廟堂を焚き、証如是に於て真影を難波に移す。石山本願寺是なり。後天正八年顕如当地を織田氏に附し紀州鷺森に退き移りまた泉州貝塚に居り再摂津中島天満に転じ、やがて同十九年八月京都今の地に移れり。東西分立は此頃にして顕如文禄元年に寂するや嫡子教如一旦法嗣となりしも故ありて三年を経ざるに辞し、弟准如之に代はる。教如は後園に一坊を建てゝ往せり。慶長七年春、家康教如に賜ふに今の東本願寺の地を以て、新に殿堂を建立せしむ。由て教如再宗祖十二世の法嗣を称し、西准如と相拮抗す。爾来海内の門徒分れて二者に属し殆本支の別なきに至りしなり。余は先づ東本願寺に赴けるに、其堂宇に建築の古風こそ見る可からざれ宏壮雄大にして金碧五彩実に人目を眩輝せしむる許なり。蓋第十三世宣如第十五世常如の時大に殿堂を建築せし以来、天明文政元治に於て三度全焼の悲運に遭遇し、今建つ所の者は大師堂は明治二十二年五月、本堂は同廿五年十一月の建築落成に係はれり。而も却て明治建築の模式と迄称せらるゝ巨殿を示しおるは以て本寺の勢力を卜するに足れり。大門は本堂の前にありて菊門は其北にあり、こはもと豊公の伏見城にありたるものなり。阿弥陀門又は日暮門と云ふ。撞鐘堂も亦伏見城中の井戸屋形なりきと云ふ。境内一大偉観を呈せるは噴水にして、そは琵琶湖疏水を日岡峠の舟溜より鉄管にて引き以て北方の火防池に噴出せしめたるもの、境内の景之が為め風韻の添へらるゝを見るなり。次に西して本派本寺境内に入る。本堂には骨肉の像とて宗祖自作の影を安置す。伝へ云ふ、没後遺骨を細抹し漆に和して其面を潤色せりと。別に阿弥陀堂あり。集会所、転輪蔵、鐘堂、鼓楼等、其他建築甚多し。就中由緒あるものを述ぶれば鼓楼の太鼓はもと大和西大寺の所蔵、鐘堂の鐘は太秦広隆寺のものにて少納言入道信西の銘を鐫せり。唐門は東山豊国廟の旧構を移せしにて人物走獣等の彫刻精妙なるを以て著はれ、東南の一隅にある飛雲閣は豊公聚楽第にありしを移したるもの、其他方丈といひ摘翠園といひ結構の善美排置の適好なる夙に好事家の称する所なり。已に一覧を畢へしかば堂前に蟻集せる参詣者押し分けて北本国寺に至りぬ。

本国寺は法華宗の本山にて開基は宗祖日蓮なりとす。即彼れ建長五年に鎌倉の名越松葉谷に一草庵を結び法華堂と名付けて根本道場とせしより、弘長三年七月其再興の折には改めて大光山本国寺と号し、文永十一年身延山入隠の際之を日朗に附し、日印を経て日静の時に至り貞和元年北朝光明帝の勅にて京洛今の地に移せるものなり。境内に本堂、祖師堂、番神堂、方丈、人丸社、鬼子母神堂、一切経蔵、三光堂等の建築あり。本堂は法華経（日助僧都一字三礼の筆）を本尊とし左に釈迦仏（定慶作）右に多宝仏（仝作）を安じ、祖師堂には日蓮の画像を奉置す。方丈の妙法華院と隷せる横額は水戸光國卿の筆にて此亭初めは安土城のものなりとか。番神堂には太田道灌の建立加藤清正再建の歴史あり。人丸社は紀貫之勧賞俊成再興及尊氏進詠の伝へあり。庭園亦見るに足り、尊氏の駒繋松月桂梅うたゝね水烏帽子石等あり。抑当寺の地たる往昔六条判官為義の第趾にて源義経の住せる堀川の館も亦此処なりと云ふ。そは当寺に蔵せる足利直義の下知状に六条法華堂屋敷南は森の裡田を北は五条今道を、東は御所の旧堀を堺す云々とあり。之を平家物語は阪本に所謂六条堀川の御所に押寄せ油小路なる表門を云々とあるに比するに相当れりとなり。宝物には鴛鴦曼陀羅とて鴛鴦の紋ある花色地の切を以て表装したる日蓮の筆蹟あり。当寺無二の什宝にして俗間伝へて楊貴妃の上衣なりと云ふ。世に本国寺と云ふは是に摸したるものなり。此外見る可き物多かれど漸々時の過ぎ行くにぞそゞろ帰路に就く。

途すがら因幡薬師を松原通り俊成町に、六角堂を六角通烏丸の東に眺めぬ。何れも明治年間の建築にして共に元治の兵火に罹りしものなり。薬師の本尊は日本三如来の一なりとか云ひ、其名の起原は一条院の長徳三年に因幡国賀露津の海底より引上げられしによるなり。往古代々の天皇御厄年に渡らせ給ふ時は毎月薬師詣とて勅使を参向せしめ給へりと云ふ。六角堂は又頂法寺と云ひ、用明天皇二年聖徳太子の開基に係はり、本尊金銅如意観音の出所また薬師に彷彿たり。而して当寺世々の住職池坊の祖は当時守護を命ぜられたる小野妹子なりとぞ。本門入口に臍石とて円形凹状のものあり、往昔京師の中心を測り設けしなりと云へど、今のは近年の据付なり。兎に角堂の構造の六稜あるは珍らしくもまた奇観を呈し一見の価値あるものに属す。旅宿に帰りし時已に先着の隊一つ。

その二

春木　武豊

一行分散の後は篠衝く雨を辛くも一枚の外套に凌ぎつゝ唯一人八坂神社の鳥居を抜け出で一直線に祇園町を過り四条の鉄橋を渡りて伏見行の電鉄に乗る、枳殻邸の辺にて下り室町通に出で西本願寺を過りて大宮通と云ふを南へ南へと急ぎ、官設鉄道を横切りて猶ほ南すること約六町のほどに東寺に達しぬ。時に午後一時なり。此所ぞ余が雨を衝いて来し目的地なるものからその心して先づ慶賀門（東）より入る。此門創建年代は未詳なれど建久九年文覚上人頼朝の命を以て修営せる所、朱を以て塗り古来勅使参向の門なり。門内右に浴室あり厄除地蔵尊あり。老婆ありて茶菓をひさぐ。北大門は八足門とて延暦十五年桓武天皇御創建、永徳二年の再建なりと云ふ。門の左に弁財天女の祠、其の右側に閼伽場とて一井あり。門内に桓武天皇御尊牌堂、その附近に山階宮晃親王御手植の桜あり、又鎮守御社てふがありて八幡三所（弘法大師作）武内宿禰（仝上作）を祀る。伝へ云ふ、平安遷都の初東寺を艸創せらるゝにあたり帝都鎮護の為め勧請せられたりと。又元は南大門の辺にありたるを明治元年焼失後此所に遷せりといふ。其南に大師堂、愛染明王、毘沙門堂などあり。元弘三年六婆羅陥落して車駕御還幸となるや天皇先づ東寺へ行幸あり松子房にて松のことを問給ふに、前大僧正頼意事の由を奏して歌一首「植ゑおきしむかしやかねて契りけん今日の行幸を松風の声」、と詠し奉りけるその松子房の松は西院の乾位にあり、真言宗宗務所、真言宗各宗連合法務所などに隣して灌頂院あり。こは宮中後七日御修法御修行の道場なりと云ふ。創建承和十一年道興建立、寛永十一年明正天皇の勅命を蒙り徳川家光再建せし所なり。南すれば松翠滴らむが如きの下石点々たり。堂宇の基石なる知るべし。南大門は九条通に臨みて立てり。大さ他の二門に過ぎ幅八間奥行五間、桁上の彫刻物古色をおびて見ゆ。更に門を入れば左に八島神社有り稲荷を祀る。正面には金堂、講堂、食堂前後して立ち大さ相等しく幅凡二十間奥行凡九間朱色なり。寺記に由るに金堂は延暦十五年桓武天皇勅創、慶長十年豊臣秀頼勅命を奉して再建せる所、京都大仏殿の雛形なりと云ふ。講堂は天長二年淳和天皇御建立、慶長年中豊臣秀吉北政所再建、食堂は延暦十五年桓武天皇御創建、文化五年再建なり。金堂の東南に五重塔あり。その基は約五間の正方形にて日本第一の塔なりといふ。天長三年弘法大師創建、寛永十八年に徳川家光勅命を蒙り之れを再建す。其の左に宝蔵あり、後七日御修法の大曼荼羅道具を納む。創建年代不詳、建久九年文覚上人の修営に係る、其のあたり草茫々として見るに堪えず。瓢箪池其前にあり。北大門より出れば真言宗高等中学校、私生殿など左右に並立せり。西に蓮華門あり、一に之を不開門と云ふ。伝へ云ふ、此門は東寺創建以来の古建物なりと。蓋弘法大師此門より出で高野山に行きて遂に帰り来らざりしかば、時人大に悲み此門を閉鎖せりと云ふ。外より行きて見るに蜘蛛の網、鳥の古巣など堆くまつはり実に千古の想あらしむ。東寺の由来につきては、歴代編年集成に曰く、延暦十五年丙子大納言伊勢人を以て造寺長官となし東西両寺を建立せしむ。東寺は南北二町、南は九条北は辛橋、東西二町、東は大宮西に壬生なり云々。河海抄に曰く、弘仁以来東鴻臚を東寺となして弘法大師に賜ひ、西鴻臚を以て西寺となして守敏に賜ふ。

其後七条朱雀に鴻臚を建つ云々。和漢合運に曰く、延暦十五年冬東寺を創す云々。又云嵯峨天皇の御宇弘仁十四年正月東寺を空海に賜ふ云々とあり。鴻臚館とは令玄蕃寮の条に監当館舎謂鴻臚館也とありて蕃客来朝の時の旅館と定められしものなり。之を此所に置きたるは必竟事務施行の便利上よりせしものなるべく、源氏桐壺の巻にいみじうしのびてこの御子を鴻臚館につかはしたり云々とあるは此所にはあらで七条朱雀の方なりにしや。かくて当時東寺が宗務の最高府にして勢力天下に比類なかりしや明なり。下りて弘法大師の東寺に於ける関係の大なるは、水鏡に大同二年十月二十二日に弘法大師唐土よりかへり給へりき東寺の仏法これより伝れりしなり云々とあるによりても知るべし。また如何に世人の大師を欽慕したりしかは彼の蓮華門の故事によりても知るべし。御修法の由来を尋ぬるに、水鏡仁明天皇の条に弘法大師の申し行ひ給ひしによりて今年より後七日の御修法はじまりしなりとある如く、承和元年十一月弘法大師国家の為め後七日御修法施行あらせられむことを上奏し同年十二月二十二日勅許を蒙り、翌二年正月八日より同十四日迄宮中真言院に於て弘法大師を大阿闍梨とし即ち東寺の長者に補任せられ天長地久玉体安穏の勅願を勧修せしめ給へること其始なり。爾来明治四年に至る迄千有余年恒例として御修行あらせられ其後御廃止となりしが更に明治十六年一月より復旧、毎歳寺門に於て執行せしめられ京都府知事之を臨監すと云ふ。世に羅城門を東寺の南大門なりと云ふものもあれどもその趾は明に東寺の西方千本通四つ塚に在り、余が南大門前の人家につきて四つ塚は何所？と問ひしに此所四つ塚なりと答へしは訝かし、何れにせよ羅城門は一は朱雀門と云ひて京城の中央朱雀大路にありたるものなれば、南大門なりと云ふは全く誤れる説なり。西鴻臚の趾なる西寺は数多の変遷によりて荒廃し今は僅に一小寺を遺すのみと云ふ。惜いかな日遅くして往きて見る能はざりき。当寺所蔵の宝器画幅及び古文書等に至りては、弘法大師真筆の風信状・請来録・付法伝、並に唐朝伝来の宝器・法具、御修法の曼荼羅、五大尊・十二尺(天)・山水屏風等を始め、歴朝の詔勅宸翰及幕府将軍の荘田寄附の下知状及勅願所写の経巻、唐宋日本の奇籍等、今尚ほ存するもの殆んど万を以て数ふと云ふ。今寺記によりて国宝となれるものを挙げむか、

一　弘法大師消息　伝教大師へ贈る文　世に風信状と称す　壱　巻
一　弘法大師貴告　弘法大師筆　壱　箱
一　十二天画像　伝へて弘法大師筆といふ　十二幅
一　七祖画像　内五祖は唐李紳筆、竜猛竜智二祖は弘法大師筆　七　幅
一　山水図屏風　伝云弘法大師請来　六枚折　一　双

此の他御宸翰綸旨など二十余巻あり。言まくも畏けれど此等は後宇多、花園、後醍醐、後村上、後光厳、後円融、後花園、後土御門、後柏原、後奈良、後水尾天皇御歴代の下し給ひしものなりと云ふ。附記す、東寺を教王護国寺と改称せしは淳和天皇天長二年なりとぞ。北赤門を出で左して郷社六孫王神社に詣づ。社域広壮にして頗る清潔なり。南門と云ふを入れば左に貞純社あり、貞純親王を祀る。前庭に神竜池あり、清冽掬すべし。社務所に就きて社司男爵梶野氏を訪ふ、在らず。夫人懇切に案内せられ且つ由緒書と境内の図とを与へられたるは余の大に謝する所なり。本殿には六孫王源経基を祀り、相殿には天照大神、八幡大神を祀る。満仲の霊祠は本殿の北にあり。又背後の林中一巨石室を構ふ。経基の遺骸を納めしものといふ。本社は応和年中源満仲の創建にて、元禄十三年僧南谷幕府に乞ひ再建せしが今の社殿なりとぞ、仝十四年に権現号を賜ひ正一位を贈らる。其かみ朝廷の御崇敬厚かりしは兎角今上天皇にも御元服御即位其他御大礼の節々には特に御祈祷仰せ出させ給ひきと云ふ。社内に元は遍照院と云ふがあり源実朝の後室八条禅尼の起す所にして一に尼寺と称したりしが、維新の始境外に移したりとぞ。満仲の誕生水その院内にあり、京都七井の一と称す。薄暮辞して帰路に就く。七条村より千本通を経て彼の壬生狂言に名を知られたる壬生寺を見むと欲せしも雨頻りに至り加ふるに日全く暮れたれば、転じて島原より西本願寺に出で、五条、四条、三条と数へ行きて遂に旅館豊後屋に着く。時に午後八時なり。

六日の三

友枝　照雄

各自探究の緒開かれてより余等は八坂神社にとゞまり詣でぬ。本社を牛頭天王祇園社など云ふは神仏混合時代の遺称にして牛頭天王とは素盞嗚尊の御事。中央に該神をまつり東間に稲田姫、西の間は八王子をまつれり。其濫觴に就きては二十二社註式に牛頭天王垂跡於播磨明石浦広岑其後移山城白川東光寺其後移感神神院と云ひ、改暦雑事記には貞観十一年始天皇従播州遷座。播磨国峯相記には吉備公帰朝日於当山奉牛頭天皇暦年数為平安城東方守護奉勧請祇園荒町とあり、また慈恵大師の伝に天延二年云々蓋斯神は素盞嗚尊にして播に在ては広峯と号し尾に在ては牛頭天王と称し陽成院の御守に当り来りて京師に化す云々とあり。以て其大略を知るべし。かくて感神院坐せし間は別に神殿はなかりしを後昭宣公殿宅を寄進して始て社とせしなり。爾後改造皆其様式によると云へり。鳥居の西路傍に南向の社あり。山王社とす、名跡志に山門濫訴の事度度に及ぶや日吉本社の神輿を祇園社に移せりとは此所に置奉る也と云ふ、さもありぬべき事なり。

さて此地昔は蒼樹鬱々たる地なりしならん、盛衰記に祇園社南門鳥井の芝草の西に当て光物こそ見えけれ祇園林の古狐かと平忠盛之れを捉へたるに僧の火を点じたるなりとあるにてかくは思ひやらるれと。今は人烟茂くて楼閣軒を並ぶるに至りけるぞ定めなき世を歌ふたねなる。又嘗ては桜樹境内におびたゞしくして花の頃は殿堂楼閣さながら白雲靉々の内に包まれたるが如かりしと云へど近来はさけど(ママ)多からず。社の東に祇園桜とて壱株の垂枝桜あり。げにや巨幹繁枝空に広ごり一樹よく其名を代表するに足れり。大方此のあたりいと妙に人巧を尽し木石の配置まことに神に入れり、所謂円山公園是なり。梅窩山推の所謂商架大籌映万枝一群裙屐晩帰時思ひやるべし。かくて園内を彷徨する事暫時、遂に去て知恩院に向ふ、門前瓜(瓜)生石てふ奇石を一見し、そが奇なる所以を聞き得て更に奇なる思ひしつゝ山門を通過し、石段を上りて本堂の門前に出づ。表面に揚げたる大谷寺てふ額は後奈良天皇の御宸筆なり。本寺は浄土宗の総本山なり。承安中僧源空比叡山黒谷より出で庵室を造り此に居る。当時之れを大谷禅室或は吉水禅房と云ふ。治承養和の間、遂に浄土宗を開けり。之即ち源空を開基とす。此の地昔は山嶽にして各堺広漠なりしかば大谷と称せりとぞ。殿堂巍々として山に倚ひ楼門高く聳えて老松の間にあらはれ処々桜楓の散在するを見る。其のながめの秀麗なる事え得はず。やがて案内を乞ひて本堂の背後より回廊を渡り方丈に至る、方丈と本堂との連接廊下十間ばかり歩々微かに声あり。恰も霞の奥に鶯声を聞くが如し、鶯張之なり。工の妙を得たる事感ずるに余あり。方丈の各室には名手の筆になれる画あり、第一仏間（蓮華極彩色の画は狩野尚信にして安置せる阿弥陀の立像は安弥映慶の作）拝間（金張附松に鶴の画々工同前）上段（床には瀑見の李太白を中彩色にて画く画工同前）中断（鉄拐張果郎を画く画工同前）下段（劉女西主母を画く画工狩野信政なり）鶴間（金張松に鶴彩色狩野尚信の筆）梅間（金張附梅に雉と松に鶴極彩色画工狩野定信の筆）裏上段（金張附梅に竹并に音吁鳥狩野尚信の筆）菊間（金張附極彩色の菊狩野政信の筆）鷺間（金張附柳に鷺極彩色画工同前）柳間（金張附柳に燕極彩色法橋定信の筆）等とす。東南の丘上にある鐘楼は方四尺にして懸鐘の高さ一丈八尺直径九尺厚さ九寸五分頗る大なるものなり。寛永年間の鋳造物なり。こゝを見捨てて双林寺に至る。本寺は延暦年中桓武帝の御願にて伝教大師の開基に係る。古へより花紅葉の眺よく幽邃閑雅の境たるをもて風流の士近く居をトせしもの少からず、豊太閤またいたく愛てゝ花の制札を前田玄以にかゝせて時の住職弥阿弥に与ふ。その文「当寺山林竹木不可伐採次花折取事堅命停止之畢仍如件云々」。花の勝地として如何に重せられしは之を以て知るべし。伽藍今は昔の面影なし。これより隠棲者の古跡を尋ぬ、第一性昭塔、性昭とは康頼の法名なり。一時孤島配処の日に血涙を流せし身の時至りて花晨日夕の風光を愛で得たる彼が運命は猶忍ぶべし。彼の墓見るにつけて衰にたへぬはむしろ他の一人か。第二西行塔。此所にて率(卒カ)せりとなり。されど河内国弘川の山中ともあれば何れか真なる識者の教をまつ。第三西行庵。庵は当時入口の南側なる茅葺の小堂なり。中に西行自作の像並びに頓阿の自作の像を安置す。堂の傍に桜あり、これ西行の殊に愛でしものとて西行桜と名くと云ふ。当門前の南側なる芭蕉堂を訪ふ。彼につきては世人のよく知る所なるが、此処に其堂あるは西行東山に阿弥陀坊と申したる上人が庵堂にまかりてよみ

たる歌に「柴の庵ときくは賤しき右(名)なれども世のこのもしき(ヒ)住なりけり」の歌を芭蕉見て其坊の如何にもなつかしければ「柴の戸の月やそのまゝ阿弥陀坊」、とよみしことあり。その縁にもや、北側に大雅堂あり。蓋池野状平葛原の筆堂に没す。門人等其跡を空らせんことを嘆き、曩日木下長嘯子の霊山に建置きし歌仙堂の頽破して柱礎などの残りしを請求め、之を基として此堂をつくりしなり。其軒瓦に大雅堂の篆印を記して葺けり。次に本堂を辞し高台寺に赴く。高台寺に建仁(ママ)寺に属す。慶長年中豊臣の夫人浅野氏其実母朝日局の為めに一寺を寺町に創建し康徳寺と称せしが、秀吉薨するに及び浅野氏落飾して高台院と称し、更に一寺を建立して秀吉の冥福を訴(祈カ)り且終焉の処と為さん事をほっす。家康関原に克つや夫人の心を察し慶長十年酒井忠世、土井利勝に命じて此地に伽藍を建て領地を寄せて之を浅野氏に授け、康徳寺を移して其塔頭に列し王雲院と改称し、本寺を高台寺と号して曹洞宗に属せしむ。開基は弓箙禅師なり。其後建仁寺の三江長老こゝに住して中興の祖となり、建仁寺に属して臨済となれり。明治十一年の火災に開山堂と豊太閤夫妻の廟等は幸に焼亡を、(ママ)免れ依て僅かに昔の面影を存す。先づ拝観の旨を通じ案内に導かれぬ。其内主なるものは唐銅獅子の香炉唐銅の燭椎黒の机秀吉の北侍所の使用せし倚子等あり。開山堂は其天井は政所高台院の車の上屋の天井と朝鮮征伐軍艦の天井とをもて張れりとの説明に、連想せらるゝは万里の波濤を蹴て鶏林八道を蹂躙せし日本武士の遺勲なり。これより小堀遠州の手になりし臥竜と号する石階をのぼる。各段次第に高まり恰も竜の鱗の如くいとも奇しく巧を尽せり、其尽たる所の頂上に秀吉及び政所の霊舎あり。宝形造にして間内柱長押上下の敷居皆黒塗、長押の上に三十六歌仙の像を掲げ、中に唐冠持笏の秀吉の像と法体花帽の政所の像とを安置す。後陽成院の御宸筆なる豊国大明神と云ふ額をもかゝげあり。魂舎より前庭を見下せば水木石の立たずまひいとをもしろく何となく心動けり。加ふるに萩の名所なる名にもとらず、花は疎松の間に色深く枝たをやかに咲き乱れ、恰も翠蓋の下に錦をしきなせるに似て思はず賛美の声をとゞめ得ざりき。兎角の中に時うつりければ別をつげ清水に向ふ。時に午前十一時過、十二時頃陶器に名高き清水坂に漕ぎつけ茶店にて昼餉す。暫時休憩の後勇を振ひて清水寺に登る。本寺は水鏡桓武帝の条に七月二日田村将軍清水の観音をつくり奉り又我家を毀ちわたして堂に建てき。とあるにて草創の故由を知るべし。尚詳しくは歴代編年集成、河海抄などに見ゆ。殿堂崕に架し長塔空に聳え、地勢高爽眺望雄豁にして、崕下段々の低地には楓葉今を盛と紅葉し、其間に高閣あり又三条の懸泉見ゆ。之には白絲又音羽の名あり。その滝壺の水は小川となりて楓樹の間を曲流し、げにや谷川の渡らはにしき絶えなむ風情たとへん方なし。目を転じて市街を望めば、万戸足下に集まりて竜断を私するのそしりや受けむ内幕を捕獲するの利やあらんと云ふべき程なり。今此地の十景を記さんには、一、古崖懸泉。二、春巌開花。三、音羽畳翠。四、霊鷲疎鐘。五、洛陽万戸。六、鴨川一帯。七、東郊烟雨。八、西門遠眺。九、岩嶺晴雪。十、亀阜暮靄。なり。これより石壇を下り滝下に出でなど処々彷徨ひて後茶店にて咽を濡しぬ。崖上に延鎮僧都の住房の跡とて千手堂といふあり、昔法然上人不断の常行念仏を聞きしより今も退転せずして修行せりといふ阿弥陀堂又同処にありと云へば直に尋ねぬ。前は楼閣を構へ崖によりて起ち、飛瀑の音は足下に聞えいともおかしき眺望なりけり。滝の南辺を歌の中山といひ、其奥に清閑寺と号する寺院あれば歩を転じて之に向ふ。げに其名の如く清閑幽静なり。丹楓錦をかけて秋に宜しく翠竹は涼を生じて夏に宜しからむ。闌更の句に「紅葉ちりて竹の中なる清閑寺」とあるも宜なりかし。当時の縁起等を尋ぬるに寺記云「清閑寺者千手眼(千脱カ)観自在菩薩垂応元道場高倉上皇陵廟之陳迹也云々」拾芥抄云「清閑寺佐伯公建立」と史上有名にして其昔小督局清盛の為めに止むなく尼となりしは此寺にして、又高倉院の御遺骨もおさめられけり、何れにも詣で吊ひにけり。時いたく過ぎければ再び清水に出でさて鳥辺野を下る。墓石塁々として松樹点々たり。数多の偉人傑士美人才子此下に長眠せるも、とこしへに消えやらぬ魂魄常盤木の色に見えけるもあはれなりや。

妄想に追ひやられつゝ一町ばかりも下りし頃右側に一寺院あり、これを本寿寺といふ。寺内至る処墓石なるが中に高さ四尺ばかりの石塔あり、宗秋信士妙秋信女とあり。寺僧にとへば是ぞ所謂村俊（おか）伝兵衛の墓碑なりける。柱に結びたる多くの紙は縁結びにやあらむ、一笑して建仁寺にと赴けり。着きしは午後五時頃なり。本寺は臨済派、開祖は栄西なり。天文年中火災にかゝりて以来堂塔伽藍の壮厳また見るを得ずなれりと雖も近時稍旧観に復せりと云ふ。望闕楼てふ山門ありしと云へども今は跡のみ残れり。翰林五鳳集に瑞岩の作「望闕高楼対帝城楣間誰昔独佳名掖花青柳吟眸裏撩起唐僧応制情」とあれば思ひ半に過ぎん、又本寺の南方の中門を矢立門と云ふ、軍箭のあと其扇にあるを以てなり。本寺を去りて六波羅密寺に至る。数度の火災に殿堂の多くは灰燼に帰し、幸に本堂の残るあり。六百年前の建築ほどありて古物たるの価値優に存するを見る。他は見るべきものなし。かくて今日の務も終れるより悠然街巷を大歩して帰宿せり。時に午後七時。

その四

小深田長信

余等は下京東南部を探究せんとて先づ知恩院を一見して山門を下りまた公園を横断して長楽寺を左側に眺め、東大谷、高台寺、清水寺をも瞥見し下りて清水の坂に退き、こゝに同意三名に会して飲喫後辞して鳥部野を過ぎ西大谷に至る。こは親鸞上人の廟所にして又龍谷山と称す。裏門より入れば堂宇林立老樹蓊鬱として一見幽邃の趣あれど其地高丘なれば眺望又絶佳なり。こゝに雨中の景を一望して旅情を慰し、さて納骨取扱所前を過ぎて唐門の前に至れば泉池あり。夏日蓮花池に満ちて清香人衣を撲ちたるかの如き面影見るべし。是れ皎月池と称するものなり、池上に石橋あり、之を円通橋と号し俗間目鏡橋の名高し。花崗石を畳み奇巧を尽し東山の一佳境をなせり。蓋し弘長二年十一月二十八日親鸞上人の寂滅するや火葬を東山の西麓鳥部野の南なる延仁寺に営み遺骨を鳥部野の北辺大谷に納む。後文永九年改めて西方吉水の北辺即ち知恩院山門の北崇泰院の後園に移し茲に仏閣を建立して影像を安置せしが、慶長八年准如上人の時台命によりて現在の地に移し尚旧名大谷を称せしものなり。之を伝記に徴するに天正十七年十二月秀吉墓地の祖（ママ）を免じてより元和六年徳川幕府も先規に准じ、万治三年仏殿の再興あり。元禄七年更に廟堂を建営し、慶応三年焼失の後明治三年十一月に仏殿亦成ると、よりて現在の建築物は極めて新しきを知るべし。辞して唐門を出で南行数町にして妙法院に達す。

妙法院は延暦寺恵亮を開基とし代々法親王御相続ありて山門の座首たり。入れば直に林泉あり、敢て奇巧を弄ばず。長松老楓の間音羽山清水寺を眺望すべし。聞けば小堀遠州の作なりとか。境内北部に精翠園あり。今は荒廃に属するも老樹陰森苔石蒼古の観ありて園名に負かず。宝物は縦覧の暇なきまゝ題目なりともと寺僧に叩くに、其重なるものは不動の画一幅、後白河帝の御筆。豊国神社臨時祭の図六枚、屏風狩野内膳の筆。唐金の水指高七寸重さ一貫百四十六匁容水三升五合。頓阿法師の碣、質は澄泥なり。秀吉の装束一式並に朝鮮人の衣服八領裳一枚脚絆一双沓一両、但し朝鮮人の衣服等は同国王より秀吉に贈りたるものにてかの当時の服制様を知るに足るとぞ。後白河院御肖像、御自筆。古鏡経三寸八分柄長二寸八分、背面に楚衣冠尊胆祖の六字を書し秀吉の遺物なりといふ。其他多しと聞くに天さへ怨に堪えずてや涙の雨の地を叩ことこの時に切なり。平安通志及其他当寺記に近きものを見るに、後白河法皇特に仏法を信じ、法住寺殿、三十三間堂、新日吉社を建られ給ひ、法皇の帰依僧なる当院住持昌雲に之を附せらる。依て法皇を中興の祖と仰ぎ、高倉帝の第二子尊性法親王坐主に補せられ祇園の南なる綾小路に移りて小坂殿亦綾小路宮と呼ばれし時より門跡と称すと。金枝玉葉の住坊たる是よりの事なり。其後豊臣氏の大仏造営に際し、道澄法親王鏡銘の事より白川に避け給ひしが、常胤法親王勅によりて大仏殿及豊国神社の事を管理せしより此地に移りて境内を拡張し堂宇を荘麗にするを得、且領田を寄せられしかば、寺運更に勃興せり。当時東福門院の旧殿を賜下せられて寝殿となし又唐門を賜

神宮皇學館本科「平安ふみわけ衣」（明治三十四年）・「四年生修学旅行日記」（明治三十八年）（館史）

ふ。大庫衰（裏カ）には豊国社大祭の千僧供養の建築物を充つ。維新後其寝殿毀損す。又今の本堂は普賢堂を移し建てたるものなりとぞ。辞して其南隣新日吉神社に拝す。旧地は是より南日吉坂といふ所なり。応仁の乱に破砕せられ、其後妙法院堯然法親王再建し給ふ。祭神は言までもなく近江日吉神社と同神なり。こゝより東の方を見上れば幾百の階段或は滝と見え又渓谷流水を見ゆるがあり、その左右は楓樹翠松の間に点綴して風景愛すべく、頂上に一の五輪塔あり、史に秀吉慶長三年八月十八日歳六十三にて薨じ、九月上旬その遺骸を阿弥陀峰に葬るとある即是なり。徳川時代には殆荒廃に帰し居りしを近年豊国会の再興せしものなり。次に殿舎拝観所と看板懸けたる門の見えけるに往きて尋ぬれば、何ぞ図らん是れ二三年暹羅国より齎したる仏骨にてありしなり。早々にして此の処を辞し去り、次に智積院に至る。智積院は豊臣秀吉其子棄君の早世を哀み菩提の為めに一寺を建立して祥雲院と号し、妙心寺南化和尚を開基とせしに初まれり。その後故ありて妙心寺の不鳳院に移す。偶々真言宗新義派の徒其本山根来寺の廃絶を歎きて屡家康に愁訴す。家康新義派の断滅を惜み、元和元年右祥雲院の建物を其侭賜ひて根来寺智積院と称し、即ち真言新義派の総本山たらしむ。開基は南和にして、宗旨の上には真言宗新義派の本寺なり。庭中の林泉頗絶佳にして、其の大広間には呉春筆松鶴の図を附したる几帳あり。本尊は不動明王、興教大師の作なり。方丈の各室には名画多く什宝の見るべき値は十分なれども、例の時間に苦しむこと切なり。聞くがまゝに記せば下の如し。山水の画、寺伝馬遠の筆。牡丹に獅子の図、滝に二獅子の図、滝見観音の図、薬師十二神将の図、以上四幅共に永徳の筆。浪岸の図一幅、寺伝王摩超（詰カ）の筆。孔雀明王の図、張思恭の筆。五字の文殊二幅、永真の筆。五大尊不動の像一幅、寺伝興教大師の筆。乾建婆（闥カ）王十五鬼神の図、呉春の筆。華厳経一巻、天平十二年の書。増一阿舎（含カ）経一巻、寺伝天平宝字二年。等あり。講堂、東福門院の旧殿を賜ひ真享（貞）二年再建せし所。開山堂、大師堂は寛永中学侶の醵資を以て建設せられたるなり。殿堂、庫院、近時修営を加へたる跡見ゆ。即辞して歩数五、六十にして修成院前を過ぎ、三十三間堂の東白衣弁財天に達す。何心なく飛込みて仰ぎ見ればこは如何に血天井あり。依て之を問へば桃山戦死者の形見として桃山古城の血天井を以て此地に移し建立せしものなりと。出でゝ法然塔を見て三十三間堂に着きぬ。庭園荒廃して見るべきの景なく、只古色蒼然たる名の如き一堂と一朝暴風の襲ひ来るあらば立所に仆れんばかりの矢場とあるのみ。即ち堂に登る。堂の柱は元より垂木等に至る迄彩色を施したりと雖ども今を去ること凡そ六百卅有余年前の建築物なれば、その画様剥落して明ならざるは遺憾千万なりき。本尊千手観音の立体は湛慶の作、二十八部衆、風神雷神は運慶の作、其像一千体の千手観音の立体ありて眼目ぎろぎろ然たり。或説に曰く、初め鳥羽上皇長承元年三十三間堂を此地に建立し得寿院を名けて一千一躯の観音を安置し給ひたりと。然るに二条帝の長寛三年、後白河上皇更に三十三間堂を建設し同じく一千一躯の観音を安置して蓮華王院と号せらる。都名所図絵には上皇のこゝに至れる原因を戯曲まがひに書きしるせり。宝治二年両寺共回禄の災に遇ひ、文永三年再興せられしが、此時両寺合一して蓮華王院と呼び得寿院の号は失せにき。現在の堂は即ち文永再興のものにして、南北六十間一尺四寸東西八間三尺七寸、南北柱と柱との間三十三間の建物なり。是より博物館を通観し、出でゝ其北隣なる豊国神社を拝み奉る。社前に鉄灯籠あり、慶長五年釜匠与二郎の鋳造せしものなりといふ。初め秀吉の薨ずるや慶長四年三月其廟に社殿、廻廊、拝殿を設け、朝廷勅して豊国大明神の神号を贈り賜ふ。其後徳川氏の世には勢廃頽して毫も昔時の面影なかりしが、明治十年現今の地に社祠を建し旧に復するに至れり。太閤の霊稍慰するに足らんか。再拝表門を出づ。門は桃山城門を移せしなりといふ。北隣大仏殿を訪ふに荒廃も甚しくて大仏も南入口に半像あるのみ。元秀吉創建の時は木像に漆膠且つ五彩を施しいと花やかに作られたるを、乍にして地震の為めに崩かれ、其後火災或は震災にて或は金銅或は木像と数度の改造を経しが、寛政十年七月雷火の為に凡て灰燼となり、近時漸く此の半像を作りしものな

り。境内の大鏡は夫の冬夏陣の起因となりしもの、其時のものにはあらざれど一見懐旧の感を惹起せしむるに足る。これより退き出づるに石垣の巨大なるを見て皆愕然たり。是れ即ち列国諸侯の寄附に成りしものなり。当時諸侯各出所家名又は紋所を石面に鐫せしものなるを、惜かな災害を経るに従ひ今は詳ならずなれり。五、六歩進む程に或人耳塚はといふ。嗚呼の一声諸共に踵を転じて塚のもとに至る。塚上石塔あり。高さ二丈許底面積十五歩もやあらむ。嗚呼盛なる哉文禄の役、哀なる哉敵兵の耳又鼻。時に午後六時を過ぐる正に十分、炊煙天に騰り晩雲湿気を飛ばす。剩へ道路人馬の往来織るが如く泥濘吾人を疲労に駆ること愈切なり。乃三条を指して帰路に就きぬ。此夜一座相語り相談じ十一時頃始めて眠に就けり。今宵限りの蓐中各自の夢みし所如何ありしか。

七日の上

春木　武豊

十二日晴。一行が洛陽の客となりしより早四日を過ぎぬ。その間朝には東山西峰に名社古刹を尋ね、夕には疲れたる足を引摺りて一筋に旅舎へと帰り、所謂京に入りて京を見ずとも云ふべき一行が希望は、今一日を費して見残したる部分を見、且つは三府の一なる京都の市街観察をも試みむにありと雖も、事情の止むを得ざるものあるを奈何せむ、遺憾を呑んで出発す。時に午前八時なり。尾崎教授と友枝氏は病気の為めに一行と別れ疏水によりて大津に向はる。加茂川に沿ひ二条通に出で岡崎町を過ぐ。路傍見真大師草庵の旧蹟大谷派本願寺別院などあり、かくて黒谷金戒光明寺に達す。山門楼上浄土真宗最初門の七字は後小松天皇の宸額なりとぞ。応仁中山門災火に罹りて烏有に帰し纔に勅額のみを存せしが、文政年中幕府の命に依りて再建の資を募り万延元年落成せしめたりとかや。巾四十尺奥行二十二尺なり。円光大師霊場門内にあり。当寺の縁起につきては平安通志に曰く、承安五年三月宗祖源空比叡山西塔黒谷の幽棲を出て京師に入りて本宗を弘通せむと欲し真如堂に至る。此地を経過し紫雲光明を発するを見、その霊異に感じ遂に此地を以て本宗最初の道場とし、其祥瑞に依りて光明寺と号す。世人称して新黒谷又白河禅房とも云ふ。後光厳帝金戒の二字を寺号に冠せしめ給ふ云々。当山第一の什宝は有名なる一枚起請とて円光大師鴨大神の神勅によりて浄土安心の要文を書きたるもの存すと云ふ。本堂の前に鎧掛の松あり。伝へ云ふ、熊谷直実仏に帰依する時着せし鎧を池水にて洗ひ此松に掛置し所なりと。樋口氏之を写真せらる。極楽橋を渡りて熊谷堂、勢至堂、かるかや（刈萱）父子地蔵尊などを見て墳墓の間を上ること約一町にして文殊塔あり。此塔は丹後切戸、和州安陪のと合せて日本三文殊と称せらる。左に山崎嘉右衛門の墓あり。一揖して下り更に北に向ふ。やがて後一条院天皇菩提樹院陵を拝す。章子内親王御墓その傍にあり。御陵の境域百四十八間五分、数多の姫子松生ひ茂り瑞垣の山茶樹と翠を競ふ。道は白川村に入る。行く行く大原女なるものに遇う。大原女は八瀬女とも云ひて、古来風習異様なり。髪は束ねて後に垂れ、白色の手拭を被り、紺地の衣服を脛高く褰け、白地の脚絆手甲を穿ちて、毎日薪炭の類を頭上に戴き京都に出て之を売るを業とす。将軍地蔵尊右手にありと聞けど見ず。元は東の方瓜生山にありたるよしなり。而して其地は永禄年中足利義輝、細川晴元の籠りし城趾なりとぞ。前面に松が崎山てふ美しき山を眺めつゝ、やゝ行けば一条寺村なり。北山御坊親鸞上人旧跡あり、西本願寺所属なり。聖水山舞楽寺と号す。刺を通して寺僧に聴く所あり。曰く、当寺は宗祖見真大師叡岳にありし時一宗開発の志願頻にして、此所に来り百日別行し霊水にて垢離し洛陽六角堂救世観音に歩を運びしと。又或夜夢中に聖徳大師影向ありて生極楽の要文を授け給ふ、之より他力本願の一流を弘め末世の衆生を化益しぬと。彼は影向石御聖水はそれと指示す。又畏くも昨年五月二十九日東宮殿下修学院離宮に行啓の砌、駕を寄せさせ給ひきと云ふ。その紀念として樹木を植えたり。此寺を出て一歩南して金福寺てふ禅寺を見る。芭蕉庵として芭蕉の居し趾あり。庵の紅葉十二分の見栄あり。画も及ばず。行くこと二町にして詩仙堂に達す。一老尼ありて案内甚だ慇懃なり。表門に小有洞、中門に梅関、

神宮皇學館本科「平安ふみわけ衣」（明治三十四年）・「四年生修学旅行日記」（明治三十八年）（館史）

楼上に嘯月、楼下に蜂腰、書院に座楽巣及び邁袖半山床等の額面あり、皆隷書にて丈山の自筆なりと云ふ。一度門を入れば既に塵俗を脱したるの観あり。丈山嘗て本朝の三十六歌仙に倣ひ、漢晋より唐宋に至る善詩の者三十六人を選び、狩野尚信をしてその画像を描かしめ、自ら其詩を書し以て四壁に掲げたり。これ此堂に詩仙堂の名ある所以なり。楼の二層には六勿の銘あり。三層に上れば十二景を見るを得べし。老尼彼は某の山、此は某の水、それ遙に難波の城楼も見え侍るなど一々指示す。丈山の遺物として記すべきは残月硯、木崛崙、大竜（竹如意）、天造几、獅子榻、及明の陳眉公の古琴等なりとす。下層の床間には丈山が竹如意を右手に持ち几に倚れる座像を描ける軸を、その左には霊元天皇の鳳の字をものし給ひたる一軸を掛く。又その右には丈山が七条の訓誡をしるせる軸を掛く。老尼茶菓を運び来る。菓子に「渡らじなせみの小川の浅くとも老の波そふかげぞはづかし」の歌を書きたり。聞く大阪の役平ぐや丈山遂に仕を致して京都に隠れ、藤原粛、林信勝、菅玄同等と交り、文籍を以て自ら娯む。後水尾天皇屢々之を徴し給ひしも至らず。辞するに此せみの小川の歌を以てし終身復鴨川を渡らじと誓ひ奉る。天皇益々その操を高しとし復徴し給はざりきと。墓は東南の山中にありと云ふ。老尼に厚く謝して堂を去り、北すること七、八町にして曼珠院に至る。堂宇しかく大ならずと雖も門跡寺たるの故を以てその名著し。平安通志を按ずるに、曼珠院は延暦年間僧最澄の開基にしてもと比叡山に在り。本尊は阿弥陀如来、慈覚、安恵等八世相伝へて是算に至り、天慶年間西塔此渓に遷り東尾坊と号す。天仁年間忠尋、寺号を曼珠院と改む。村上天皇帰依深く、天暦年間北野神社草創の砌、殊に勅して別当に任ず云々。文明年中伏見貞常親王の王子慈運僧正資住院已来歴朝皇子法灯を継ぎ長く親王の法室となれり。明暦二年良尚親王奏請して更に堂宇を四明の西麓に構営す。即ち今の地なり云々。寺僧に案内を乞ひて法親王の墓を拝す。院の東北三町許にありて左の御方々也。

二十七世金蓮院宮。覚恕法親王（後奈良院天皇第三皇子）。

二十九世天松院宮。後水尾院。御猶子陽光院贈太上天皇皇子。竜花院宮。良恕法親王。

三十世円妙院宮。良応法親王（後西院天皇第十皇子）。

此他の法親王御墓は別処に在るべし。曼珠院の北五町に林丘寺あり。嵯峨天竜寺の所轄にして臨済宗なり。亦門跡寺なり。寺僧に聴くに第一代内親王普明院宮及第二普光院宮松嶺尊尼の御墓は葉山観音にありと云ふ。されど前途のいそがるゝ故に往て拝するを得ず。平安通志に由れば当寺は旧と後水尾天皇承応年間造営ありし修学院三離宮の一にして、中の離宮楽只軒是なり。帝の第十一皇女緋宮光子内親王遁世の志在しゝかば此宮を賜ひ、天和二年本寺を建立しその年三月入仏供養を行はる。後内親王落飾し給ひ法名を元瑶尼と称す。これを開山となす。以来歴代皇女を以て法灯を継ぐ。後水尾、霊元、光格三帝及今上天皇の行幸あり。皇太后も亦行啓ありし所なり。明治四年楽只軒を始め殿堂の半を宮内省に奉還し再び離宮となし一半を以て林丘寺号を存すと云ふ。楽只軒に上の離宮、下の離宮を合せて修学院の三離宮と称す。明治六年以来暫く衆庶の拝観を許されたれど頓てまた離宮に充てられ拝観を禁止せられたり。されば如何なる所なるかは吾人布衣の身を以てして知り能はざるところなれども、遙に拝し奉るに老松桜楓相交りて景致極めて幽邃なり。赤山の社などを北に見つゝ叡岳を登らむとす。時針正に午を指す。因に記す、余は曼珠院と林丘寺とを見たる為め一行に後るゝこと殆ど時余。いざ一息にと急ぎに急ぎて上る。道もせに散る紅葉に谷の清水の染まりたるはなか〳〵見捨て難けれど一行の待詫びゐらむを思へば心も心ならず玉なす汗を手巾に拭ひとめつゝ上り行く。

その中

一行は今や修学院の離宮を後に見つ。羊腸たる雲母坂を攀ぢ比叡山延暦寺に向ひて幾重の雲を踏破せむ時乃至れり。抑も比叡山は本朝五岳の一にして、其方位

大林　完

王城の鬼門に当れるに因り、桓武天皇奠都の始め延暦七年僧最澄に勅し、王城の鎮護として伽藍を此山に造営せしめられたる、是れ延暦寺草創の故由なりとす。神社考を按ずるに伊弉伊冊立于天浮橋以天瓊矛探滄海其矛鋒滴潮凝為一島名曰磯馭慮島是日枝山也と見えたり。固より俄かに信を措き難しと雖、山の根原を説くもの、一は是れ、其称呼に就ては古来口にする所甚多し。或は伝ふ、景行天皇の四年二月朔天皇箕野に幸せられし時、淡海を経たるに一株の枯木ありて梢高く雲を穿てり。国老を召して之れを問ふに、国老此樹は是れ神代の栗樹にして、其栄えたる時は高枝山頂に並びたりきと奏す。是れを以て此山を並枝の山と名づけたりと云ひ、其樹のありきと云ふは今の栗本郡なりと云ふ。諸社根元記には、平安の帝都は天上の名跡をあらはせる国なり。艮にあたりて日得といふ山あり。日の神の御光をねがへども其の光を得ざる所を、諸神これを祈りて日を得べきといふ心にて日得の山と名づくともあり、又日吉山とも書し、或は又並連山とも書したり。而して比叡山と書するに至りしは実に根本中堂を建立せし頃よりのことにして、伝へ言ふ、桓武天皇最澄を叡慮を等うして根本中堂を建立せしに出づと。彼の僧慈円が「おほけなく浮世の民に思ふ哉我立杣にすみ染の袖」と詠じたりし我立杣も亦此山の異名にして、是れ最澄が根本中堂の薬師仏を作りし時「阿耨多羅三貌三菩提の仏達我立杣に冥加あらせ給へ」と詠じたるに始まる。又拾遺集に載せたる歌に「我恋のあらはに見ゆる物ならば都の富士と云はれなましを」と詠じたる都の富士も亦此の山のことにして、愛宕山の一の鳥居より見れば駿河の富士に等しと云ふによりて此名あるなり。又其王城の鬼門に当れるを以て艮峰とも艮岳とも号せり。尚他に異名あり、天台山と云ひ鷲峯と云ひ、台嶺、叡嶽、北嶽、大日枝に日枝など云ふ。其草創の当時は一乗止観院と名けたりしが、後三十六年を経て嵯峨天皇の弘仁十四年勅して号を延暦寺と賜ひき。一山を別ちて東塔止観院、西塔宝幢院、横河楞厳院（首楞カ）の三つとし、東塔止観院には南谷、東谷、北谷、西谷、無動寺谷の五谷あり、西塔宝幢院にも北谷、東谷、南谷、北尾谷、南尾谷の五谷あり、横河楞厳院（首楞カ）には兜卒谷、樺芳谷、般若谷、戒心谷、解脱谷、飯室谷の六谷ありと云ふ。又別に無動寺を置けり。此山たるや、山城近江の二国に跨がれる大嶽にして、巍然として雲表に聳え、其最高峯四明嶽の如きは海面を抽出づること二千七百余尺に及び、満山寂として実に塵外の仙境たり。登山の路は四にして、雲母坂の外に禅師坂、大坂、及び松尾坂あり。京都より至るには雲母坂を以て最も便道とし、坂を攀ち無動寺に至り、北して東塔に入り、西塔を経て横河に入るを順路とせり。而して夫の白河法皇の一嘆声、元弘の乱初に於ける車駕奉迎の件はた元亀中に起れる満山焼亡の史蹟は、問はずして此山の史的趣味に富めるを語るもの、今かゝる山に登観を試みんと欲し、之れを仰ぎ望みたる一行の勇気は自から日頃の十倍をやはかりつらん。程を聞けば四十六町なりと云ふ。嶮難は知る知らず快哉一番漸く山間の径路に入りぬ。離宮を去ること両三町にして径路別れて二条となれり。一は旧道に属し一は新道なり。初め詩仙堂を辞せしより一行は自ら前後の二隊に別れつ。此処に至りて前隊は旧道を取り、後隊は新道を取る。旧道は路甚だ狭隘にして一歩は一歩より急に、行くもの気息喘々焉たり。新旧両道の合する処、後隊已に至れども、前隊未だ至らず。待るゝこと二十幾分にして、漸く相会し、相見て哄然一笑、歩行の苦を談じつゝ、此処に弁備を為しぬ。志せる処までは尚三十町余もありぬべし。悠々として時を費すべきにあらず、然れど春木君の探究に暇どりて未だ至らざるあり。吾等登山の途を急がむか君岐路に迷ふことなきを保し難し。因て一策を案じ、紙片を樹枝に張り、路の中央に立て、方向を示し置き、再び杖を曳きて上る。既にして右の方飛瀑あるを見出でつ。高さ二間もありぬべし。是れ音羽の滝と名づけ、壬生忠岑、石川丈山などの詩歌を残せるもの、一瞥を与へたるまゝ、右に折れ又左に転じなどしつゝ、所々春木君の為めに標を残し、勇を鼓して上る。上るに随ひ眼界は漸く広くなりつ。今は数十里の外も見渡されぬべし。山の八合目ばかりに達せし頃、小高きあたり、茅を敷きて憩ふ。眸視を放てば、山城近江の界をなせる山々は、南方遙かに波に似

て直ちに脚下に迫り、愛宕高尾の連峯は、蜿蜒として西天に競ひ聳へ、恰も旧皇城を擁護せるものゝ如く、山麓を流るゝ高野川帯に似て、賀茂川に落ち合ひたる彼方には更に洋々たる木津川の東南より来りて合し、巨掠沼大井川など歴々として指さるゝに難波の市街淡路の翠黛亦雲煙糢糊の間に望まれたり。憩ふこと須臾にして又上る。四明嶽を繞りしは殆んど午後も二時に近き頃なりき。彼の平将門が皇城の壮麗なるを望みて逆意を生じ、又蒲生君平が帝宅の微々たるを瞰て憤慨しきと云ふは実に此山巓なり。天日輝々として曇れりとも見えぬに、何処より来るにか露滴の顔面にかゝるを覚えき。行手急がるゝまゝ無動寺の方には至らずして直ちに東塔に向ひて辿る。従是南山門領と刻したる標を見て尚行けば、両側杉の木立栄えて路は漸く下りざまになりつ。やがて千手水を見る。是れ熊野権現の使者水天童子の穿ち出せる水なりと伝へ、延喜十年九月寛平法皇灌頂の時此水を用ゐ、又平清盛熱病の時此水を石船に湛えて沐すと云へり。又武蔵坊弁慶一千日千手堂に参籠し、此水を以て毎日閼伽となしぬと伝ふるを以て俗に弁慶水とも呼べり。側に千手堂あり、弁慶の故を以て俗に弁慶寺と云ふ。本尊は千手観音なりとぞ。弁慶餅と云ふを鬻ぐ小舎も見つ。是より根本中堂の方を覓め、右の方さゝやかなる坂を上り、一寺院あるを見捨てゝ法華塔を見る。三間四方ばかり、享和二年壬戌八月権僧正堯鎮謹建と刻せり。進んで戒壇堂及び大講堂を見て、根本中堂に入る。戒壇堂は淳和天皇の天長五年の頃、義真和尚勅命を奉じて建立したる所、釈迦、文殊、弥勒を安置せりと云ふ。慈覚大師入唐の時、五台山の土を荷担してかへり、戒壇の下に埋む。六十余州の僧徒大乗の戒を受けんと欲する者は、皆是れに登るなりとか。大講堂は嵯峨上皇の御願により、淳和天皇の天長元年甲辰九月、同じく義真和尚の建立に懸り、大日如来、梵天、帝釈、文殊を安置し、大会執行の時勅使参向の堂なりと云ふ。根本中堂は当山草創の際に建立したりし所謂一乗止観院にして、最澄の作なる薬師仏を安置し、当初薬師堂、文殊堂、経蔵とて三宇各別に建立せられ、薬師堂其中間にありしを以て、根本中堂と云ひ初めたりと云ふ。門内に筠篠、鎮壇塚、篆篠等あるを見、去りて寛蔵を一瞥し、山門を過ぎ、僧徒の道場を驚かして憩ふこと少時、春木君の来るを待ちつけ、琵琶湖上の風光に眸視を擅にしつゝ、日枝神社に向ひて山を下る。

その夕

平部　直

羊腸突兀、傍には岩泉咽びて雲霧を起し、頭上には老樹枝を繁らして影ほのくらし。かゝる山路を下ること二十余町、日吉神社に達す。老檜古杉鬱々たる間に殿舎楼門各所に散在し、谿流綏々灑々吾人をして覚えず神聖の感に打たれしめたり。祀る所大小廿一社、本宮を大宮といひ次を二宮といひ、聖真子社、客人社、八王子社等之に次ぐ。古来朝廷の尊崇甚だ厚く、加茂男山に次ぎて歴代の行幸も屡々見え、今官幣大社に列せらる。祭神につきては旧説紛々として何れが信なりとも定めがたけれど、兎に角大山咋神が神代よりして比叡山にますこと、古事記によりて明かなり。延暦寺及当社の事を記せるものに同く、此神は元比叡山の横川にましゝを、伝教大師延暦寺を建つるに及び山麓に遷し奉りきと。又当社旧記に曰く、天智天皇の御宇日吉社司の祖宇志麿に勅して大和国大神の神の御分霊を迎へしめ、比叡山麓に勧請し、以て王室の鎮護をなさしめ給ひきと。されば大山咋、大物主二神の此社にますことは明かなれど、その何れが本宮にますかは容易に定め難し。只暫く此社縁起に従ひて本宮を大山咋神となし二宮を大神の神となし置かんか。聖真子、客人、八王子等何れに関しても異説多くて定むること能はず。殊に是等社号のかく普通と異なれるは人をして愈迷を増さしむるものなり。蓋かく祭神の乱れしは仏者神典に暗くして神を仏ざまにさかしらに説きなしたるによるなり。まこと大山咋神は神代より比叡山にまして此地方鎮守の神におはしますを、伝教何者ぞ、只おのが道を広めんと由緒深き神境をそれとも憚らず、人心を勧誘せん為に寺の守護神と迄下し奉りしこそいと畏きことなれ。宝物は多からんと思ひて社務所にて種々尋ねけるに、当社は織田信長延暦寺を焼打せし時に

当社も其害を被り什器文書悉烏有に帰しぬ。今存するは皆近代のものと答へて神輿の額三面を出して示しつ。皆金銀の彫刻ある鑑査状のつきたるものなり。其日吉白山宮と題せるもの、裏には、文政十一年子中島延由彫之云々とあり。又日吉二宮と題せるものには、天和三癸亥年正月十五日安政六己未年四月十五日奉修補禁裏御飯方射阿弥久豊森田五兵衛大岡鉄平作之とあり、何れも写真に取りたり。此社に於て古来有名なるは神輿振なり。延暦寺の僧徒若し訴ふる事ある時は輙ち本社の神輿を奉し兵甲を帯し直に宮闕を叩きて之を強請する是なり。神輿振の史に見えしは堀河天皇の朝を以て始とす。此時宮闕護衛の兵士にして、若し誤て神輿を犯せるものあらば朝廷忽ち之を黜罰して枉て僧徒の請を納る。故に山門の訴訟は非を以て理となし恬として之を怪まず、以て僧徒の跋扈を馴致し、久しく鉅害を朝野に遺しゝが、元亀年中織田信長が比叡山を焼燬するに及び、弊始めて熄むことを得たり。祭礼は四月十二、十三、十四の三日にして、七社の神輿は走りて八ッ柳の湖畔に至り、乗船して唐崎の御旅所に渡御ありて粟飯を供す。世に之を山王祭と称へ、賽人遠近より群集し、雑踏名状す可らずといふ。此祭典は深き故ある事なれども今略す。社を辞する時宛も黄昏、上下阪本を経て二十余町にして唐崎に至る。近江八景の一にして湖中に台を築き出し、其上に一株の老松あり。枝葉八方に繁茂し翠蓋地を蔽ふこと殆んど百坪、宛も八頭竜の臥するが如く、数百基の支柱を以て枝を支ふ。実に希世の名木なり。夜の雨景最も佳なりといふ。古歌多し。松下一祠あり、唐崎神社といふ。宇志麻呂の妻女別当を祭れりとか。日吉社の末社なり。夜の更け行くに期せし大津までは一里余もありと聞けば、舟をかり水路にて渡る。唐崎を出でしとき曇りし空は暫にして白雨をおとせり。此時已に沖中にあり。あはれ今少し早くふりたらましかばと皆唐崎の夜雨を見ぬをうらみぬ。やがて雨はれれば明星暉々巨水漫々として比叡比良の高峰かすかに尾を曳きて雲に境し皆風景の面白さに詩を作り歌を詠じ等して、九時頃大津に着す。旅館は湖畔の中村屋なり。疏水にて廻り来し先着隊の話をきくに、京にて畜生塚を瑞泉寺に訪ひ、校用一件館友会用一件を市中にはたして後舟中逍遥の客となりたりといふ。

最終の日

樋口　長次

秋眠方に濃かなる時倏焉耳底に響く三井の暁鐘には余等客夢の驚破せられたるを惜まぬはなくも、亦楼上の眺望其時を失はざりしを喜ばぬものなし。八時前に中村楼を出で立つ。蝉丸の知るも知らぬも逢坂の関と詠じたりし、其逢坂も程近しとは聞きたれど、逢ひての今別るゝは寂寥の感を深からしむもと言へば強ゐて尋ねず。思へば九日に亘る長途旅行も夜辺相津の一宿を経ては今全く跡なくなりにたるに等しきを、誰かは捨て難き思の荷を重しとし、誰かは心深く哀れを覚えざるべき。踏む脚音も力なきばかりに町中の国道を西北の方へ通り過ごし、後の冥福は願はねど捨て難ければ先づ西国札所の一なる三井寺へと向ひぬ。幾階の石磴を拾ひ上るに一堂あり。こは既に三井の境内に入れるなりと云ふ。堂前より顧眄したる景言はん方なし。真に是れ天然の大画幅眼前に横はれるもの、藍靛を舗きたるが如き琵琶の湖面には白帆風に順ひて白鷗の浮泳を傚へるを望み、遠山雲外に眠臥するかと見れば近巒左右に重なりて翠緑を滴らし清爽の気をして亦余等の有ならしむ。一行挙て嘆賞するもの数次、而して任務に従ふの勇気始めて生じぬ。

今余等の立つ背後の堂、即三井の観音なる著名の札所なり。而して之を視るに其建築は左迄旧しとにあらず、聞く其創草は後三条天皇の勅願にて延久四年の昔しにありと。堂前に茶店あり、名物弁慶餅を売る。其処より左折して小阜に登れば西南の役の紀念碑あり。明治十一年十月疏水運河開通の節には聖駕を此に駐められたり。爾後称して御幸山と云ふとぞ。やがて石階を下り進んで奥に入り弁慶の曳けりてふ有名の破鐘を見たり。鐘楼中一人の案内居りしが其音声滔々として水の流るゝ如く宛然生きたる蓄音機なりしぞおかしかりし。鐘楼を下りれば井泉

あり。天智、天武、持統の三帝降誕の際この泉水を産湯に供せりとか。依て御井と云ひしもの、やがて三井となりて寺号となれりといふ。井上屋根あり、四壁の上部に飛竜の画あり、狩野元信の筆なりと云ふ。又弁慶の汁鍋と称する大古鍋あれど其名は取るに足らず其実に至ては二百人の汁鍋に供する事を得べし。往時戦場に用ひしものなるべし。抑々三井寺は長等山園城寺と号し、天台宗に属し天安三年僧円珍勅を奉じて建立せる所、往昔八百五十九坊を有して其権威の盛なる能く延暦寺と対抗して兵仗を動かし、以て殺戮を縦にせしは何人も知る処なるべし。従て清浄の仏域も修羅の場となる幾回なるを知らず、輪奐の美遂に旧の如くなるを得ざるに至れり。本堂、唐院、大講堂、金堂、青竜院、熊野社、勧学院、法輪院、教侍和尚の廟等其他、中院十二坊、北院十二坊、南坊十二坊の堂舎あり。境内甚広く、古杉老松至る所に繁茂せるは最も驚かるゝ所なり。かくて三井寺の巡視も済みしかば再び大津市をたどりて石山方面に向ふ。

進むこと一里程にして馬場村に至る。此地に義仲寺あり、寺内に義仲の墓あり、一行入りてこれを見るに、墓に徳音院義山大居士とあり、蓋しこれ義仲の諡号なり。其石碑は宝篋院塔にして高さ六尺に過ぎず、江源武鑑に曰く、天文二十二年六月十四日屋形六角義実石山寺に詣で、粟津原にて木曽義仲の旧墓を尋ね、一寺を建立し屋形自ら義仲寺と号し石山の末寺とすと。又一説には馬場の一僧のなす所といへり。義仲の墓に並びて俳祖松尾芭蕉の墳あり。聞く芭蕉の大阪に死するや門人其角等其遺嘱によりて此に葬ると。石面に「木曽殿と背中合せの寒さかな」といへる句を刻す。是同時の建立なりといふ。其他「旅にやむで夢に枯野をかけめぐる」等の句を刻せる碑あり。又傍に祠堂ありて芭蕉の像を安ず。

已にして義仲寺を去り南して膳所を過ぐ。本多氏の旧城下なり。維新前は東海道五十三次の一駅として殷盛の市街たり、且旧城の結構宏壮にして湖浜の一景たるを以て有名なりしかど、明治三年城は毀撤せられ此地亦旧観を失へり。本道に従ひて行くにやがて粟津原に至りぬ。所謂近江八景の一晴嵐の名ある者なり。路傍松樹並立し颯々の音聞くに従て転たゝ征衣を寒からしむるを覚えぬ。東鑑に終於近江国粟津辺令相模国住人石田次郎誅戮義仲兼平とあるは即ち此処なり。こゝより西方二町余、字別保の田野に今井兼平の墓あり、石浮屠の高さ四尺許。表に今井四郎兼平と記し繞らすに石の玉垣を以てせり。懐古の情を荷ひつゝ去りてちかひも重き石山寺に向ふ。

残りの四時間

佐谷孫二郎

十二時近く一行のすべてが石山寺に辿りついた。日は今地上に横はつた僕の影を最短くしてゐる。四時までに草津停車場へ、それから汽車で帰田といふ昨夜のとり定め、残る四時間がこの旅行の命で、この寺が僕の当番と眼を大くして八方へ配る。先づ頼朝建立の残物の一と云ふ山門に立ち止つてさて目についたのが正面の額、金文字入、石山寺の三字と両脇で睨んでゐる一丈二尺の二王。金文字入は藤原行能の書で二王は運慶堪(湛)慶の作とか、而も後者は鑑査状附。北側にまはると破風口に桐の紋章が彫まれてある。疑ひながら門を入つて坊舎幾棟を左右にズツト行き当る。それが尽きた処に彼の丈山が奇山怪岩皆鬼幽と云ふた胎内くゞりとか猗子石とか臥してゐる様に躍ッてゐる様に雲を突いてゐる其の黒んだ上に青い苔が深う閉してゐる処何とも云へぬ雅致がある。一体この境内には寺僧の所謂霊岩宝石が多いので、石山と名つけたもそれに基くとか。左手を石磴幾十階登り切つた処が本堂である。薄暗い板敷、それを入ると礼拝堂、子を懐にした女が堂前に額づいてゐる絵馬やら何々流師範何某、門弟くれがしなどゝ書いた木刀二、三本の額やら許りで一向面白い掘出しものがない。仰向いた顔を正面にかへさうとする拍子「当寺諸伽藍者江州北郡浅井備前守息女亜相秀頼卿御母堂為二世安楽御再興也」といふ板書に視線が行き当つた。これで山門破風口紋章の疑が解けた。本尊はと奥まつた一層暗い処を覗き込んでゐると側に略縁記の番をしてゐた白い着物に青い袴を穿いた坊さんが、正面金銅六寸の本尊は二臂如意輪観音で、聖徳

太子以来世々の帝の御守本尊であつたのを、聖武天皇の折本山開基良弁僧正が霊仏の威厳を恐れて丈六の巨像の腹中に納めてこゝに安置したもの。脇士左は金剛蔵王、運慶堪慶（湛）の作、右は執金剛神、興正菩薩の作、共に立像八尺、鑑査状附と の説明。其の報酬にという訳でもないが赤や青で塗り立てた当寺の絵図を買ふてやつた。其の上に書いてある略縁記に曰く「江州石山寺は聖武天皇の勅願により良弁僧正の開基にして天平勝宝元年の創立なり……初は華厳宗なりしが弘法大師以来真言宗となる……建久元年鎌倉の臣掃部頭親能西上して当山に祈願し山城羽束の凶徒を討ち平げ境内に勝南院を建て毘沙門天の像を安置す。親能の妻は亀谷禅尼と云ひ右大将頼朝公の乳母にして当山に来り住し観音を祈念す。故に頼朝公諸堂伽藍を修補し大に旧観を改む……豊臣秀頼公の母淀君の局諸堂伽藍を修築す。今の本堂これなり……」斯うである。彼方から木積君等が連に呼んでゐる。弁当を開いてゐるのであらう。何はともあれ紫式部源氏の間といふのを見てからと先きの青袴に導かれて上る。この間は本堂内六畳の光線通過の悪い一室で、紫式部がこゝに参籠して源氏物語を作つたと云ふ処。上は河海抄等の説であるが源語評釈などの云ふ通り矢張源語を尊くしようといふのと仏者の我田引水からとの附会説で今更弁ずる必要もない。正面に余り古くも見えない紫式部画像の軸が掛つてゐる、式部机の前で筆を片手にしてゐる画で筆者は土佐光起。「有門、空門、亦有、亦空門、非有、非空門」と新古今第八の「あとはきゑせんかたみなれども」及続古今第十五の「おもひみれども思ひしられず」との讃は北院御室宮との事併し暗くて落款等も能く判からなかつた。その下に並べてあるのが硯石と大般若経。硯は紫式部が源氏をかいた時に用ゐたものであるさうな。信疑は兎も角余程面白いものである。横殆一尺許り、縁は唐草模様で面に海が二つ。右の海には牛、左の海には鯉が刻んである。海の二つあるは日月、陰陽、昼夜の象をあらはし牛と鯉は墨色の濃淡（鯉と濃、牛と淡とは各和訓が近いから）を、弁ずる為だと例の青袴が云ふた。石材は石山石と云ふて紫色瑪瑙だ、とか。大般若経は式部の自筆、河海抄の「罪障懺悔の為に般若一部六百巻を自ら書きて奉納しける今に彼の寺に在り」といふはこれの事であらう。如何にも古い艶な女文字である。がまた怪まれぬでもない。猶他に狩野安信と土佐光起の新縁記五巻、光明皇后の涅般経、尊鎮親王の勧進状等並べてあつたが惜しい事には兆殿司の涅槃像及新縁記六、七両巻の国宝が見られなかつた。本堂の前――掃部頭親能が建てたといふ勝南院も元三昧堂と云ふた御影堂も鎮護の三十八社も見ないで経蔵目あてに駈け上るとこゝには既に一行が来て経蔵の写真を取つて居つた。経蔵とは孝謙天皇震（宸）筆鑑査状附の一切経が納めてあるからの名で、其の前に紫式部の塔がある。これも源氏の間があるから誰かゞ仮に設けたのであらう、実際のは京都雲林院白毫院の南、小野篁の墓の西だと河海抄にある。特別保護建造物二重の宝塔は経蔵の上で頼朝の建立、四隅の柱に三十七尊の彩画があるが今は面容もさだかにわからぬ。伊東博士は精密に出来てゐる事本邦有数であると云ふたさうだ。其の後の二基は頼朝と亀谷禅尼とので頼朝のは再建したと云ふ因で建てたらしい。月見亭で一人弁当をしたゝめた。保元年中後白河天皇行幸の際小宇を建てゝ御休所に当てたが貞享四年この台に方丈の小亭を移して眺望の処としたのが即ちこれで、北に起伏してゐる長等、比叡、比良、鏡のやうな湖、鷗のやうに浮ぶ白帆、鏡に柄を附けた様に目の下を南する瀬田川、太陽は今波を銀の鱗のやうに、その美しい波に唐橋の虹影が浮んでゐる。秋風蕭颯一天涯霜満、四山不帯霜、古木向岸寒月影、吟残葉々霧中花。秋の月、なる程これに秋の月があつたならば。握飯一口してはうッとり、種子許りの様な梅干を一甜りしては眺めてゐた。が一行がもう行つたのに気付いたので早々飛出し竜宮から掲つたと云ふ無銘の梵鐘を一瞥したまゝ隠れ谷の義平の墓も見ず後逐つかけた。瀬田の橋まで引つかへしてやう〳〵泉川君と木積君に逐付いた。沙鳥風帆帯夕陽、夕陽人影与橋長、勢田瀑網東山月、一色江天両景光。夕映はまだ〳〵早いが右には石山。半色づいた梢の中から本堂の屋根が見えてゐる。左には粟津が原、松に烏が二、三羽鳴いてゐる。小橋二十三間、大橋九十六

間の断橋上、古色を帯びた高欄宝珠に倚りかゝつてゐる三個の人影、それは僕等で、その下を流れるのが古来幾十度血に染められた勢田川、僕等自身が既に詩中の人である。一体此の橋の名に就いては三個の説がある。昔忍性律師此の橋を造るに其の製唐の法に倣ふたからだと云ふのと、何日も辛労して造るから辛橋だと云ふのと、モウ一つは搦み橋の約言だと云ふので。併し第一説は字に泥んでこぢつけた跡があるし第二説は余り滑稽だし第三説が先づ妥当であらう。と云ふのは景行天皇の御代湖水に筏を組み瀬田に小船橋を架るとあつて、昔は竹筏を編み搦みつけたのであらうと思はれるからで。又青柳橋と云ひ轟き橋と云ひ長橋と云ふた事、昔の歌などに見えてゐる。彼の恵美押勝の乱の時先づ勢田の橋を焼くとあるから其の時既に橋があつたので、が昔の所在地は今のより少し下流だといふ。此の頃この辺の川底から往々珍重なる古銭が発見せられるとの事、何故水底からそんなものが?。根岸武香氏は「古来瀬より竜宮に通ずるといへる迷信上の伝説あるが故に従ひて竜神に手向けむとこれを投ぜしものにして、今日水底より発見せるものは其の遺物なるべし云々」と云ふてゐる。又此の下流一里弱の処、勢田川が東から来る大戸川を併す其の合流点の上手に供御の瀬といふて徒渉場があるさうだ。何うも見に行く暇がない。勢田城趾も秀郷の社も。橋本を通りぬけて建部神社に参る。仝じ勢田村の大字神領にある官幣中社で、社殿は余り大くもないが松や杉がこんもりと繁つてゐる極清蕭な境内。神祇正宗にも兼熙番神註にも祭神を天明玉命とあるがいけない。又一宮記、近江国輿地志略等は大己貴命（今権殿に祀る）だと云ふが、実は日本武尊なので。

景行天皇四十六年四月庚午日以、建部稲依別王命有神勅、於同郡神崎建部郷、創建宮殿、斎祭之、依発神崎之名、蓋以稲依別王命、日本武尊之御子也（神縁年録）

日本武尊薨、欲録功名、即定式部（景行紀）

日本武尊娶両道入姫皇女為妃、生稲依別王、是犬上君武部君、凡二族之始祖也（景行紀）

建部公、犬上朝臣同祖、日本武尊之後也（姓氏録）

これ等の所載と地名社名等と引き合して見ても日本武尊が主神である事がわかる。白鳳四年建部連安麻呂に詔して栗太郡勢田の東に、天平勝宝七年建部公伊賀麻呂に勅し大野山の麓に遷して近江の一宮とせられた。これが今の社地である。建久元年頼朝上洛の帰途参拝して瀬田郷三百戸を神領とした。永暦元年遠流せらるる際こゝに通夜した（平治物語）因みがあるからで。其の後承久の役、応仁の乱等屡兵燹に罹つたが文明十二年肥後守中原兼昌をして再建せしめられ明応七年九月二十一日勅して神事を再興した。例の道を急ぐので腰をかけたまゝ茶を受けてこゝを辞した。刈り入れで忙しさうにしてゐる大江、月輪、南笠の村々を面白う眺めて美しい湖水の景色を遙左に松原一里。そこに小い流があつて十善寺川橋といふのがかゝつてゐる、それを渡ると道の左側、田圃の中に二坪許りの池――寧水溜りがある。これが古来多くの歌に詠まれてゐる六玉川の一、野路の玉川だとは池畔の木標で知つた。「さを鹿のしがらむ萩に秋見えて月も色ある野路の玉川」（新拾遺）。萩は何処?、寂しさうに細い柳が一本立つてゐる許り。又一里草津に入る。大津から三里三十町、石部から三里、東海中仙両道の分岐点、人口は五、六千あるとの事。五十三次時代の繁昌が思ひやられる。この地の産土神、立木神社に詣づ。祭神は武甕槌神で神護景雲元年の創立、延暦五年正一位を授けられた古社である。先へ立つて僕一人常善寺を訪づれた。寺は村の中程を一寸北へ入つた処で天平七年良弁僧正の開基。足利、織田、豊臣、徳川と代々寺領を受けてゐた。関ヶ原役の時家康が来て庭前の松に三成を繋いだ事もあるとの話。昔は随分大きかつたそうだが今は見る影もない築土くづれの極小いもので、停車場に行つて見るとまだ発車前五十分。まづよしと姥が餅に飛び込んだ。伝へ云ふ佐々木義賢の子孫がこの地の代官をして居つたが数代の後の主人が一子と貞宗の銘刀とを乳母に托して死んだ。で乳母が其の子を養ふにも資産がない処から餅を売り初め

たのが抑もの濫觴であると。又いふ家康大坂攻めの途、この家で憩ふた処老嫗が餅を献じた。食ふて見ると中々旨いといふので部下の兵にも分けてやた。これから姥が餅と名がついて四方に聞えたと。何方が実やら又仝一系統の話やら、が後者によつて由来を述べた皆川淇園の養老亭記も蔵してゐる随分盛んな店で、餅は土器に盛られてある。食ッて終うて表を見ると

千代の春契るや尉と姥が餅　　芭蕉

列車の中での欠伸雑り……「今晩からまた寄宿舎生活……「完」

神宮皇學館本科「平安ふみわけ衣」（明治三十四年）・「四年生修学旅行日記」（明治三十八年）（館史）

四年生修学旅行日記（明治三十八年五月一日～十一日）

四年生修学旅行日記

○汽車の窓（五月一日）

茅　月

美し賑はしとは名ばかり。花のお江戸。そが面影偲ばむ由も無かりし恨は。幾度か己が心の裡に繰返されしぞ。そは蓋し吾のみにはあらざるべし。秘めに秘めにし心の願ひ。今歳といふこの月。許し得てし我は。優曇華の花まち得たる心地こそ。さばかりあくがれし東路の旅。とやかうと現心に画き出づる俤。また打消ちては。独ほほえむ愚さよ。

よべ一夜は短夜の長きをかこちぬ。鳥が鳴く明け時のいめ一たび擾れては。復結ぶべき術もあらず。枕もたぐれば潜然と降りしきる夜来の雨は。誰を怨みてか今日も晴れず。簷端をつとふ玉たれの音。寝耳に水注がるる思ひして。傍わらにうまいせる華岳の君揺り起し。顔打洗ふ。やがて誘ひ来る友達二人三人。余の友はいち早くも山田停車場へと向へり。朝餉もそこそこに。いざや立たむと促せば。この雨の最中疾く行かむ甲斐こそなけれ。いそがば濡れむ旅人もありと。徐ろに巻煙草くゆらし玉ふ某の君。さらば許せ一と寝入せむと。毛布ひきかむる某君。心いそぎ立つは我のみか。師の君は午後三時ならでは立たせ玉はぬとの事ゆゑ。さらば一所にと心定めしは。全く雨故にはあらざりけり。辛うじて待ちつけし正午。食事了へて折ふしかど通る馬車呼び止めて。停車場まで雨やどりす。やがて師の君も出でましぬ。おそきをかこちし蝸牛の歩みも。遂に三時を指しぬ。汽車動き初むる頃。東方の空薄ら薄らと晴れて。雨雲の蔀上げさせて。日頃馴染の朝熊姫。みどりの黒髪。清けき風になぶらせて。吾等が門出見送るもうれし。

よべ一夜はいもねられざりしまま。眠気むらむらと催せど。いぎたなしとて笑はれむもうければ。携へし詩集繙きつ。都の大地図打拡げて額つき合せ囁めける。よそ目にも旅行よと読まれつべし。

窓の外面に顔つき出せば。この頃の雨にて。染め出せる野路の若草色濃く。時を得顔の蓮生畑。麦畑。水田。車の走るまゝに。野辺の錦を織り出せり。向の青山頂に雨雲の晴れ行く絶間を。黄金色の日の光のさしそふなど。得も云れぬ眺なりけり。

亀山駅に着きしは六時。待つ間あらせず。西の方よりはせ来りし列車に飛のりぬ。目新しき眺め又一入にて車の走るを知らず。弁当さらげ終るころ夜の色。車窓を染めぬ。一転一転。長蛇鳥羽玉の暗を呑みて去る。汽笛一吼て驀然に荒山の胴腹を貫き。或は大川下界に狂ふ空をかけ。汽笛長く陰天地に響けば。こゝなむ金城の地。

この駅より乗らむとする人夥し。と待合室の前には群衆疾くよりつひ居て。後へ後へと連り。押合ひ揉合ふ人の浪高し。こゝにて先発の友に会しぬ。汽車は来れり。人におくれてうき恥かくなと。言合せし如く。吶喊の勢物すごく。人を押のけ我先にと飛び乗る騒。駅夫の制する声は闇に飛礫。吾等はならば一所にと。隙もやあると躊躇ふ暇に。人に制せられ。離れ離れに飛込めば。こは如何に、錐立つる許りの余地もあらず。半座譲らむと云ふ君子もあらばこそ。適々少しの隙見付けてもぐりこまむとすれば。牛にも似たる黒き醜女の。角ふり立つるも笑止や。万策今は尽きて。止むなく武蔵坊の立往生。血狂へる吾々いかでかゝる苦業に堪へむ。夜の更行くにつれ。腹は減る、足は疲る、眠気はさす。吁何たる応報ぞ。玉の台にも五塵の火宅とやら。煩はしがる人も有るに。今宵一夜をこのまゝ明かせとは。など独りごちし口も后には自づと塞がりぬ。眠る事能はねば車の中。くる〳〵と見廻せば。座せる人等は。妬くも皆心地よげに眠れり。向ふの隅に。電灯の光を半禿げたる頭に照らせて。ツツ立てる旅の翁。夜目にもしるき霜の髪。額の波に。杖をも持たで立てる嫗。その田舎染みたる音調ば。靖國の祠に

ますまな子の英霊慰めむとて。遙々都路へ旅立しけるにやあらむ。その隣に立てる赤十字の帽戴ける兵士と。切に何事をか語ふ様。見るからにいとほしきに。座譲らむ若人もあらず。旅の道づれは多けれど情はこゝには露程もあらざりけり。駅所々々車の止まるもうるさく。果は苦しき夢貪ぼるべく底板の上に腰を臼きぬ。下等室の名さへ憂きに。人の踏み歩く塵の上に席。そも何たる因果ぞ。野良犬にも劣らずや。汽車はちぎれ〳〵の我夢を撒いて東に運ぶ幾百哩。

静岡と呼ぶ声におどろきぬ。岩淵となん呼ぶ宿に着きし時。ほとりに座を占めける一群。下車せしかば。初めて腰掛（ベンチ）の席を得て狆ころ然と座りぬ。時は午前二時半。

心溶けていつとも無く有耶無耶の闇路を彷徨ふ。フト目醒むれば御殿場なりと云ふ。そのかみ牧狩もて名高き富士の裾野。建久三とせ。篠をつかねて降りしきる五月雨の夜。親の仇。討してふ曽我兄弟の事など偲ぶ。此時窓外浸く白し。不二の山はと窓あくれば。悲雨蕭々面をうち。怪雲漠々山をかくす。裾野千里は広しとも見えず。

大船……平沼……そは白河の夜舟！。

横浜に着くや狭間。赤井の二氏。親戚のがり訪はむとて下車す。九重の帝都車の歩み毎に近うなれば。窓うつ風せ趣あり気に覚ゆ。立ちつ居つする暇に。汽笛長く東海の天にひゞきて。転車徐々と其歩みを緩む。ここなん待ちに待ちし新橋の停車場なり。車を下れば籠の鳥の放たれし思ひ。若し吾等真の鳥なりせば。羽たきして高く高く天翔りせしなるべし。

○二日

なや

午前八時新橋停車場着。直ちに電車にて小石川へ向ひ古事類苑編纂所に到り。三浦先生の御斡旋によりて神田区三崎町一丁目梅田館に投ず。日猶高かりしも昨夜汽車中雑沓の為め。疲労せるを以て。予定の遊覧は翌日に延ばし。各人自由に散歩せり。其の夜阪本、友枝、壱岐、高木諸兄の来訪を辱うす。

○宮城めぐり（三日）

李雨生

神々しき神の御園に安眠を貪りし身は、長途の旅路に疲れ果て、よべは待ちに待ちし花の都、都のもなかに仮寝して、今日はこゝ森田館を本城と構へて予定の行動に着手するそもはつ日なり。抑も一天万乗の暖き君の恵に浴する同輩が此都にさすらふ。何条まづ九重雲深き宮城を拝しまつらざるべき。加ふるに宮城の辺我が館直轄の官衙さへあるものを。都めぐりの初日此行を企つ蓋し故あるなり。

午前八時宿を立ち出でゝ猿楽町を西へ西へと外国語学校を弓手にながめ、まづ高等商業学校に立寄る。宏壮なる建築頗る完備せるものゝ如し。時なほ早ければ授業の模様など参観することを得ず。此処を辞して猶も西すること約二丁、宮城の外壕に達す。二条神田橋なんど過ぎ行けば遙前方石造宏宇巍然雲際に聳ゆるを見る。これ即ち東洋第一の建築と称せらるゝ日本銀行なり。如聞外観已に此の如くなるに尚其内部に至りては一層の設備を施し地下数百尺を穿ちてその中に無数の金庫を蓄ふると云ふ。常盤橋を渡りて大手町に入れば内務省あり。初対面なれど、さすがになつかしき心地せられて倉惶去るに忍びず、さはれ曇りがちなる五月雨の空は今にも降り出でん様していと心もとなし。やがて大蔵省、竜の口憲兵司令部を見物して左に曲れば宮城の内壕なり。和田倉橋を渡りて和田倉御門をすぐればこゝ緑樹青草翠黛の眉を画き恰も青氈を布けるが如し。青葉がくれ、甲冑に身を固め肥馬に跨れる武士の像を見る。これ有名なる楠公の銅像なり、五月雨の空はれやらぬ今日此頃此銅像に対す。誰れか郭公血に鳴く桜井の里の昔、湊川に花と散りし英勇の面影を忍び潜然衣を湿ほさざるものあらむや。像は豪商住友吉左衛門が厚き皇恩に酬ひまつらむ微志として其所有鉱山別子の銅もて鋳造し献

じたるものとかや。嗚呼九重雲深きあたり忠臣楠氏の芳名は此銅像と共に幾千代かけて薫るらむ。銅像の右方に皇居の正門を見奉る。俗に之れを二重橋と云ふ。橋のかなた碧瓦燦爛金殿九天に聳ゆるを拝しまつる。これなんかけまくも畏きあたり千代田の皇居なり。暖き君の恵ば四海の中に洽ねくて文事は盛に武備は整ひ国威は万国に輝々として開明の隆前古比なき明治の御世、然るにまたもや波さはぐ東亜の空。国家多事の今日、日夜安んじ給はぬ大御心、そゞろ偲びまつれば万感交々いたりて、おのづから襟を正して伏し拝みぬ。やがて一行はいにし延元やよいの頃水戸の浪士が六花の中に紅染めし桜田御門を打すぎて、司法省、大審院、控訴院なんどの諸官衙を見物し霞ヶ岡に登れり。外務省、陸軍省、大路を爽むてこの丘上にあり且つ此丘の辺露西亜公使館の蔦蔓四壁に苞りて誰一人とり修むるものなき様を見ては亦愚を満洲の野に馳せざるを得ざりき。それより左すれば日比谷公園なり、躑躅今を盛りと咲きみだれ、濆沫摧くる白玉と相映し頗る美観を呈せり。次て府立第一中学校を参観す。同校教諭中西保人氏は中西教授の知己且つ余の旧師たり。一行を導ひて校内并びに一年生の国語教授を参観せしめらる。午後二時同校を辞して青山御所に向ふ。折しも雨は遂に降り出でぬ。されど雨具の用意なく途は尚遠し。電車に乗り雨中の青山御所、青山墓地練兵場を見物してそこ〳〵帰路につきぬ。

○靖國神社より上野博物館（四日）

玉　川

昨日より靖國神社の臨時大祭にて本日は東宮殿下の御参拝もありと聞きて、吾等は早朝より九段へつめかけたり。身を犠牲にし血を満韓にさらしたる勇士の遺族、貴き賤しき若きと老いたると、坂上はまるで人の山。煙火はあがり、殿下の馬車も著かれて人々は此の名誉ある祭典に満腔の心血をそゝぎてこれを迎へたり。かくてその周囲をさまよひ、游就館に入り戦利品を見たり。特に双鷲の連隊旗などはそゞろ日露の悲劇を目の前に思ひ出さしめ、今日の祭典と相応して吾等は奇異な感想にうたれたり。人山を押しのけて上野に向ふ。行厨を開いて未だのこれる桜花を賞し、かくて園内を散歩す。高丘の事とて市中の半景は眼中に映じ頗るよし。動物園、図書館を見終りしは正午なり。かくて博物館前に到れば松本博士は将に余等の為に案内の労を執られん為既に門前に待たれたり。博士の案内によりて場内くまなく見終りしは午後三時半頃ならん。場内にて最も名高きは永楽大王の碑文とミイラとなり。前者は古代史の好材料にして后者は埃及の盛時を窺ふに足る。その他の物何も皆吾人の参考とならぬもの無し。

余等は博士の恵深き好意に対し感謝す。かくて博士に分を告げ帰途に就く。こゝより歩を進めて浅草に向へり。観音堂前の賑ひは云はずもがな、花屋敷百花園珍世界何れに行くも遊人いと多し。行くもの帰るもの袂を連ね、悠々として世事を知らざるもの、如し。あゝ此の大都のうち、老若男女の遊駅として織るが如き処、誰かそのかみ狐狸の隠れし叢の跡なるを思はむや。げに世の中はあすか川の、うつりかはるに似たる哉。

○赤門くゞり（五日）

藤吾郎

今日の予定は帝国大学参観なり。昨日の疲にて宿を立ちしは午前八時。今は親しき水道橋を渡り例の砲兵工廠の煙に吹かれ、真砂弓町と過ぎゆけば、はや赤門の前に出でぬ。赤門！聞くこと久しかりき。見れば唯粗末なる赤塗の一門。而かも赫々として名あるはやがて此門に出でし一派の、社会に名声を博せる所以か。巍々たる瓦壁縦横に聳え、庭園遠く霞中に没す。其の規模の大なる、さすがに帝国唯一の学校とは知られたり。最初に這入りたるは文科大学。之れ吾人に直接関係の多きによりてなり。史料編纂室。古今無数の史料は、総て蒐集せられて此中にあり。三上博士我等の為に親しく周旋の労をとられ、辻文学博士懇に教示せら

る。拝観したるものは古文書の類にて、御歴代の御詠、或は寺社への御願文等の御親筆を始として、古来名将知識の筆の跡。皆写真版に撮影せられたり。其他珍しき画像など示さる。凡そ此の如き類、之れを四方に索め、厳密なる考証、周到なる訂正を経し後、厖大なる冊子となし、茲に大日本史料、大日本古文書として保存せらるゝもの之れなり。それより三上博士に案内せられ図書館に至る。館は三層の構に成り、東西万部の書、斉々として架上に列す。室内暗き処は電光を以て捜索に便す、絨毯を敷けば歩行に音なし。閲覧室之と並び、今しも学生は矻々として研鑽に従事しつゝあり。その静なること満場水を撒きしが如し。文科法科の学生は、終始此に学び、教場にては唯質疑に止まるのみとか。その設計の全きを知るべし。誠に羨望に堪へざるなり。次に工科大学に入る。建築の模型、採鉱の装置、凡百のマシン、一として備はらざるなし。曩に難に罹りて、造船の大模型を焼失せしは、誠に惜む可し。それより理科大学に至る。動物鉱物の標本、中には今の世にあらぬ珍しきものも多かり。医科大学解剖室に入る。一目見るより心地窃かにうらさびしくなりぬ。この肉躰も、斯く四肢胴頭所を異にし、縦横に切解せられたらむには、そも如何にやと思はる。生理室。文明の世には物質的の進歩もこゝに至るかと只管驚嘆の外なし。今は身心共に萎えぬ。時に午後三時。さすがに広き大学も、稍其大躰を見尽したれば、茲に分散して予定の行動を終る。余等それより浅草に赴けり。

○学校参観（六日）

憐盲唖生

晴、今日の予定は主として学校参観に属す。当年卒業生友枝氏の案内にて御茶の水橋を渡り、高等師範の附属中学校に達す、徒然草の講義はすこしいかゞと覚えし処なきにしもあらねど、歴史また漢文教師の熱誠なると、教授の確実なると、音調中和得妙なると、時間の利用巧なるとは確かに吾人を益する所少なしとせず。出でゝ女子高等師範学校に入り体操国語両科を参観し、踵を転じ綱吉の建築に係る大成殿を見、其当時漢学の如何に尊崇せられしかを思ふ。是国史眼に「綱吉、林信勝の忍が岡聖廟は其地狭く且つ梵字に隣るを以て、湯島台に改築し親ら大成殿の三字を書して之を掲げ官祀と為し、地名を改めて昌平坂と曰ふ、祭田千石を置き、毎歳春秋二仲に釈奠を修し、列藩に命じて金幣を進献せしむ、其傍に学舎を設け信勝の孫信篤等をして書を講ぜしむ」、とあるによりて其概要を知るべし。教育に趣味多き博物館、不完全ながらも掃除整頓にはぬけ目なき、中学寄宿舎などつばらに見尽して、出づれば吹き来る風に名高き紅塵万丈、あやめも分かず何時しか赤門前を過ぎ友枝氏の下宿にて昼餉を終へ、十二時盲唖学校に至る。土曜日なれば唯外観をのみ見るに止まるべし、あな憂や、と思ひの外午後も一部の授業ありとか。うれしや一教師に案内せられ、先づ点字板及点刷機械に就て詳細の説明を聞き、且つ実地に之を使用して観ぜられぬ吾人をして其功の偉大なるに驚嘆せしめき、次は発音に関する許多の明細図解に就ての説明、是又吾人を益する更に大なり。次で講堂に入る。恰も当校同窓会開催の折柄にて静粛々々の声喧し、一名の盲生、乃ち衣を摂げ壇に昇り口を開て、同会の主義精神に就て滔々数百千言を陳じ、切に同会の振起永続を望むと述べ、やがて点字規則書をなで之を衆盲に吹聴す。嗚呼敏なる哉彼の指頭官能、吁鋭なる哉彼の知覚、あはれ第二流の保己一は此校舎に訓育せらるべし、など嘆賞し、廊下に出ればこゝに案内教員の自由参観をといふ。乃吾人は訓盲に便せる亜鉛板製凸凹の日本及世界地図を見閉目其面をなで其の便益の多大なるを感賞し、次で図書彫刻、指物及裁縫授業など一々参観し来りて吾人は一種異様の感に打たれぬ。嗚呼不便なる哉盲唖幾百、吁熱誠なる哉教員諸氏、恐くは他に之を比すべきもの非ざるべし。二時を過ぐる数分、辞して自由に分散せり。或は大学植物園に三千余種の植物を覧るものあり、或は銀座に電車の便を借るものあり、或は阪本氏等を訪ふものあり。十時就寝、噫吾人の此の夜の夢はいかに結ばれたりしか。

神宮皇學館本科「平安ふみわけ衣」（明治三十四年）・「四年生修学旅行日記」（明治三十八年）（館史）

○泉岳寺詣で（七日）

京春生

昨夜より降り出しし雨は猶止まず、されど我等の此地に止まるも僅に二日を余すのみなるに、未だ見ざる所も多ければ、徒に宿にあらむも惜しく思はれしまゝ芝区を遊覧する事となしぬ。小川町より電車に乗じて土橋に到り更に南行して愛宕町二丁目にて下車し此処より愛宕神社に詣づ。

山頂に達するに男女の二坂あり共に石灯にて一は急他は緩なり。男坂は中央に鉄鎖を繫ぎて昇降に便にせり。是を登り詰むれば正面に一祠あり是即本社なり。其左方に一高塔ありて其形浅草凌雲閣に似たり。高さは後者に比すれば遙に低きも良所に存在せるを以て眺望は更に佳なり。即市の殆ど全部を看瞰し従来の歴遊せし所一々指摘して見る事を得更に記憶を深からしめたり。唯惜しむらくは降雨の未だ止まざる為に品川湾上朦朧として其の遠景を見るを得ざりし事なり。程なく降りて此度は女坂によりて山を下り丘麓の間道によりて増上寺に赴く。道の右側に清松寺あり今は補充兵の屯所に充てられたり。

増上寺は芝公園内にありて丘陵を負ひて建てられたる大伽藍なり。山号は三縁山と称し関東浄土宗の総本山にして十八檀林を支配せり。徳川家の帰依甚厚かりしを以て将軍の遺骸は上野寛永寺とこの増上寺とに交互に葬られたり。斯の如き由緒あるを以て其規模の大なるは言を俟たず其霊廟の如きは真に輪奐の美を尽せり。本堂の前に宏大なる朱塗の山門あり。円山は公園の東南隅にありて風景甚佳なり。此辺りに東照宮、紅葉館、伊能忠敬表功碑等あるを一覧して園内を出で三田四国町を南行し高輪に至る。此附近は一帯品川湾に沿へり。軈て車町に出で道を右曲すれば程なく泉岳寺にいたる。

境内甚広からず堂塔亦さまで宏壮ならねども参詣する者の絶えざるは云ふ迄も無く武士道の好模範たる赤穂四十七士の墳墓あるを以てなり。小さき仁王門を過ぎて本堂に詣で直に義士の墓所に急ぐ、道に瑶池梅、主税梅あり又かの堺の義商天野屋利兵衛碑、首洗ひ井戸等あり。数段の磴を登りて墓所の門に入れば右側に浅野長矩及其室瑶泉院の碑あり。此は門扉を閉ぢて一般の出入を禁じたり。四十七士の墓はその左方にあり。かゝる日なるにも拘はらず参詣の人は踵を接し香の煙は絶えず昇りぬ。是を以ても義士の誠忠が如何に後人を感ぜしむるかを知るべきなり。余は素より義士の挙を壮烈なりとして常に之を敬慕し赤穂復讐録、同義人録、四十七士銘々伝等は最も好読するものなれ共未だ泉岳寺を見ざるを常に遺憾とせしが、此日遂に其宿志を達して身親しく其墓碑に詣づる事を得心欣然として為に雨中行路の苦も何時しか念頭を去りぬ。即襟を正して大石父子の墓前に拝し次で他の四十五士の碑を一々吊へり。此頃蕭々たる雨は未だ止まず而も濡れし墓の前に、細く長き香の煙の立昇れるを見て余は一種不可言の感に打たれ暫しは時の移るも知らで佇みぬ。留まる事やゝ久うして義士堂に至る。内には義士の像を安置せり、其木像に二様あり一は身長凡そ一尺余にして一は二尺余なり。或は槌を携へたる者槍を立つる者或は刀を按ぜるあり半弓を擬せるあり、孰れも討入当夜の装を示せる者なり。又本堂の左に義士遺物陳列場ありて芳名を千載に伝ふべき義士の面影を忍ぶに足れる遺物を集めたり。されど時間の迫れる為詳細に見る事を得ざりしは真に遺憾なり。かくて赤門を出でぬ。再元の道に出でゝ上野行の電車に乗じ右に蒼海漫々たる品川湾を臨み左に高架鉄道の大工事を見つゝ程なく新橋を過ぎて銀座通を経万代橋にて下車し一旦旅宿に帰りぬ。

因に記す、義士墓所の位置は城の西北隅に良雄の墓あり、良金のは西南隅にありて其他は東西南に各十個北方に六ケ中央には二列にて十個並列せり。

直ちに小石川区に向ふ。蓋し在京の學館に関係を有せらるゝ諸氏を余等と懇親会を古事類苑編纂事務所にて催さむとの約ありしを以てなり。砲兵工廠に沿ひて北に進み戸崎町なる該編纂所に到る。此の所は市内なれ共やゝ人家を離れ閑静なる地にして書籍の編纂には最も適せり。会は一時より開かれしが、松本博士先起ちて学問には疑を抱くこと最必要なる事につき一場の演述を試みられ、次で下田

義照氏は皇學館の沿革につきて詳細に述べられ、また特に参会せられし編修員広池氏学問の趨勢といふことにつき熱心に演ぜらる。孰れも興深く益を得る大なり。それより会員交所思を吐き和気藹々たる中に此日の後半を送れり。かくて淡雲の四周を包み終りし頃此処を辞しぬ。宿に帰れば以前に本館の体操科を受持たれし島田曹長が中西教授及余等を尋ね来られたれば復こゝにも壮快なる談話を交換せり。此時雨は既に止みて星も二つ三つ見えたれば明日の天気を念じつゝ臥床に入りぬ。

○竹橋連隊縦覧（八日）

木舟稿

上京以来已に七日少々疲労も出たと見え、なか〳〵の朝寝、一同膳に向つたのは八時過ぎ。嘗て神宮警護隊に居られた時我館の体操科を受持たれた島田軍曹否今は曹長が昨日態々宿を訪はれた際、明日は是非共連隊を縦覧に来い案内するからとの厚意を告げられたので、今日鎌倉に向つて出立すべき予定であつたのを曹長の厚意を無にしない為め且つは連隊を縦覧したいので出立を明日に延して竹橋連隊縦覧と同行十名が不愛相極まる下女のお秋どんに送られて宿の門を出たのが彼此九時過ぎ。

九段坂を昇り詰て今度出来た川上大将の銅像の処を左に折れると柳を左右に厳めしい営門が見える。中西先生先づ番兵と談判、暫らく控所で待つて居れとのことで一同其処の腰掛を占領した。懐かしい曹長は不相変勇しい歩調で出て来られて先生との話の中遺憾々々の声が度々聞えるのでハテ変だと思つて耳を傾けると、昨日深川でペストが発生した為め縦覧は謝絶すること、なりました、誠に遺憾に堪へないですが命令ですから不悪……では致方もない折角御躰を大切に……とは相互の挨拶、再び営を潜て坂に出て見送ると悄然として営門に立つて見送つて居らるゝのは曹長であつた、

今日は予定外なので別に行く可き処もないので各自歩を運ぶこと、成つた。明日は出立、土産も買つた、用意も出来たどれ一寝入と夜具にもぐり込んだのが彼此夜の十二時頃。今夜國學院学生総代二名が態々訪問せられて学生一同からとてみごとな夏蜜柑を沢山に贈られた。誠に感謝に堪へぬ次第である。

○黙想（九日）

紫丘

家にあれば旅をし思ひ、旅にあれば家をし思ふ。しかも年来の理想なる東都の春をこゝ一週間に見をさめて、転た神都の夕、緑を洗ふ鑾川の畔を慕ふ人とはなりぬ。行く春の短かきを怨んで女神の前に訴ふる詩人にや笑はれなん。朝早ければ電車静なり。千代田城頭残月淡く澹水眠つて風波立たず、実に万年の平和又乱るべくも見えず。新橋を発して鎌倉に向ふ。車中七日間の記憶を辿つて所謂東京観を黙想しぬ。戦時の東都、陽和の春色、果して何物を描きたりしか。

一行は品川より泉岳寺に赤穂烈士の墓を訪ふ。四至広からず、堂宇華ならず、しかも寂として薫香碑石を捲き勇魂真に眠れるかを疑はしむ。吾人は横浜を徒らにパスせしを怨む、外国貿易の起点、進開のモデルを一連の洋館、数林の船柱に推考せむ事の愚なるを悲めり。大船より乗換へて鎌倉に着す。

鎌倉

樹陰小暗き山又山、一方活然たるは由井七里の長汀、此に一流の白旗翻りてより右大将の幕府は引きて百五十年の歴史を演出しぬ。最も価値ある希有の大舞台は形造せられ其の廉潔忠誠の風は長く志士文人の黙想を深からしめ、平心黙想以て武士道の根源たるを感ぜしむるにあらずや。友よ此の大舞台の尚狭小なるを云ふ勿れ、其の遺跡を湮滅せるものとして軽評するをやめよ。古跡に入つて其の時人の眼と合せざれば以て真趣味を得難からむ、評せんとせば時代眼を以てせよ、鎌倉は広大なり、精神上の遺物は長く遠く日本魂の基を開けり。吾人は佐藤氏の

神宮皇學館本科「平安ふみわけ衣」（明治三十四年）・「四年生修学旅行日記」（明治三十八年）（館史）

鎌倉大観の一節を読めり、曰く

鎌倉武士は鎌倉の全体を以て城と見做したのである。決して此谷の中に小城廓を築き防禦などして自ら守り、他を排斥する様な小胆な事はしない。肝胆相照らして相交り、此の土地を愛し此の地に住んだのである。頼朝公を始として決して城壁など築かぬのである。築かぬものは遺る筈はない。即鎌倉武士は七切通、即西より順序に云へば極楽寺、大仏、（化粧脱）亀ヶ谷、巨福呂、朝比奈、名越の七切通内を以て一城として守つたのである。

と云々、又曰、

鎌倉時代は質素を主義としたのである。金殿玉楼を営む代りには天下の民力を養つたのである。作らぬ金殿玉楼は遺る筈はない。故に鎌倉の古跡を訪ふ者は、唯乱雲蓬草の間に古英雄の跡を訪ふのみで、若宮大路の松風と、由井が浜の白浪とが、懐古遊覧者の感想に上る主なるものである。云々

あゝ此の史長く滅せず、吾人は其高潔の武士が眠れる地を踏んで古を偲ばんと欲す。

鶴岡八幡

鶴岡の語韻は吾人をして直ちに鬱々たる銀杏の蔭、別当公暁の容態を想起せしめぬ。しかも其の宮の歴史は自ら忘却せられむとす。宮は是れ鎌倉とその歴史を共にし、其生命を仝じくするもの、其の由来を尋知すべき勿論なりとす。

頃は康平六年の秋、頼義東征の途に上るや、石清水の八幡を由比の郷鶴岡に勧請し、武運の成功を祈りぬ。其子義家宮を修理し、頼朝の之を大臣山の麓に遷してより宮居堅く屋棟動かず、長く当時の姿を変せずと。学びの子等が一度この感深き楼門の下に立ちて、眼下を遠く望見せんか、若宮路傍韶風ゆるく、古松の楽韻今も古英雄の霊を慰するを思はむ。半円の赤橋街衢に依然たる、共に昔を偲ぶ料ならずや。（赤橋とは現今の石橋の事なり寿永の頃には板橋にて赤く塗りたれば此の名伝はれり）

階下の大樹めぐり一丈を余すべし、しかも尚公暁を隠せしを疑ふ。実朝の退出夜陰なりとは云へ、将軍の威勢尚厳なり、随従の士尚眼あり、安ぞ公暁の身を保つて其の珍事を成さしむるを得んや。必ずや露兀たる現時の樹陰ならざるべし。神社古画幅を蔵す、之れを見るに、銀杏の下廻廊あり、然れば平人是より内に入るを許されず。従つて公暁身を隠すに便なり、実朝の備なきも亦宜なり、画幅によりて其の史伝の真なるを知り、現態又当時其侭のものならざるを知りぬ。

壮厳なる殿宇、朱色あせず、人をして粛然襟を正さしむ。楼門の額は良恕法親王の筆跡なり。鎌倉時代の古物は廻廊に陳羅せられ、勇士の甲冑魂もこもるべく、刀剣水をも散すべく、旌旗軍配、翻れば雄たけびも起るべく、招けば百騎も集るべし。あゝ鎌倉の一事一物何物か古を偲ばざるものあらんや。

本社の西方白旗明神あり。これ頼朝を祭れるもの、天正十八年秀吉此に参詣して頼朝の像を撫して曰はく、卑賤より起りて天下を一統したる唯足下と吾とのみ云々千古の英勇、この眠れる偉人の肩を叩きて去りしは即此の社なり、春塘かつて詩あり

遺像突兀見覇才　秋風蕭条古鎌台
更有後人恝於我　不唾面来撫背来

前面の蓮池は政子の掘らしめしもの、東池に白蓮を、西池に紅蓮を植ゑ、源平の旗色を摸せるもの、三伏の夕、直衣涼しく此の池堤に立ちて、両軍の対陣を想ひ、眉間に笑を浮べし勇士の粋又以て貴きかな。

英雄の舘と墓

高時が鶏又は犬を挑合せしめて楽みし鳥合の原に師範学校は設立せられあり。東はこれ右大将の舘ありし地、南は畠山重忠の邸址、西には三浦泰時の旧址あり、其の荒廃一物をとゞめず、所謂牧童馬をかりて田圃の間に微吟するを聞くのみ、而も此の歴史的遺物に接触して学を此の舎に修むるもの、其脳裡果して何物か蔵する、必ずや千古不朽の美史を刻しつらむ、あゝ吾人は其の人等を羨あり。先き

に東都は実に学ぶの地なるを感じぬ。而もそは書に便なるにあり、実地を踏みて真現象に接するを得べからざるなり。此点より云へば歴史の地に歴史を学ぶの力至大なるを感じぬ。舎窓より洩れ来る絃誦の音は吾人に一種の感を与ふると共に、古英雄の魂をして墓下に喜悦の笑を生ぜしむるものあらむ。行く事一、二丁、大倉山の中腹に一世の偉人頼朝は永く眠れり。墓石は五重高さ六尺に余るべし、囲むる石垣あり、薫香煙らずと雖、花筒の莽草尚枯れず。かくて蓋世の英雄は五十三の春浅く遂に永眠せり。碑石語らず、緑苔重く、見るもの涙なき能はざるものあり、鴨長明が懐旧の涙に一首の歌をとゞめしはその情の余れるものあり。

草も木もなびきし秋の霜消えて　空しき苔を払ふやま風

夫より吾人は急坂を攀ぢて、大江広元、島津忠久の墓を訪ふ。頼朝の墓は一の記標に過ぎずと雖この両者の墓石周垣その前者に勝る何程ぞや、これ後裔の修理ありしが為めのみ、しかも一世の偉人は黙して笑めり。

因曰。民間一般の墓も古代の空居風の空を横に掘りて其の内に墓石を建てたり、之れ鎌倉の特風なり。此両者もこの式なり。

鎌倉の宮

あゝ南北の争は人臣をして至尊を軽ずるに至らしめき。さすがに後醍醐帝の賢明英聡は黙してやまざりき。中興の業は成りぬ。業成りて心襟は安しぬ、されば始めは尊氏の野心も竜眼には写らざりき、父帝が黒白の酒に酔うて即位の式に喜ぶ日を残して、慨然立つて法衣を纏ひし大塔の宮は尊氏の野心に心痛めぬ。宮は実に聡明なり、その賢才は終に尊氏をして讒せしむるに至りぬ。あゝ天なる哉、建武の元年花葩残りなく緑蔭暗き五月の夕、二階堂東光寺の土窟に尊き血の迸る御身は幽閉せられぬ。土窟は宮の後にあり、周柵堅く閉ぢて親しく見るべからずも、外より之れを窺へば窟口を去る一間程の所より急に深く凹みて陰気穴に満つ、明治の初年迄は出入自在なりきと、村老の談によれば内十畳を布くべしと。宮を監せし直義は遂に涙なきも、侍女南方が牢前に侍して情深き奉仕は、幾分か宮の心を慰めしものあらむ。かくて暗澹たる内に誦経の声微かに一年を過しし事、吾人は追懐するに堪へざるなり。あゝ直義は終に人にあらざりき、時行に追はるゝや、淵辺義博をして害はしまつりぬ。以後五百年暗に消えむとせし宮の遺勲は、明治三年勅ありて社殿の造営あり、六年に官幣に列せられぬ。宮も始めて逆立ちし髪をや和ぎけむ、鳥居に掲げし鎌倉宮は今上天皇の御筆跡と承るもいとかしこし。社前の東南に小瑞籬あり、これ淵辺を御首を捨てし所と聞く、御陵も近き山にあり、御陵は望見するのみにて之れを訪ひ奉らざりき。

吾人はこれより薬師堂より建長寺、円覚寺に至る、時宗の墓、尊氏の墓を訪ふ、前者は宏壮完備せり、国難に当りて泰然たりし豪勇は長く後人をして逸遊の眼を醒めしむるものあり。後者は才あり勇ある国賊なりき、後人修せず、唯一土穴の内其の趾を存するのみ、碑石廃散し、暗に地下悪鬼の苛責に苦めるもの、如し。吾人は茲に至りて慨嘆しぬ、しかも其の碑石を鞭たんとするものにあらず。あゝこも亦歴史の遺跡なり、後人をして憤怒せしむるもの、憤怒は之れ忠君愛国の有効なる刺戟剤ならずや。徒らに毀ち去つて又何かせん、歴史の遺物は一人一代が私にすべきものならず。世と共に保存すべきものなり。然れば鎌倉の土礫草莽一として史家の眼に値なきものあらむや。

其の夜、雨細かに転感を深からしむ、吾人は宿を求めて、やがて又黙想しぬ、あゝ黙想黙想、黙想は終に吾人を夢想の人とならしめき。

○高吟（十日）

夢想は全く消えぬ。若宮大路雨細やかなる間に、古く立てる松の並木を数へつゝ、長谷の大仏を訪ふ。大仏は建長四年八月稲多野尼の尽力によりて成れるもの、鎌倉の一大遺物なり、御輿が嶽の西麓、古松老杉緑を争ふ中に端然露座して衆生済度の相を備へたり。吾人は先年南都に遊んで大仏を見たり、宏大是にも勝るものあれど殿宇之を蔽ひて、其の威厳、其の容姿の全躰を見る事を得ざるを惜

みき。こは泰然端座して、殿堂の之れを妨ぐるものなければ、近く仰ぎ、遠く眺め、以て其の偉大の遺物に昔時を偲ぶを得たり。吾人は此を辞して、長谷観音を右に眺めつ、極楽寺坂を雨になやみて電車に乗れり。電力一度動けば吾人は漂渺たる白砂千里の境に輸れぬ。白浪岸を噛んでその響恰かも鎌倉武士が馬蹄の音を止めたるに似たり。あゝ此の七里が浜、由比の渚は幾多の文学と清廉の気概を発せる所ならずや。遠く伊豆を望むべく、近くは関東の勝地江の島の浮べるあり、あゝ吾人は高吟しぬ、大叫しぬ、実に宛たる画幅のみ。

片瀬に下車して江の島に至る、沙渺を行く一、二丁、白浪足を襲ふ所より蜒蜿たる桟橋ありて島に達す。島は四周断壁怒濤岩に散する様、婦女子は魂を失ふべく、懸崖鵬鳥の巣食ふを見ば、詩人は実に雀躍すべく、実に湘南の名区に負かず。雖然島はあくまで開化の島と成り終りて、自然の風致を害せるは実に詩人歌客の嘆する所なり。旅店高楼軒を連ねて関東逸遊の客を招けり。島に江島神社あり、三社に分れたり。島の背後に下れば岸壁険はしく白馬頻りに岸に駈走す。瞻れば断崖落ちんとし、瞰せば千尋鯨鯢ひそむべき其の間を蹈歩に胆を冷しつゝ、竜窟に至る一条の仮橋を渡る、二、三十間を進めば石仏など安置せり、空海、慈覚、文覚等参籠して各神像を刻みて将軍日を定めて参詣するに至れりとぞ。其の険崖に海士群集して客人に請ひ怒濤の中に入りて螺を拾ひ来る、其の修練都人を驚かすものあり。

吾等は江の島を去り、片瀬に帰り、竜口寺を訪ふ。伽藍宏大日蓮の威力亦大なるを思ふ、此の近傍は鎌倉時代の刑場なり、建治年間杜世忠、何文著等の蒙使を斬りしも此の所なり、寺内罪人を座せしめし敷皮石残存せり。片瀬より藤沢に出で汽車に乗ず。

一連の汽車は轟々と今御殿場に出でたり。車窓雨斜にして暮色亦襲ひ来れり。幾千の乗客は仝時に胸を騒がせぬ。あゝ富岳終に見るべからざるか、詩人も困じぬ、歌人も黙しぬ、賤夫野人は号叫天を恨めり、あゝ霊岳終に見るを得ざるか、今や富士川を残さんとせし時、見る〳〵雲散して富岳天に聳えぬ、車客は同音に高号しぬ。長く其のどよみは絶えざるも、心なき雲は瞑々の間に隠し去りぬ。車外全く暮れたり、吾人は其の美しき霊山を胸に描きつゝ暗を走るなり、其の夜豊橋に一泊して十一日出帆の汽船を待つ。

○旅の疲れ（十一日）

正午乗船す。船は驚くべき穢き、小さき、遅き船、されど海は静かに平なりけり。翼低う飛ぶ千鳥、静かに浮ぶ伊勢の島々、而も吾人はその狭き一室に身を横へしま、遂に眺も不平もなく熟睡せり。醒むれば船は静かに止まれり。月はおぼろに我等が船を守れり。あゝ神都の月情深しや。

〔付記〕本資料の翻刻・校正は、これまで館史編纂業務を担当していた元当センター准教授・大平和典氏によるもので、同氏が在職中の令和元年度に本紀要原稿として投稿されたものである。

（研究開発推進センター記）